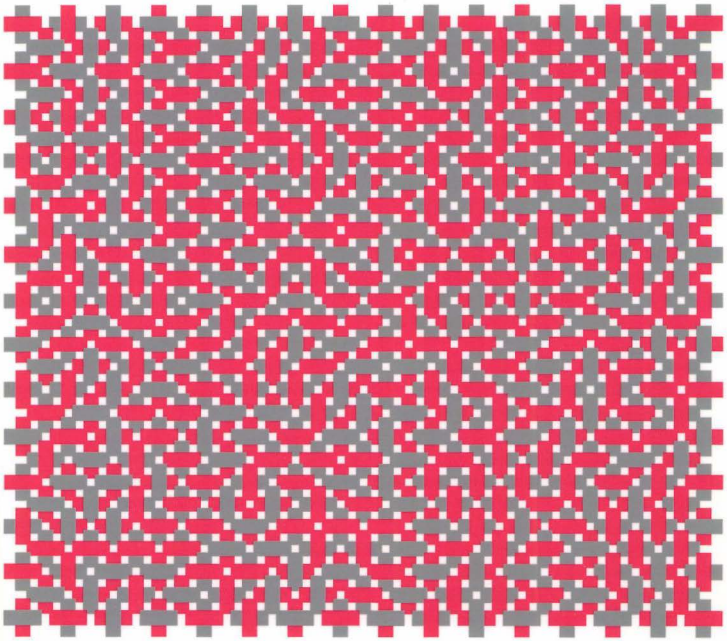
武士の娘

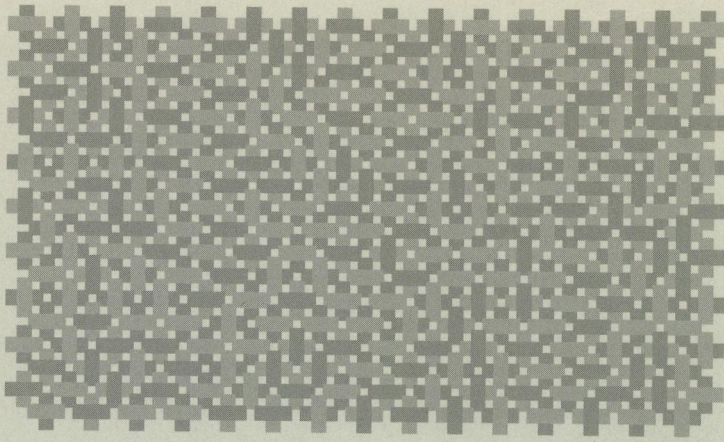
日米の架け橋となった鉞子（えつこ）とフローレンス

Uchida Yoshio

内田義雄

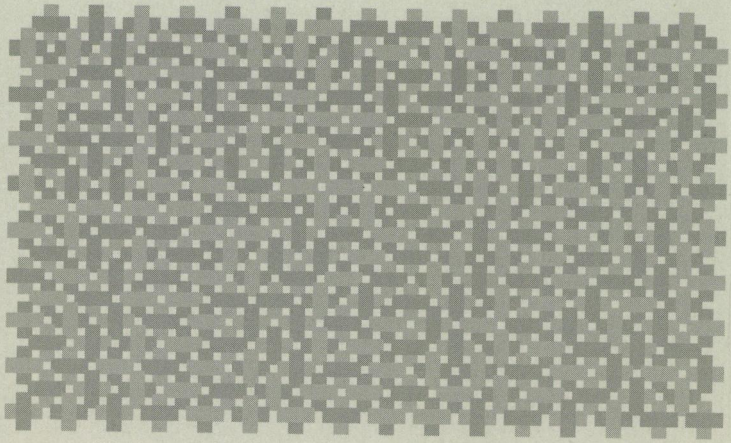


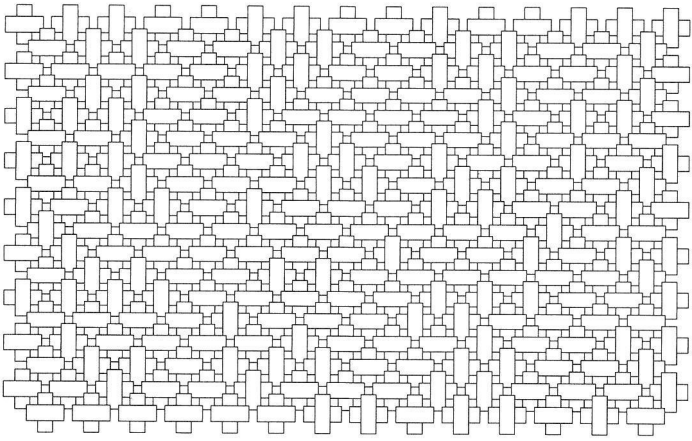
プラスアルファ



武士の娘

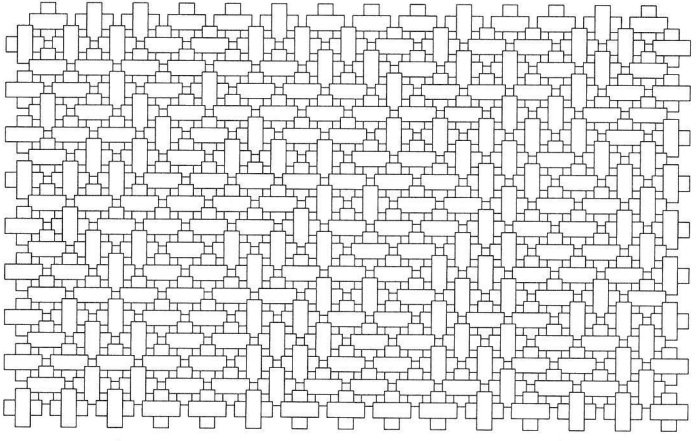
内田義雄





武士の娘

内田義雄



講談社＋α文庫
プラスアルファ

まえがき

杉本鉞子（えつこ）『武士の娘』（*A DAUGHTER of the SAMURAI*）のように、日本人が最初から英語で書いて外国人に感銘を与えた本は、明治以来何冊かある。

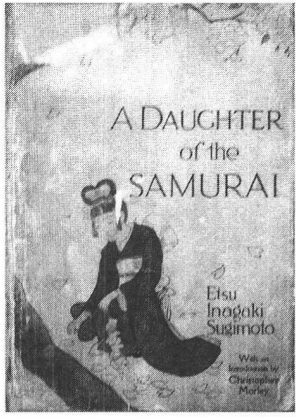
内村鑑三の『日本および日本人』（*Japan and the Japanese* 一八九四年〔明治二十七年〕、一九〇八年改訂され『代表的日本人』（*Representative Men of Japan*）として再刊）、新渡戸（にとべ）稲造（いなぞう）の『武士道』（*Bushido, The Soul of Japan* 一八九九年〔明治三十二年〕）、岡倉天心の『茶の本』（*The Book of Tea* 一九〇六年〔明治三十九年〕）等である。

日露戦争の際、新渡戸稲造の『武士道』を読んだセオドア・ローズヴェルト大統領は、終始日本に同情的で、戦争終結を望んでいた日本のためにロシアに働きかけ、講和への道を開いてくれた。第一次世界大戦後、フランス首相ジョルジュ・クレマンソーは、内村鑑三の『代表的日本人』を読んで感銘をうけ、健康さえ許せば日本に行きこの思想家と話したい、と語っていたという。内村の本を読んで日本を再認識したのである。

そしてなによりも、これらの本は、近代社会へと舵を切ったばかりの日本人の文化的素養や考え方を世界の人たちに知らしめて、日本は「信頼に値する国」であるという国際世論の形成に大きく貢献したのである。

杉本鉞子の『武士の娘』はそのなかで最も新しい一冊だったということができる。越後長岡藩の元家老の娘に生まれた著者の半生をつづった本である。

新しいといっても刊行されたのは一九二五年（大正十四年）のことであるが、おそらく前掲の三冊よりも海外で幅広い読者をかくとくし、大きな感銘を与えた。アメリカの識者はこの本を「人生の書」であると評価し、ある作家は「歴史が正しく語られさえすれば、つくり話の小説など何の役にもたたなくなる」というウォルト・ホイットマンの言葉を引用して賞賛した。『武士の娘』はまさに「歴史が正しく語られた本」だというのである。ホイットマンといえば詩集『草の葉』で知られるアメリカの国民



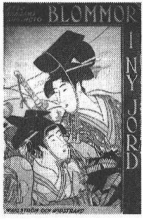
アメリカで出版された初版本カバー

的詩人である。アメリカでまったく無名の著者の作品を、ホイットマンの言葉で賞賛するというのは異例のことだった。

当時、評判になっていたスコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』やアーネスト・ヘミングウェイの『日はまた昇る』に伍して、『武士の娘』は一時的とはいえアメリカでベストセラーになり、フランス（一九三〇年）、イギリス（三三年）、スウェーデン（三四年）、ドイツ（三五年）、デンマーク（三七年）、フィンランド（同上）、ポーラ















左上から右へ、フランス、イギリス、スウェーデン、ドイツ、デンマーク、フィンランド、ポーランドの各国版カバー
（長岡市郷土史料館所蔵）

ンド（同上）など七ヵ国で翻訳され出版された。

ところが『武士の娘』は日本ではごく一部の人たちにしか知られてこなかった。

戦後かなり経ってからであるが、幕末の知られざる英傑として越後長岡藩の河井継之助を描く『峠』を書いていた司馬遼太郎は、長岡に取材旅行をした際、郷土史家の内山喜助にすすめられて、『武士の娘』（大岩美代訳）を読んだ。のちに司馬は、雑誌『文藝』の「名著発掘」の欄で、こう書いた。

「日本には『福翁自伝』のほかにいい自伝がないとおもっていた。ところが数年前、新潟県長岡市の図書館で借りだした杉本鉞子さんの自伝の見事さにおどろかされた。長岡からの帰路、『白鳥』（筆者註＝特急）の車中で読み、京都についたころ読みおえたが、ひさしぶりにいい小説を読んだあとの文学的感動を覚えた。同時におもわぬ書物を発見したよろこびをも覚えた」（『文藝』昭和四十二年五月号）

『武士の娘』がアメリカで出版されてからすでに四十二年、作者の杉本鉞子が亡くなってから十七年が経っていた。司馬にとってまさに「名著発見」だったのだ。ところが司馬にも知らないことがあったのだろう。続いてこう書く。

「しかしそれはつかのまだった。その年の講演旅行で河盛好蔵氏とご一緒だったが、私が

『発見者』としてそれを語ると、『ああ、あれ』と、河盛氏はうなずかれた。その書物への十分な知識と高い評価をもっておられ、あれはすぐれています、しかしながら知られざる書物ではなく、戦前、それが刊行されたときは非常に評判でした、とつけ加えられた。紅顔経ヲ談ズというところだった」（同前）

フランス文学者河盛好蔵が、「戦前、それが刊行されたときは非常に評判でした」というのは、『武士の娘』が一九二五年、アメリカで出版されたときのことをさすものであろう。河盛は一九二八年から二年間フランスのソルボンヌ大学に留学している。評判になった『武士の娘』のフランス語版が一九三〇年に出ているので、それを目にした可能性もあるが、世界の文壇の動きに通じていた河盛は海外における『武士の娘』の評価をよく知っていた。

司馬遼太郎は『武士の娘』の翻訳のすばらしさにも感動した。『文藝』でとりあげてくれたことに感謝する手紙を出した訳者の大岩美代にあてて、司馬はこう返信している。

「いいお手紙をありがとうございました。あの訳文のぬしである大岩さんから直接お手紙を頂こうとは思わなかっただけに、驚き、またうれしうございました。ああいう文体の日本語はもはやほろびようとしていますが、あの美しさを、あれほどみごとにお書きとめて

下さったことは、われわれの日本語のために、大岩さんにどれだけ感謝していいかわからぬ気持ちです」（司馬遼太郎から大岩美代へ、昭和四十二年五月）

大岩美代訳で『武士の娘』の日本語版が長崎書店から出版されたのは、昭和十八年（一九四三年）のことである。日米戦争の真っ最中であった。読んだ人はごくかぎられたことだろう。ところが戦後間もなく、アメリカやイギリスでは『武士の娘』が再版されている。この本への海外での評価は戦争を経ても変わっていなかったのである。

『武士の娘』の日本語版が復刻されたのは、戦後十五年経った昭和三十五年、筑摩書房の『世界ノンフィクション全集』にその抜粋がおさめられてからである。その後単行本や文庫本になり、文庫版は刊行から二十年、現在でも年に五千部以上の増刷を続け、多くの読者をえてきた。だが司馬遼太郎がそうであったように、戦前も戦後も『武士の娘』は日本ではほとんど知られていなかったし、作者の杉本鉞子は日本では無名に近い[註]。

『武士の娘』が海外で読まれ賞賛された一九二〇〜三〇年代は、繁栄と幻滅の時代である。豊かな社会が実現し、幅広い中産階級が生まれ、日々の暮らしがよくなった。同時に、それまで家庭や社会を支えてきた宗教やモラルへの信頼がゆらぎはじめた。人々はなにか自信を失い、不安を感じるようになる。破局は間もなくやってきた。世界恐慌、そし

て狭量な愛国主義の台頭である。社会は混乱し、既存の政治制度が機能しなくなる。どこか今日の時代に似ているのである。

その時代に『武士の娘』で描かれた日本人の考え方や生き方が海外の読者に感動と共感を与えた。それはなぜだったのだろうか。私はそのことにいい知れぬ興味をひかれる。『武士の娘』はどのようにして書かれたのか。この本で鉞子はなにを語ろうとしたのか。日本の片田舎に生まれた杉本鉞子の『武士の娘』が、なぜ海外の読者に感動を与え高い評価をえたのか。杉本鉞子とはいったいどういう人だったのだろうか。

［註］杉本鉞子（一八七二～一九五〇）は、『武士の娘』（一九二五年）のあと、『成金の娘』（一九三二年）、『農夫の娘』（一九三五年）、そして『お鏡お祖母さま』（一九四〇年）を書いている。すべて原文は英語である。

目次

まえがき　3

序　章　**エツ・イナガキ・スギモト**　15
突然の訪問者／輝いていた「武士の娘」／あるアメリカ人女性の存在

第一章　**幕末維新に翻弄される父と娘**　29
まさかりのような強さを願って／四書からはじまった教育／武士の商法／孤高の人／幕末の越後長岡藩／河井継之助の台頭／決定的となった対立／「恭順こそ長岡藩を救う道」

第二章　**戊辰戦争と明治の稲垣家**　61
決裂、そして破滅へ／長岡落城／平助が死を覚悟したとき／裏切り者の烙印／大久保利通に面会／「お江戸のお祖母さま」／認められなかった貢献／封印された父の事跡

第三章 **婚約、そして東京へ** *95*
兄平十郎のこと／命の恩人がひらいた未来／東京への旅／「海岸女学校」／
鉞子はなぜキリスト教徒になったのか？

第四章 **空白の五年間** *119*
給費生の義務／浅草の「みんみん学校」／「たけくらべ」の世界／慶印寺に眠る人／
時代のなかの鉞子

第五章 **アメリカへの旅立ち** *145*
オハイオ州シンシナティ／親日家ウイルソン家の人たち／フローレンスとの出会い／
とまどいと支えと

第六章 **フローレンス・ウイルソン** *163*
オハイオ川にはぐくまれた町／国を二分した内戦／デポー女学院と卒業エッセー／

フローレンスの日本滞在／文筆にかける信頼関係／冷静な目からの日米文化比較

第七章 **帰国** *195*

兄と妹／アメリカ世論の変化／破産、そして夫の急死／再び日本へやってきたフローレンス／娘の教育と夫の実家に悩む鉞子

第八章 **賞賛された「不屈の精神」** *215*

シンシナティへ再び／ニューヨークの生活／クリストファー・モーレー／コロンビア大学非常勤講師／ベストセラーとなった『武士の娘』／なぜ賞賛されたのか／「期待される日本人」像

第九章 **協力者の死と戦争への道** *247*

第二作『成金の娘』／蔭の人であり続けて／もうひとりのフローレンス／顕示欲の強い人／『農夫の娘』／『お鏡お祖母さま』執筆の背景／非戦への思い

第十章　**鉞子が遺したこと**　*279*
『武士の娘』日本語版出版／空襲下の神戸／『菊と刀』への影響／焼け野原の東京／アメリカの友人たちとの再会／青山墓地にともに眠る

終　章　**黒船（The Black Ships）**　*303*

あとがき　*310*

文庫版あとがき　*316*

＊本文中に引用した英文の書簡、新聞・雑誌記事、書籍、詩と、『武士の娘』『菊と刀』の一部は筆者の訳による。また、引用文中に適宜ルビをふった。
＊本文中の敬称は省略させていただきました。

「一冊の本物の本に出会うときは、恋におちるようなものである」

クリストファー・モーレー

There is no mistaking a real book when one meets it.
It is like falling in love.

Christopher Morley

序　章　エツ・イナガキ・スギモト

突然の訪問者

杉本鉞子は、過去に生き、現在に生き、そして未来に生きた人である。

ニューヨークの夏は暑い。一九一八年（大正七年）八月のある日、端正な背広姿の青年紳士が、マンハッタンのモーニングサイド・ハイツにある杉本鉞子のアパートを予告なしに訪ねて来た。この年は日照り続きで、まだ身を刺すような暑さが続いていた。

この人物は、フィラデルフィアの『イブニング・パブリック・レジャー』紙のクリストファー・モーレーと名のり、「エツ・イナガキ・スギモト夫人はご在宅ですか」とたずねた。ドアを開けた鉞子はびっくりして「わたくしがエツですが……」と答えるのが精一杯だった。

新鋭作家の鬼才としても話題になり、写真が文芸雑誌に載っていたモーレーその人が、突然目の前にいるのである。[註1]

鉞子は外出から戻ったばかりで黒い夏物の薄絹の着物をまとっていた。いつもの鉞子だときびきびした高い声で話すのだが、このときは話しにくそうだった。

「わたくしのエッセーになにか問題でもあったのでしょうか」と鉞子は気を取り直してた

ずねた。鉞子が寄稿したエッセーが、同紙に七回にわたって掲載されていたからである。

モーレーは答えた。「いいえ、そうではありません。毎日、ヨーロッパ戦線（筆者註＝一年前の一九一七年四月にアメリカも参戦した第一次世界大戦）の暗い記事ばかりのなかで、貴女のエッセーは清涼剤のような役目を果たしています。ユーモアとウイットに満ちていて、とても評判がいいですよ。ニューヨークに用があって来たので、ちょっと立ち寄っただけです」

モーレーはそれだけ話すと、鉞子が急いで出した冷たいソーダ水に口もつけず、そそくさと暇乞いして帰って行った。鉞子は椅子に座りこんだまましばらく茫然としていた。モーレーは一体なんのために訪ねて来たのだろう？

このとき鉞子は四十六歳、二人の娘をかかえる未亡人だった。

鉞子はこのところ、少しでも生活の糧になればと考えて、新聞・雑誌にエッセーを寄稿してきたが、ほとんど採用されずに送り返されてきた。今回初めて同紙にエッセーが掲載され、鉞子は小躍りして喜んでいたのである。「（渡米の際洋装をすすめた叔父と和服にこだわった祖母）どちらがモダンか」（五月十日掲載）、「（矛盾にみちた）犬の社会的地位」（八月九日掲載）など、日本とアメリカという二つの国の文化や風習の違いをユーモアをまじえ

て描いたエッセーである。当時同紙は「独立宣言の町」ペンシルヴェニア州フィラデルフィアの最有力紙である。モーレーはそのコラム・エッセー欄の編集責任者であった。

のちに鉞子とモーレーの交流が深まったとき、この日のことが話題になった。モーレーが「あのときは、興味あふれるエッセーを次々に寄稿するエツ・イナガキ・スギモトとは本当に実在する人物なのかどうかを確かめるために訪ねたのです」と明かすと、鉞子は「さぞやわたしがおばあちゃんに見えたことでしょうね。あのときは、歯医者で前歯を全部抜かれて戻ったばかりのところで、痛いのを我慢して応対していたのです。あなたがすぐに暇乞いをしてくださったので本当に助かりましたわ」と話し、大笑いになったと鉞子は回想している（鉞子は恐らくそのころから入れ歯である）[註2]。

杉本鉞子に半生記を書くよう強くすすめたのは、クリストファー・モーレーだった。モーレーは若いころ、アメリカの成績優秀な学生に与えられるローズ奨学生に選ばれて、イギリスのオックスフォード大学に留学し近代史を専攻している。世界に例のない独特の文化を築いた日本が、幕末維新を経て、西欧文明を接ぎ木のように移植していった歴史の行く末に大きな関心を抱いていた。鉞子と話しあっているなかで、モーレーは、彼女の日本の歴史への並々ならぬ深い洞察力に感銘を覚え、彼女が日本とアメリカという二つの異文

化をごく自然に受けいれている奥ゆかしさに心うたれていた。彼女の半生記はユニークで矛盾にみちた近代日本の歴史を語ることになるのではないだろうか。モーレーはそう直感したのである。

鉞子は、生まれたときから没落した士族の歴史を背負っていた。

「今でもわたくしは冬の日の夕暮に絹蒲団のかかった炬燵にあたりながら、尊敬する祖母から、二、三の忠実なお供と一緒に変装して逃げまわった話を聞かせてもらったありし日をまざまざと思い出します。修羅場と化した（戊辰戦争の）戦場の真っ只中の息子（わたくしの父稲垣平助）への心配や嫁（わたくしの母）のスリルに富んだ胸のつぶれるような体験は繰りかえし繰りかえし聞かされたものです。こうしてわたくしは家族の『歴史』とともに成長して行きましたが、わたくしたちの家族の『歴史』はとりもなおさず、わたくしたちと同様な悲劇的運命に遭った幾百の家族の『歴史』でもありました。『歴史』へのわたくしの愛着が年とともに大きくなってきたのは、多分こうしたわたくし自身の家族の『歴史』に対する尊敬によるものでしょう」（杉本鉞子「自叙」[註3]）

輝いていた「武士の娘」

一九二〇年（大正九年）秋から一九二七年春までの七年間、杉本鉞子は、ニューヨークのコロンビア大学で、毎週、日本語と日本の歴史の特別講義を受けもっていた。アメリカ人に日本語と日本の歴史を教える経験を通して、鉞子の歴史への洞察はますます深まり、自らの半生記を書く意欲がわいてきた。すでに五十歳を過ぎていたこの時期が鉞子の生涯で最も輝いていたときだったかもしれない。当時、コロンビア大学の界隈では、「教壇に立つ小柄な和服の婦人」のことが話題になった。輝いていた鉞子の姿を彷彿とさせるエピソードである。

「ここ数年のことだが、ニューヨーク市のコロンビア大学界隈で、和服を着た上品で小柄な日本婦人がキャンパスを横切る姿に出会ったものである。車の喧騒のなか、急ぎ足で歩く学生に混じって、彼女はまるで優しく舞う蝶か、そよ風にゆれる可憐な花のように見えた。彼女のそばを通ると、その上品なしぐさと目のなかに浮かぶなんともいえない親愛なまなざしに心がうたれ、いったいこの女性は誰なのだろうかと思わずにはいられなかった。その人こそ『武士の娘』の作者エツ・スギモトであった」[註4]（児童文学者ヘレン・フェリス）

アメリカでも日本でも全く無名だった杉本鉞子（英語名：エツ・イナガキ・スギモト）の『武士の娘』（*A DAUGHTER of the SAMURAI*）は、一九二五年（大正十四年）暮れ、ニューヨークのダブルディ・ドラン社から出版された。鉞子五十三歳のときである。最初から英語で書かれた。作者の肩書は「コロンビア大学講師、日本語及び日本の歴史担当」と紹介され、本のうたい文句は、「数百年続いた封建的日本の娘がいかにして近代的アメリカ人になったか」となっている。「移民の国」アメリカの人たちにとって、外国からやってきた人が「アメリカ人になった」「アメリカの味方になった」といわれることほど誇らしく心地よい響きはない。『武士の娘』はアメリカで高い評価をうけ、ベストセラーになった。

日本の片田舎に生まれたあどけないサムライの娘が厳格な武士の教育をうけて育ち、やがて東京へ出てミッション・スクールで英語と西洋文明の教養を学び、単身アメリカへやってくる。好奇心あふれ気品ある女性のなかに二つの文化が融合し、異国の人たちとの絆（きずな）をつくっていく。この不屈の精神をもつ日本女性に読者はいい知れぬ感動を覚えたという。そして主人公たる女性に体現されている「人間の品格」というものをはぐくんだ未知なる国・日本への関心をよぶことにもなった。

当時、「台頭する大国」日本にたいして相反する二つの見方があった。警戒感と期待感である。前者は、アジアの軍事大国となった日本への漠とした警戒感であった。米国内では、同化しない日本人移民が問題視され、一九二四年、所謂「排日移民法」が制定される。

他方、第一次世界大戦後、国際連盟の常任理事国になった日本が国際平和のためになにかしてくれるのではないかという、これも漠とした期待感があった。それは一九二三年（大正十二年）死者・行方不明者十万五千人（推定）を出した関東大震災から立ち直ろうとする、不屈の日本人のイメージと重なっていたかもしれない。

日本への警戒感と期待感のはざまで、図らずも、『武士の娘』は、「期待される日本人像」の原点を語っていたのである。

杉本鉞子を世に送り出したともいえるモーレーは、『武士の娘』の序文を書いた。

「この本はなんと心優しい本なのか。そしてなんと多くのことを我々に教えてくれることか。わたくしはひそかにこう確信している。この本はいつまでも人々に愛読され、著者である勇気ある女性のために、また――このことこそ著者が最も喜ぶことなのであるが――彼女が愛する日本のために、友人をふやし続けていくことであろう、と。そしてこの本

は、子どもたちが読んでもすばらしいのではないだろうか。うっとりさせるような話がこれほどつまっている童話集はないと思う」（筆者訳）

モーレーの序文を読んだ人は、本文を読まずにいられなかったであろう。『武士の娘』が好評をはくしたあと、児童文学者ヘレン・フェリスは、少女向けの自伝集『わたしが少女だったころ――自ら語る五人の著名な女性の物語――』を編集した。

世界的なオペラ歌手エルネスティーネ・シューマン＝ハインク、アメリカの彫刻家で婦人参政権運動でも活躍したジャネット・スクッダー、ノーベル物理学賞、化学賞を受賞したマリ・キュリー夫人、アメリカの福祉活動の先駆者でノーベル平和賞のジェーン・アダムズと並んで、五人のなかの一人に杉本鉞子が選ばれている。この本には各自伝の少女時代が紹介されているのだが、鉞子の場合は、『武士の娘』の雪深い越後から東京のミッション・スクール就学までの十四章のなかの九章分が抜粋（ばっすい）され転載された。

相対性理論でしられる物理学者アインシュタインやインドの詩人タゴールからも、賞賛の言葉が寄せられた。太平洋問題調査会のメンバーで頻繁（ひんぱん）にアメリカを訪問していた鶴見祐輔（ゆうすけ）（政治家、著述家）が、「いまアメリカで最も読まれている本」として『武士の娘』の評判を日本に紹介したのは、そのころのことである。

あるアメリカ人女性の存在

鉞子は歴史に学び、いつも未来に目を向けていた。通算二十二年間二度にわたってアメリカで暮らし、アメリカ人とのあいだに幅広い交流の輪をつくった。四年間に及んだ日米戦争の間その輪は途切れるが、戦争が終わると、鉞子となんらかの面識があり『武士の娘』を読んだことのあるアメリカ人が、占領軍の将校として、あるいは宣教師として、あるいはその妻として、焼け野原の東京へやって来て、杉本鉞子の安否をたずね、無事とわかると会いたがった。鉞子はすでに七十歳を過ぎていた。アメリカでは戦後二年足らずで『武士の娘』が再版され、続いてイギリスでも再版されている。

鉞子は、日本の読者にたいしては、「私はただ外国の友だちに少しでも日本とその女性のほんとうの姿を知らせたいと思って、自分の小さい見聞や感想を書き綴ったのみです」[註5]と謙遜して語っていた。鉞子はまた、執筆の意図についてこうもいっている。

「米国人は心を開いて日本を知ろうと努力するけれども、とにかく思い違いが多い。就中、日本の婦人といえば芸者ガールのようなものと思ったり、新しければマダム・バタフライ（蝶々夫人）のようなもの、古ければ細川ガラシャ夫人のごときものと思って、

少しも日本婦人の日常生活をわかっていない。その日本婦人の日常生活を伝えてやりたいと思ったので、おこがましくも自分の生い立った貧乏武士の家庭生活、むしろ西洋文化の影響を受けることの少なかった時代の純日本婦人の教養……というような方面を語ってみた」[註6]

しかし、鉞子が『武士の娘』を書くにいたるまでには長く苦しい道程があった。その道程で、一人の人間の存在が欠かせない。鉞子を蔭から力になり支えつづけた一人の女性の存在である。そのひとはフローレンス・ミルズ・ウイルソンというアメリカの婦人であった。フローレンスは、鉞子が三十八歳で未亡人になって以来、精神的にも、執筆のうえでも、そして恐らく家計のうえでも、鉞子とその家族を支えつづけた。

鉞子は日本の大河信濃川にはぐくまれた越後の片田舎で生まれているが、フローレンスは米国中東部の大河オハイオ川にひらかれたインディアナ州の片田舎に生まれている。二人ともそれぞれの国の内戦によって家族の運命が変わり、人生観に大きな影響をうけた。日本の内戦とは「戊辰戦争」であり、アメリカの内戦とは「南北戦争」である。二人は、十九世紀末、アメリカのオハイオ州シンシナティで初めて出会うのだが、そのとき鉞子は二十六歳、フローレンスは四十二歳だった。

二人の出会いがなかったら、『武士の娘』は書かれなかったかもしれない。フローレンスは鉞子に過去から未来に生きる手助けをしてくれたのだ。武士の娘・鉞子を語ることは、アメリカ人フローレンス・ウイルソンを語ることにもなるのである。

［註1］ クリストファー・モーレー（一八九〇～一九五七）、ペンシルヴェニア州フィラデルフィア郊外のブリンマーに生まれる。父は数学教師、母は音楽家で詩人。クエーカーが設立したハーヴァーフォード・カレッジを首席で卒業、ローズ奨学生として英国オックスフォード大学に留学。新聞・雑誌の編集者、コラムニスト、小説家、エッセイスト、詩人。ホイットマンやコナン・ドイルの研究者としても知られる。著書は処女作『移動書店パリナッソス』（一九一七）ほか多岐にわたる。自立するため働く貧しいアイルランド移民の娘・キティが二人の男性との愛の葛藤を自ら語る小説『キティ・フォイル』（*Kitty Foyle.* 一九三九）はベストセラーとなり、映画化されてアカデミー賞主演女優賞を受賞している（映画は一九四〇年製作、サム・ウッド監督、ジンジャー・ロジャース主演、日本では一九四七年『恋愛手帖』のタイトルで公開）。

［註2］ 杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（3）」（『婦人之友』昭和十五年三月号）等による。

［註3］ 「自叙（杉本鉞子）」内山喜助訳（『長岡郷土史』第八号、昭和四十年）、鉞子が『農

夫の娘』(*A DAUGHTER of the NOHFU*, 1935) 出版のころ書いた英文の自己紹介文。

[註4] *WHEN I WAS A GIRL, The Stories of Five Famous Women as Told by Themselves*, The Macmillan Company, New York 1930

[註5] 杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ(1)」(『婦人之友』昭和十五年一月号)

[註6] 目黒真澄「英文・武士の娘に就いて」(『北越新報』昭和四年五月十日付、三条市立図書館所蔵)

第一章　幕末維新に翻弄される父と娘

まさかりのような強さを願って

杉本（旧姓稲垣）鉞子の「鉞」を「まさかり」とは読めても、「えつ」と読める人は少ないだろう。父稲垣平助は長男のあと五人も娘が続き、そろそろ男の子を期待していた。しかしその期待は裏切られた。そこでせめて「まさかり」のように強い娘にしたいと考えて「鉞」と名付けたらしい。

『武士の娘』は、日本の雪国の描写からはじまる。

「私の郷里、越後の国では、冬は何時も大雪ではじまり、しんしんとおやみなく降りつづき、藁葺屋根の太い棟木のほかには、何も見えなくなるまでにあたりを埋めつくしてしまいます」（杉本鉞子『武士の娘』大岩美代訳、ちくま文庫。以下同）

鉞子がのちに東京の女学校で級友たちにこの豪雪のことを話しても信じてもらえず、「エツのホラ話」といわれていたという。豪雪は長いあいだ「裏日本」の後進性の理由とされ、諦めと我慢強さなど雪国の人たちの性格形成にも大きな影響を与えてきたといわれている。

杉本鉞子は、明治五年（一八七二年）六月二十日、現在の新潟県長岡市（当時の町名で古

志郡川崎村地蔵町）で、旧長岡藩筆頭家老稲垣平助の娘として生まれた。[註1]

幕末までは長岡城の城内に稲垣家の広壮な屋敷があったが、戊辰戦争のさい焼失した。鉞子が生まれた家は、町はずれにある稲垣家の下屋敷の一つだった。部厚い藁葺き屋根の家の周りは桑畑や水田がひろがり、南数百メートルほど先に四年前炎上した長岡城の崩れかかった石垣の一角が見えた。戊辰戦争で城下町の八割方は焼失し、街なかはまだ殺伐としていた。

稲垣家にはよく骨董商がやってきて土蔵のなかへ入っていった。昔から保存してきた武家の刀剣、鎧、陶器など数々の骨董品を手放してお金に換えて、生活の糧としていたのである。

父平助と母金のあいだには、長男平十郎の下に、泰、喜戸、千代野、建、鎚、鉞、推、関の八人の娘がおり、鉞は六女である。三女千代野は鉞子の生まれる二年前、八歳で亡くなっている。また明治十四年に二男薫が生まれるが、二歳半で夭逝する。

鉞子は、幼少のころ、「家族は父、母、祖母、兄、姉、鉞子の六人で、それに父の下男頭の爺や、乳母のいし、女中のきんとしがいた」と書いている。そして自らを「末っ子」として描き、「父の秘蔵っ子」だったとも書いている。姉たちはお嫁にいき、二人の

妹は里子や養女に出され、家にいたのは兄とすぐ上の姉だけだったので、鉞子が「末っ子のように育った」というのは、あながち事実に反するわけではない。

幼い鉞子は、優しい父と躾けの厳しい祖母や母と、そして気だてのいい使用人たちにかこまれて育った。乳母のいしは鉞子の面倒をよくみてくれた。

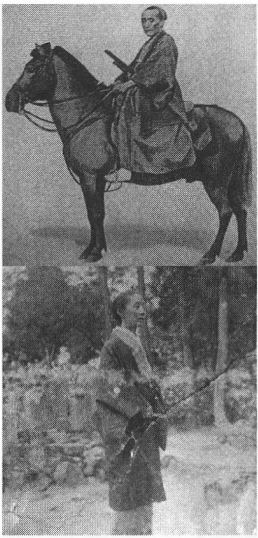
鉞子はまわりから「エツ坊」と呼ばれていた。男の子のように勉強をさせられたからだというが、「まさかり」のように強い子にしたいという父の思いが反映していたのかもしれない。鉞子は大変なおてんばだったようだ。男の子がするように竹馬にのったり、愛犬のシロと駆けっこをするのが好きだった。気が滅入ると乳母のいしに勇ましい英雄豪傑の話をねだり、雪合戦ではいつも一方の大将になってはしゃいだ。鉞子は幸せだった。

幼少のときから鉞子には身を刺されるような深い悩みがあった。髪の毛がみにくく縮れていたことである。当時日本では、「縮れ毛」は獣の毛に似ているということから、縁起が悪くきらわれていた。縮れ毛の娘は嫁のもらい手がないといわれていた。髪の毛について鉞子は、大人になってからも忘れられない思い出があった。

元治元年（一八六四年）の「蛤御門の変」で京都の三分の二が焼失し、東本願寺も焼け落ちた。その再建がようやく明治十二年（一八七九年）に始まる。鉞子七歳のころであ

る。越後は親鸞聖人が流刑から放免されて最初に布教したところで、浄土真宗への信仰が篤い土地だったため、東本願寺再建への寄進運動がどこよりも盛り上がった。なかでも女性たちは競って髪の毛を切って奉納した。その毛を編んで太い縄をつくり御堂の棟木にする大木を引くためである。幾千人もの女の髪の毛で作った縄を積んだ台車の行列を眺めながら、鉞子は小さい胸を痛めた。姉たちは長いつややかな髪を切って奉納したのに、縮れ毛の鉞子にはそれができなかったからである。

幼い鉞子の心の悩みはそれだけではなかった。生まれたとき、お坊さまの数珠のようにへその緒が鉞子の頸のまわりにまきついていた。そういう子は仏さまのおぼえめでたく、尼となるべきさだめを受けたものと祖母や母は信じていた。父はあまりこだわっていなかったというが、鉞子は尼として育てられる可能性もあったのである。



父・稲垣平助と母・金

四書からはじまった教育

父はさまざまな苦境にあったが、娘に伝統的な「武士の教育」を受けさせるという方針は変えていなかった。平助は信頼する稲垣家菩提寺の住職を鉞子の師匠に迎えた。

稲垣家の菩提寺である曹洞宗長興寺の住職は、大道長安という人物だった。越後国蒲原郡新発田に生まれ、六歳のとき長岡の長興寺で剃髪し仏門に入った。十五歳のとき、曹洞宗の最高学府といわれる江戸駒込の吉祥寺境内の学寮「旃檀林」（現駒沢大学）に入学し、二年間学んだ。のち岡山県美作の大道山長安寺住職のときに大道長安と名乗るようになった。

長安は、明治新政府の「神仏分離令」に伴う仏教排斥運動「廃仏毀釈」以来、覇気を失っている仏教界の現状に不満だった。各地で行われる説教法話の席では熱弁をふるい、「越後の今釈迦」とほめたたえられたという。明治八年三十四歳のとき、故郷に戻り長興寺住職になると、仏教に新風を吹き込む人材養成のための学校「大道校」を開設した。長安は、校則に「耐忍」「謙譲」「勉励」の三つをかかげている。そのほか孤児院を設立するなど社会的な奉仕活動にも熱心だった。鉞子は長安から大きな影響を受けた（長安はのちにキリスト教の教えもとりいれた「救世教」をとなえ、仏教会から破門される）。

師匠は三と七がつく日に稲垣家へやってきた。六歳（筆者註＝年齢は満で記す）になると、鉞子はこの師匠から四書（大学、中庸、論語、孟子）を学んだ。父は孔子の教えこそ道徳の最高のものだと信じていた。講義の内容は鉞子には全く理解できなかったが、師匠はきまって「百読おのずからその意を解す」と答えた。まさしくその通りだった、と鉞子は書いている。のちになって次第に、暗誦していた四書の大切な句の意味がのみこめるようになったからである。

「お稽古の二時間のあいだ、お師匠さまは手と唇を動かす外は、身動き一つなさいませんでした。私もまた、畳の上に正しく坐ったまま、微動だもゆるされなかったものでございます。

唯一度、私が体を動かしたことがありました。丁度、お稽古の最中でした。どうしたわけでしたか、落着かなかったものですから、ほんの少し体を傾けて、曲げていた膝を一寸ゆるめたのです。すると、お師匠さまのお顔にかすかな驚きの表情が浮び、やがて静かに本を閉じ、きびしい態度ながら、やさしく『お嬢さま、そんな気持で勉強はできません。お部屋にひきとって、お考えになられた方がよいと存じます』とおっしゃいました。

恥しさの余り、私の小さい胸はつぶれるばかりでしたが、どうしてよろしいものやら判

りませず、唯、うやうやしく床の間の孔子様の像にお辞儀をし、次いでお師匠さまにも頭をさげて、つつましくその部屋を退き、何時もお稽古が終ると父のところへゆくことにしていましたので、この時もそろそろと父の居間へ参りました。時間が早いので、父は驚きましたが、事情を知らないままに『おや、随分早くおすみだね』と申しましたが、きずついた私にはまるで死刑をつげる鐘の音のように響いたものでした。あの時のことを思い出しますと、今もなお打きずの痛みのように、私の心を刺すものがございます」（『武士の娘』）

このくだりは、読む人に強烈な印象を与える。鉞子がうけた「武士の娘の教育」の核心をついていたからである。

のちに文化人類学者ルース・ベネディクトは、日本の国民性を分析した著名な書『菊と刀』（一九四六年）のなかで、この文章をそっくり引用している。ベネディクトは、「（日本の）女の子はさまざまな拘束に従わねばならないが、その義務を履行する責任は、まさしく女の子自身の上に置かれているのであって、ほしいままに権力を振り回す親の手に握られているのではない」と書き、伝統的な日本の娘の教育は、親の権力や体罰によってではなく、娘がいずれ親のやってほしいことを納得して実践するだろうという「平静な揺るぎなき期待」によってなされている、と述べている。その例証としてベネディクトは、極端

な例だとことわりながらも、この文章を引用したのである。[註2]

鉞子のうけた教育のなかで、肉体的にも厳しかったのは「寒稽古」と呼ばれるお習字だった。旧暦で最も寒さが厳しいとされる寒の九日目の朝、廊下の戸を開けはなち火の気が全くない部屋で墨をすり習字の稽古をするのである。紫色になっている幼い鉞子の手を見て、付き添う乳母のいしはすすり泣きをしていた。「寒稽古」の習字が終わると、祖母の部屋へ連れてゆかれ温かい甘酒をいただくのだが、その間いしが冷え切った鉞子の手を雪でこすって血行を元に戻してくれるのであった。「このように心をこめて筆を運ぶことを通して、私共、子供は心を制御することを学んだのでございます」と鉞子は書いている。

昔からの「武士の娘」の心得として、鉞子は眠るときには「きの字」に体を曲げて眠った。眠っているときでも身も心もひきしめていなければならないという教えで、これも「制御の精神」を維持する躾けだった。

時には母の金が心配のあまり、「鉞はからだが余り丈夫でないですから」というと、平助は「獅子は幼いわが仔を千丈の谷に蹴落して、這いあがってくるものだけを育て上げるというからね」といって、自分の方針をまげなかった。

鉞子は裁縫、機織、料理、お花、お茶など、普通の女の子が身につけることも習った。

家のしきたりはおおむね祖母がとりしきっていて、鉞子は祖母から多くのことを学んだ。雪に降りこめられた冬の夜長には、我が国に伝わる神代の物語、宮本武蔵など英雄豪傑のお話、『南総里見八犬伝』や『椿説弓張月』など伝奇小説のお話などを祖母の口から聞かされたという。鉞子にとって祖母の存在は大きかった。

武士の商法

鉞子の父稲垣平助は、機業や養蚕業などさまざまな商売に手を出しては失敗を繰り返していた。世にいう「武士の商法」である。

稲垣家はその後、古志郡長岡町表五之町西側に転居しているが、そこは商家がたちならぶ街なかである。平助はそこで、今度は旅館業をはじめた。

明治九年（一八七六年）一月に旅籠営業免許の認可をえて、「稲荷屋」という看板をかかげた。年代的には鉞子四歳のときから十歳のときまでおよそ六年半続いた家業である。表五之町の家は、二階建てのこぢんまりした宿屋だった。明治十一年九月二十二日、明治天皇御巡幸の折には、下級官吏、車夫など四十一名の宿泊を引き受けている。

この「武士の商法」への悪戦苦闘ぶりは、稲垣平助の手記「誌録」に再三再四にわたっ

て記されている。[註3] そのほとんどが無銭宿泊やもの盗りにたいする訴訟や盗難届の記録である。稲垣平助は次第にかなりの借財を負った。稲荷屋の屋敷を抵当にして借金したり、東京の稲垣本家（元鳥羽藩主）や長岡の槇家（妻金の実家）に借金を申し入れたり、子どもたちを親戚にあずかってもらったり、四苦八苦している。

明治十四年末、平助の借財は六百円近くになっていた。そして稲荷屋の屋敷を抵当に入れて借りた三百円を返済できず、貸し主が屋敷の引き渡しを求め、裁判所に訴えた。平助は、「現今流行の手数料高利金を借り受け、策略により家屋売却証を入させられたり」と「誌録」に書いているが、裁判上は明らかに不利であった。

この年の十月、鉞子は表町下等小学校を卒業し、表町高等小学校に進学している。表向きなに不自由なく過ごしていた。だが、その二年前に長男平十郎が事情あって家出しており、後述するように勘当同然であった。平助にとって、このころがもっとも苦しいときだったかもしれない。

平助は親戚の槇行造（妻金の実兄）らと相談し、星忠吾なる人物に借財をふくめて稲荷屋の経営を譲ることにした。

星忠吾は元会津藩士で、朝廷軍の会津攻撃にたいして戦い、かの有名な「白虎隊」に年

齢が一つ上だったので加われなかったことを生涯悔やんでいたというような人物である。

江戸時代、越後には広大な（十万石相当の）会津藩の所領があり、それを管理するために会津藩の藩士が派遣されていた。星忠吾は、恐らくそうした経験もあって長岡とは縁があり、明治になって長岡に住んでいたものと思われる。[註4] 稲垣平助は星忠吾を信頼し、十七歳の四女建と縁を結ばせ、所帯をもたせている。

明治十五年六月五日、稲垣平助は「旅籠廃業」を届け出た。同時に、長岡警察署に「稲垣建に稲荷屋の鑑札を与え営業を続けさす」と届け出ている。娘の建に営業権を譲り、星忠吾・建夫妻に稲荷屋をまかせたのである。

稲垣平助はその後、印刷業（謄写物請負）に手をそめるが、病に倒れ、明治十八年五月二十九日亡くなった。享年四十九。葬儀は菩提寺の長興寺でしめやかに行われた。

稲荷屋の屋敷をめぐる裁判はもめにもめたが、結局は他人の手にわたり、星夫妻は坂の上町に転居して「稲荷屋」をしばらく続けていたようである。稲垣平助の長男平十郎が長岡に住まなかったので、星の家（稲荷屋方）は稲垣家の本宅のような役割も果たした。鉞子の母金もそこで暮らし、嫁にいった娘たちが長岡に里帰りするときは稲荷屋方で泊まった。

星夫妻には二人の息子がいた。静一（海軍大尉、『河井継之助伝』の著者今泉鐸次郎の妹と結婚するが早世）と千里（栃尾の染色試験場を出て、のち広島県福山工業高等学校初代校長）である。だいぶあとのことであるが、大正七年、長男平十郎の息子重政（当時十四歳、神戸で父と二人で極貧の生活をしていた）が、星忠吾・建夫妻を頼って長岡へやって来て、五年間ほど世話になった。重政は建や鉞子の甥にあたる。初老をむかえた星夫妻は、二人暮らしだった。すでに稲荷屋を廃業し、二人の息子は独立していた（後述するが、鉞子の母金はすでに大正四年に没している）。重政は、星夫妻のお蔭で、長岡の中島高等小学校と長岡工業高校を卒業し、のちに紡績会社のエンジニアとして大成する。そのころの思い出を重政は回想記のなかでこう記している。

「坂の上の星家で五年間の生活をおくったが、その生活は武家の名残りを止めていた。中央の部屋には仏壇と神棚とがあった。主人（叔父の星忠吾）と主婦（叔母の建）の坐る場所が定まっていて、主人の坐る場所には主人が留守であっても坐ることはできない。朝、四時に起床した叔父は、先ず掃除をして後に仏壇を前にしてお経をあげひき続いて神棚に祝詞をのべる。この行事の終った時分に、朝の挨拶をするのである。足の親指をしっかりつけて低頭し『お早うございます』と言うのであるが、時を間違えると叔父は返事もしな

い。はじめは耳が遠いからと思っていたがそうではないらしい。武家のしつけは、朝が一番大切なのである。叔母はいつ寝たか分らぬ程で夜は二階の炬燵を独占して編物をしておられた。糸は新しいものを使うことはなく、衣類をほぐした糸を使った。台所で味噌をこぼすと、ぬか漬けの中にそれを入れる。一時が万事そうである。武士の台所は苦しいものであったに違いないが、質素・忍耐・節約等、さむらいの根性が生活の中に生きていた」[註5]

孤高の人

鉞子の目に映った父はいつも明るくユーモアがあった。

父と親しかった棟梁とその使用人たちがご馳走になっている席に平助が入ってきたとき、棟梁はこの家に福がくるように願って「この家を七福神がとりまいて」というと、平助はにこにこしながら「貧乏の神のにげどころなし」と即座にこたえた。

ユーモアあふれる優しい父だったが、鉞子は大人になってから、父稲垣平助は「己の信ずる道を歩む孤高の人」であったことを知る。

『武士の娘』の半ばあたりに「第一印象」という章がある。鉞子がのちにアメリカへ行き、ある日、一緒に暮らす家の女主人（鉞子は「アメリカの母上」と呼んでいた）が屋根裏

の納戸（attic）にあるトランクのなかの古い衣類を整理するのを手伝っていたときのことである。そのなかに「アメリカの母上」の祖父が一八一二年の米英戦争のときに着ていた軍服があった。

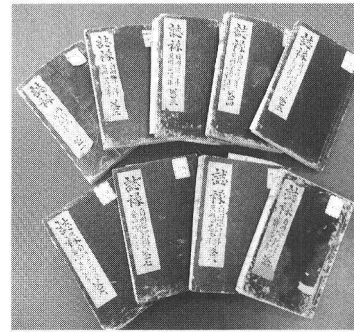
その古びた軍服をなでながら鉞子は、幼いころ毎年きまった季節に故郷長岡の家で行われた土蔵の品々の虫干しの日を思い出し、父の面影が目に浮かんできた。

「『エツ、何を考えているの？　五千里も離れたところを見るような眼付をしているではありませんか』と、『母上』は微笑を浮かべておっしゃいました。

『もっと遠いところを見ておりましたわ、まだ私が生れない前のことを見ていたのでございます』（中略）『お母さま、家のお納戸（筆者註＝原文ではgodown〔倉庫、土蔵〕となっている）にも、戦いの思い出を語る尊い記念の品々がございます。父の手で書かれた薄紙の綴本もあって、私達はお宝にいたしております』」（『武士の娘』）

アメリカへ行ってこのとき初めて鉞子は、心のなか奥深く秘めてきた父の秘密の一端をもらしているのである。「父の手で書かれた薄紙の綴本」とは、稲垣平助の手記「誌禄」をさしている。「誌禄」は、平助が幕末以来身辺で起きたことをつづった手記である。

しかし、この「誌禄」が史料として見直されるようになるのは、戊辰戦争から百年経っ



稲垣平助手記「誌禄」（長岡市立中央図書館所蔵）

た昭和四十三年（一九六八年）ごろだった。それまで長い間、一般の目にふれることなくうずもれていたことになる。鉞子自身は、それよりはるか以前にこの父の手記を読み、幕末維新の父の行動や思いを詳しく知ったはずである。だが、鉞子は、幕末動乱の時代の父について具体的な事実を一切書いていない。例えば、稲垣平助が幕末長岡藩の英傑といわれる河井継之助と決定的に対立したことなどは、一言も書いていないのである。

「当時父は（）国家老という重い責任をもつ身でありましたので、御維新の騒ぎの間、父は随分と苦労をいたしました。越後が負け戦だと知った時こそ、長岡方の悲運の瞬間でありました。夫の信奉していたところが破れて、とらわれの身となったことを知りました時、母は、家族をつれてのがれ、家屋敷が敵に落ちることをいとうて、自らこれに火をかけ、山かげから我が家の焼け落ちるのを見守っていたと申します」（同前）

これだけだと、読者は、戊辰戦争で長岡藩が敗れ稲垣家もさぞ苦難の道を歩んだにちが

いない、との印象しか残らないであろう。しかし、稲垣平助が「信奉していたところ」とは、いったいなんだったのだろうか。「とらわれの身となった」とは、なにを意味しているのか。そして、鉞子はなぜ具体的なことを一切書かなかったのだろうか。

この疑問にこたえるためには、まず幕末の長岡藩の事情からひもとかなければならない。

幕末の越後長岡藩

幕末の長岡藩といえば、河井継之助があまりにも有名である。特に司馬遼太郎が、昭和四十三年（一九六八年）、『峠』を著し、河井継之助を長岡藩の「武装中立国」をめざした幕末の英傑の一人として描くと、その歴史的評価が定まったかのようである。だが、ちょうどその年は戊辰戦争百周年にあたっていた。地元長岡では、その前後から郷土史の新しい研究が進み、従来通説とされてきたものとは違った姿が浮かび上がってきた。それは、河井継之助に真っ向から対立した鉞子の父稲垣平助について歴史的な再考をうながすことでもあった。

長岡は、信濃川の流域に広がる越後平野の中心に位置している。豊かな米の集散地であ

り、信濃川の水運交易の中心地であった。河口の新潟の湊は長い間、長岡藩の支配地で、日本海交易の要衝として重要な収入源だった。だが、冬の豪雪対策や毎年のように洪水を繰り返す信濃川やその支流の治水対策で、藩は恒常的な財政難に直面してきた。江戸末期、幕命によるたび重なる京都所司代や老中の就任に伴う出費もばかにならなかった。また、長岡藩黙認の下で新潟湊に禁制品の唐物などを積んだ薩摩船が出入りし、地元の商人らが関与して江戸にまで売りさばき莫大な利益をあげてきたことが幕府に摘発され、天保十四年（一八四三年）、長岡藩は新潟上知（没収）を命じられた。それは長岡藩にとって大きな損失となった。幕末、豪商豪農等から借りた長岡藩の借財は莫大な額に達していた。

長岡藩七万四千石の藩主牧野家は、三河以来徳川家に仕えた譜代大名である。[註6] 藩政を取り仕切る家老職は次の五家が世襲してきた。

二千石	御家老	千手口御門内	稲垣平助
千三百石	御家老	大手御門外	山本帯刀
千二百石	御家老	江戸定府	稲垣太郎左衛門

千百石　御家老　神田口御門内　牧野市右衛門
七百石　御家老　町口御門内　牧野平左衛門

この五家のうち稲垣、山本の上席二家は別格で、御目見え以上の格式（大名や旗本のように将軍に直接拝謁できる資格）を持ち、関所前を乗馬のまま通行を許されたという。

稲垣家は、牧野家とともに三河国牛久保の出で、早くから徳川家康公に仕え、武勲をあげてとりたてられた。牧野家が長岡藩の藩主に任じられると、稲垣家は徳川家の許しをえて後見人として同行してきた。稲垣家からは三重県の志摩国鳥羽藩（三万石）と滋賀県の近江国山上藩（一万石）の藩主が輩出しており、幕末まで稲垣三家として知られていた。

稲垣家は格別の扱いをうけ、屋敷は城内にあった。敷地は千八百余坪あり、屋敷には能舞台があって正月など祝い事の際に使われた。だが稲垣家の家風は質素そのものだった。

嘉永六年（一八五三年）ペリー提督の黒船が来航し、翌年再びやってきて開港をめぐって幕府と交渉したとき、長岡藩主牧野忠雅は海防掛老中であり、筆頭老中阿部正弘の下で外交処理に奔走した。五年後の安政五年（一八五八年）六月、大老井伊直弼の決断で「日米修好通商条約」が調印される。将軍の世継ぎ問題ともからまっていたのだが、井伊





河井継之助（上）と牧野忠恭
（長岡市立中央図書館所蔵）

養子の忠恭が跡を継いだ。忠恭は三河国西尾藩主の松平家から迎えられた養子だった。根っからの佐幕派である。

時代変化の大きなうねりが、江戸から遠く離れた長岡藩にもおしよせてきた。

河井継之助の台頭

司馬遼太郎の『峠』の出だしにあるように、扶持百二十石の中下級武士河井継之助が筆頭家老稲垣平助宅に日参して出国を願い出たのはちょうどそのころのことだった。稲垣平助二十二歳、河井継之助三十一歳。河井継之助は稲垣平助より九歳年上である。河井にとっては二度目の出国であった。家老の稲垣は根負けして厭々ながら同意する。稲垣平助と大老は開国に反対する尊王攘夷派の大弾圧を行った。「安政の大獄」である。

長岡藩主牧野忠雅はこの年八月に死亡し、

河井継之助の運命的な対立は、このときからはじまったともいえる。

若いときから陽明学に熱中していた河井継之助は、江戸に出て諸国を漫遊し、特に備中松山藩（現岡山県高梁市）の参政にとりたてられた山田方谷に師事して藩政改革の実際と要諦を学んだ。その間長崎にも旅し、西欧文明の技術力にも目を開いた。安政七年（一八六〇年）三月三日、桜田門外で大老井伊直弼が水戸浪士らに襲われ暗殺されたとき、河井は横浜にいて幕府崩壊の危機感にとらわれたという。河井は、新しい時代の流れにいかに対応すべきかに思いをめぐらせながら、文久元年（一八六一年）春、三年余の遊学をきりあげて越後へ戻った。

時の長岡藩主牧野忠恭は、文久二年八月、京都所司代に任じられた。最初に直面したのが生麦事件の衝撃だった。江戸から京都に向かった薩摩藩主の父島津久光の一行が川崎を過ぎて生麦にさしかかったとき、行列の前を馬で横切ったイギリス商人リチャードソンを「無礼者！」として護衛の藩士が斬り捨てた事件である。

長州藩の攘夷論者とその影響をうけた若い公卿たちに牛耳られていた朝廷は、京都に着いた島津久光にたいし従五位に叙し官位をさずけようとしていた。イギリス領事からリチャードソン殺害の下手人と責任者の島津久光を捕らえるよう強硬な抗議を受けていた幕

府は、とりあえず久光への叙勲及び官位授与の中止を朝廷に奏上するのだが、その取り次ぎをするのが京都所司代牧野忠恭の役目だった。それが間に合って、天皇は久光に功を賞し剣一振りを下賜するだけにとどまり事なきをえた。だが、依然強硬な各国外交団が武力行使も辞さないことを知った幕府は、イギリスに英貨十万ポンド（邦貨にして約二十七万両）という莫大な賠償金を支払った。その額をメキシコ金貨にして、横浜村のイギリス領事館へ運ぶのに大八車二十三台を要したという。[註7]

激怒した朝廷は幕府に攘夷即時決行を命じた。開港した港を閉鎖し外国人をすべて国外に追放せよというのである。翌文久三年九月老中に任じられた牧野忠恭は、公用人として河井継之助を江戸に呼んだ。時の幕府の筆頭老中は備中松山藩主板倉勝静、その参政は山田方谷。四年前に諸国漫遊の旅に出た河井継之助が備中松山で師事した先生である。

翌元治元年（一八六四年）四月、幕府を震撼させる事件が起こる。水戸藩の尊王攘夷の過激派が筑波山で挙兵し、幕府に横浜港の閉鎖と外国人追放を迫ったのである。彼らは、「天狗党」と称した。幕府は天狗党討伐を決定し、老中牧野忠恭がその任にあたった。天狗党一千余の部隊は、元水戸藩主徳川斉昭の第七子で禁裏守衛総督・一橋慶喜に訴えるべく京都に向かった。中山道をさけながら信濃から美濃へ、時には戦闘を交えながら、時に

は尊王攘夷を支持する藩や豪農たちから密かな協力をうけながら進軍するが、慶喜から嘆願書の受領を拒否され、十二月越前で降伏する。幕府の処断は厳しく、総大将武田耕雲斎（水戸藩元家老）以下首謀者ら三百五十二人が斬首され、事件は収束した。この事件を通して、老中・長岡藩主の牧野忠恭と公用人河井継之助は、水戸勤皇思想への嫌悪感を強くした。

牧野忠恭は、時代の動向を説き明かし藩政の改革を直言する河井継之助を重用した。河井は、わずか三、四年の間に郡奉行、町奉行、年寄（奉行役）、そして家老へと異例の速さで出世する。西洋の武器を導入する兵制の近代化、賄賂の禁止や商取引の一部自由化など、次々に藩政の改革を進めた。藩の財政を根本的に立て直すために「禄高改正」も検討された。筆頭家老稲垣平助の二千石を五百石に減らし、下級武士の二十石の禄高を五十石に増やすなど、藩士の禄高を平準化するという画期的な改革案であった。

決定的となった対立

稲垣平助は長岡藩筆頭家老として、世の中がいかに変化しても、あくまでも「御家大事に藩の安泰を維持することが三百年続いた家老職の務めである」と固く信じていた。稲垣

平助は水戸学の勤皇思想に傾注していた。商人や庄屋のあいだでも、勤皇思想を信奉する人たちが増えていた。長岡藩では代々筆頭家老が藩主の教育掛を務めるが、稲垣平助は藩主牧野忠恭より十三歳も年下である。年上の忠恭にすれば、激変する幕末にあって、若輩の平助が講じる話は古臭く退屈だったに違いない。

慶応三年（一八六七年）十月、将軍徳川慶喜の「大政奉還」の報が長岡藩に伝わり騒然となった。この年の七月、藩主忠恭は、養子で二十四歳の忠訓に家督をゆずり隠居していた。忠訓は、丹後国宮津藩（現京都府）七万石の松平（本庄）家からきた養子で、徳川家への忠誠、佐幕への思い入れがひときわ強かった。

この年の暮れ、藩政の実務をとりしきる年寄役に昇進していた河井継之助は、若き藩主牧野忠訓を奉じ長岡藩六十余名の兵を率いて上洛する。大政奉還したとはいえ、政治は経験を積んだ徳川家に引き続き委任すべきだという建白書を朝廷に提出するためであった。だが、事態は思わぬ方向へ突き進んだ。幕府方も長岡藩も知る由もなかったが、すでに朝廷から薩摩・長州両藩へ「討幕の密勅」が下っていたのである。

翌慶応四年の年が明けると、朝廷側と幕府側の軍が衝突し、「鳥羽・伏見の戦い」が起きた。戊辰戦争の火ぶたが切っておとされたのである。「錦の御旗」を掲げる薩摩・長州

両藩六千弱の朝廷軍にたいして、会津・桑名両藩を中心とする一万五千の幕府軍は敗走する。長岡藩は大坂城東南の出入口である玉造口に通ずる要衝・玉津橋を警備していた。幕府軍の戦闘配置についていたわけで、否応なく長岡藩は「賊軍」の烙印を押されかねないはめになった。慶喜以下幕府の首脳たちは大坂から江戸へ船で脱出するが、長岡藩の牧野忠訓も河井継之助もそれを追って陸路江戸へ向かうしかなかった。

鳥羽・伏見の戦いのあと、徳川家から政権を奪った朝廷は、薩摩・長州両藩の兵力を中心に鎮撫征討軍を各地へ派遣する。朝廷側につくか、幕府側につくか。各藩首脳のあいだでは「関が原の轍をふむな」という合い言葉がかわされていたという。一つ間違えば藩は滅びかねないからである。

将軍徳川慶喜は、朝廷へ恭順の意を示すため、江戸城を出て上野東叡山寛永寺に入って謹慎した。そして御三家の尾張藩や紀州藩をはじめ幕府の重鎮だった親藩、譜代の列藩の多くが、次々に恭順の意を表明した。

長岡で留守役をつとめていた稲垣平助は、若年の藩主を奉じ兵士を引き連れて上洛した河井継之助の行動は「時勢を無視した軽率な行動」だと考えていた。平助は河井のことを「奸臣」（藩主をだます臣下）と呼んだ。稲垣平助と河井継之助の対立は決定的になった。

稲垣三十二歳、河井四十一歳のときである。

「小藩の長岡が生き残るには御時勢に逆らうわけにはいかない。朝廷に恭順して徳川家と長岡藩の安泰をはかるべきだ」と考える稲垣平助は、同志を集めた。彼らは「勤皇佐幕派」あるいは「恭順派」と呼ばれる。平助は、槇内蔵助（牧野家とは三河以来の付き合いで先法家と呼ばれ別格扱いされた名家、六百石、平助の妻金の実家でもある）、本富寛之丞（御近習目付・百五十石）、安田鉚蔵（御取次・二百十石）、牧野八左衛門（御番頭・百五十石）、花輪彦左衛門（御金奉行・百石）ら重臣のほか、藩校「崇徳館」教授の酒井貞蔵、陶山善四郎、藤野友三郎など、主だった二十人の名前をあげている。

その学識から藩内で一目おかれていた川島（三島）億二郎や小林虎三郎は、「朝廷軍とは戦うべきではない」と説いていた。彼らは若いころ、開明的知識人として知られる松代藩の佐久間象山の教えを受け、国内で相争うことの愚かさを認識していた。英仏など西欧列強は、アジア諸国の国内対立を利用して植民地化を進めており、日本も西洋列強の植民地化の餌食になりかねないのである。彼らは同じ非戦でも所謂恭順派とは一線を画していた。

しかし、幕府への忠義こそ藩が守るべき道であり、「姦臣たる薩摩・長州両藩」を中心

とする朝廷軍に恭順することは大義に反し、場合によっては武力対決もやむなし、と考えるグループが、藩主のお墨付きをえて主流派になっていた。彼らは「佐幕派」「主戦派」と呼ばれている。河井継之助を筆頭に、山本帯刀（上席家老・千三百石）、牧野市右衛門（家老・千百石）、稲垣主税（稲垣太郎左衛門家の主、家老・千二百石）、花輪求馬（御目付・二百石）、三間市之進（御小姓頭兼御奉行・三百石）、村松忠治右衛門（御勘定頭・七十石）、稲垣林四郎（戊辰戦争で銃士隊長として活躍、二百七十石）など、藩政の実権を握るそうそうたる重臣たちが集まっていた。

「恭順こそ長岡藩を救う道」

慶応四年（一八六八年）一月二十日、北陸道鎮撫征討軍が京を発し、沿道の各藩に恭順を求めた。金沢の加賀藩（前田家・百二万石）はいち早く恭順の意を表し、朝廷軍に藩兵を提供した。問題は越後十一藩の動向であった。先ず越後最大の藩である高田藩（榊原家・十五万石）が「朝廷への恭順と慶喜の処罰なしの哀訴」を決定し、総督府に請書を届け、出兵の命令も受け入れた。村松藩（三万石）、三根山藩（長岡藩の支藩・一万石）、新発田藩（十万石）も恭順の請書を提出した。長岡藩は恭順か抗戦かで藩論が割れたが、藩主

牧野忠訓と実力者の河井継之助が不在なのでなにも決められなかった。

三月一日、藩主牧野忠訓が江戸から帰国した。翌日、忠訓は藩士の総登城を命じた。登城した五百八十余名の家臣団を前に「禄高改正」を発表したのはこのときである。筆頭家老稲垣平助は二千石を五百石に減額されることになるが、平助はこのことで異議を唱えていない。それよりも北越へ迫ってくる朝廷軍にどう対応するかが緊急の課題であった。

河井継之助はまだ長岡へ戻っていなかったが、稲垣平助は藩主忠訓や老公忠恭（前藩主）に「朝廷への恭順こそ藩を救う道である」と必死に説いた。「恭順」とは、朝廷軍と戦争をしないために唯一とりうる道であった。

三月六日、「崇徳館」の造士寮（ぞうしりょう）寮長である酒井貞蔵が「恭順派」の意向をうけて「意見書」を書き、家老・御用番の稲垣主税に提出した。

「上様（徳川慶喜）が恭順謹慎の立場をとっているにもかかわらず恭順に反対することは、上様にたいして形は忠のようでも不忠であり、義のようであるが実は不義である。だから列藩は総て恭順の意を表明したのである。我が藩の無学蒙昧（もうまい）の徒たちは、いたずらに戦争を唱え、力の大小を計ることもせず、御家に朝敵の名を負わせようとしている。たとえ薩長は奸賊だとはいえ、天朝を奉って号令を発しているのでは致し方ないではないか。

藩が滅亡し、士民が塗炭の苦しみに陥らないように、どうか無謀の者たちの虚言の恫喝に籠絡されないようお願い申し上げる」（要旨）

この「意見書」を書いた酒井貞蔵は、頭脳明晰で気骨ある人物として知られていた。のちに酒井は「意見書」を握りつぶした河井継之助に対して「斬奸状」を用意して暗殺を試みたといわれる。戊辰戦争がはじまると、得意の馬術を生かして本陣付きの伝令となって活躍するが、馬上疾走中に狙撃され戦死した。享年四十。

三月十五日、北陸道鎮撫征討軍が越後の高田に達し、総督府は出頭した長岡藩参政植田十兵衛に対して再度恭順の請書提出を命じた。今度は「藩主の直筆、直印の請書」が要求された。長岡藩としては引き延ばしにも限界があるとして、激論の末、朝廷軍に恭順して出兵することを決議した。藩主の直筆・直印の請書をたずさえて使者の木村誠一郎が高田へ向かったが、佐幕主戦派の急先鋒である花輪求馬、三間市之進、村松忠治右衛門らが密かに藩主や重臣に翻意を迫って決定を撤回させ、使者を追いかけて請書を取り戻して帰藩した。このことは、稲垣平助ら恭順派の人たちばかりでなく、全藩士に知らされなかったという。

三月二十八日、ようやく河井継之助が江戸から海路帰国した。河井継之助がプロシア商

人エドワード・スネルから雇いあげた船は、三月三日江戸湾を出発し、箱館を経由して新潟の湊に着いたのが三月二十三日だった。河井は新潟からは馬で長岡へ戻った。

船には、外国の武器商人から買い入れたミニエー銃やガトリング砲二門をのせてきた。当時日本には三年前に終結したアメリカの内戦（南北戦争）で余った大量の武器が入ってきた。本国では二束三文の兵器を日本に持ってくれば高値でとぶように売れた。

ガトリング砲は日本に三門しかないというふれこみで、そのうち二門を河井継之助が買い入れた。ガトリング砲は三百六十発の弾を六つの銃身から連射できる速射砲である。南北戦争末期に登場した兵器だが、機動性に欠け野戦では使用されなかった。河井が支払った額は、一門三千両とも五千両ともいう（幕末の米価換算で一両一万円とすると、一門三千万円または五千万円になる。ただしアメリカで取引されていた値段の十倍以上だったという）。それらの経費は江戸藩邸の家宝を売り払って賄われた。[註8] ガトリング砲こそ長岡藩の武装力の象徴だといわれたが、実際にはほとんど役立たなかった。

河井が船で運んできたのは武器だけではなかった。鳥羽・伏見の戦いで敗れた会津藩と桑名藩の兵各百余名を乗せてきた。会津藩は越後に十万石といわれる所領（幕府から直轄領の支配を委託された預地）があった。攻めてくる朝廷軍からその土地を守るために送り込

まれてきたのである。会津藩主松平容保（かたもり）は京都守護職を務めたときに薩摩藩の謀略に振り回され痛い目にあった。「薩長憎し」の急先鋒である。船には桑名藩主松平定敬（さだあき）が乗っていた。容保の実弟で、京都所司代として兄と共に尊皇攘夷派の取り締まりを行い、鳥羽・伏見の戦いに参戦した。ところが東海道鎮撫征討軍が伊勢の桑名藩（十一万石）に迫ると、藩主不在の桑名藩の重役たちはさっさと恭順の意を表明して城を明け渡したため、定敬は帰藩することができず越後の柏崎に向かうことになったのである。桑名藩も越後の柏崎の周辺に五万石相当の所領があった。

河井継之助は、朝廷軍に歯向かう会津・桑名両藩の指揮官と兵士たちを越後に運んできたわけである。朝廷側にすれば、明らかに利敵行為であり、ますます長岡藩に不信を抱くことになるのは必至だった。稲垣平助ははらわたが煮えくり返る思いだったに違いない。

［註1］　鉞子の生年月日は、稲垣平助の手記「誌禄」によるもので旧暦（太陰暦）のままである。地元長岡では一般にこの生年月日を採用しており筆者もそれにならった。この年十一月、明治五年十二月三日を明治六年（一八七三年）一月一日とする新暦（太陽暦）が採用された。明治六年以降は新暦で記す。

［註2］ Ruth Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture*, 1946（ルース・ベネディクト『菊と刀　日本文化の型』長谷川松治訳、講談社学術文庫、平成十七年）

［註3］ 稲垣平助重光手記「誌禄」（長岡市立中央図書館所蔵）

［註4］ 星忠吾には会津に本妻がいたらしく、当初建は星の妾だった。「誌禄」に、「明治十五年五月六日、（四女建を）福島県岩代国北会津郡若松桂林寺星忠吾方へ妾に送る」とある。これは戸籍上のことで、一ヵ月後建の戸籍は長岡へ移されている。「誌禄」には、長女泰や二女喜戸を嫁入りさせる際には、数々の高価な結納品や嫁入り道具のリストが記録されているが、四女建のときは一切それがない。妾という境遇だったからであろう。のちに建は星忠吾の正妻になっている。

［註5］ 稲垣重政「回想の長岡」（『長岡郷土史』第二十三号、昭和六十年）

［註6］ 長岡市史双書『長岡藩政史料集（6）』

［註7］ 吉村昭『生麦事件』新潮社、平成十年。江戸時代の金一両の価値は、米価で換算すると、江戸初期は十万円前後、中・後期は四万～六万円、幕末は米価高騰で四千～一万円ほどになるという（日本銀行金融研究所貨幣博物館資料）。生麦事件の賠償金「約二十七万両」は、一両一万円と換算すると、二十七億円相当になる。ただし、これはあくまでもめやすである。

［註8］ 今泉鐸次郎『河井継之助伝』博文館、明治四十二年。内山弘『戊辰戦争とガトリング砲』長岡歯車資料館、平成十八年等による。

第二章　戊辰戦争と明治の稲垣家

決裂、そして破滅へ

河井継之助は、帰るとすぐに、日ごろ目をかけていた安田鉚蔵を呼び出した。

安田は上級家臣で洋式銃隊の士官を務めていたが、恭順派の指導的な論客であった。彼の父も弟も恭順派に属していた。河井は「安田を説得できれば稲垣平助ひきいる恭順派を分断できる」と考えたのである。

安田鉚蔵は追憶談を残している（今泉鐸次郎『河井継之助伝』による）。

藩主父子（忠恭・忠訓）が臨席する前で、河井はまず「余が不在の間何で政事に嘴を入れたのか」と、安田を問い詰めた。安田は「将軍が謹慎して恭順しているのに、なぜ我が藩は抗戦しなければならないのか」と反論する。河井は「汝は武人だ、政事を問う必要などない」と大声で叱責した。安田が怒って、藩主の意を伺いたいというと、藩主忠訓は「余の意は河井が言うとおりである」と答えた。河井は安田に「明日俺の家に来い」と命じる。

翌日、そしてまたその翌日、二人は議論を戦わすが平行線のままだった。河井は突然、「余の真意を貴公に明かそう」と持論を説明しだした。「実を言えば、余も敢えて戦いなど

したくないのだが、我が藩の人心は眠ったままだ。我が藩に必戦の覚悟さえできれば、朝廷軍を説得して進軍を止めさせることが可能だ。そして会津を説得して恭順させれば戦いなどしないですむのだ。これが余の秘策だ」とのべ、「誰にも漏らすなよ」と河井は言った（これが河井継之助の「秘策」、所謂「武装中立論」といわれるものであるが、武装中立論と銘打って書かれたものは存在しないという）。

安田は答えた。「そうなれば甚だ幸運だが、それは恐らく一片の空想に過ぎないでしょう」

この安田の言に河井は激怒した。

河井継之助は三日三晩かけても安田鉚蔵を説得できなかったのである。

二人はそれで別れたが、その後安田は藩庁から呼び出しがあり、「不届きにつき切腹仰せられるところ格別の思召しを以て終身蟄居を申し付ける」とのお達しがあった。

四月、河井継之助は家老に任命され、稲垣平助は家老職を解かれた。平助は兵学所頭取という閑職に追いやられ、藩政に参画できない立場になった。河井は、不在中に決議された朝廷軍への出兵案を引っくり返して反故にする。さらに総督府から出兵の代わりに三万両の軍資金を提供するよう要求されると、「そんなものは放っておけ」と無視した。

稲垣平助の敗北だった。平助は心労が重なって病床に臥した。銈子が『武士の娘』のなかで「夫（銈子の父）の信奉していたところが破れたとき」とは、このことを指していたのである。

四月十七日、藩主忠訓列席の下、居並ぶ藩士を前に河井継之助は演説した。

「今般、姦臣薩長は、天子を奉って幕府を陥れた。譜代の諸侯が幕府に背いて薩長に従うことは大いに疑問だ。我が藩は小藩とはいえ、たとえ孤立してでも独立し、存亡を天にまかせ、三百年来の主恩に酬い、且つ諸藩の嚆矢となるべきである」

河井継之助の演説はいつも単純明快で迫力があった。藩士たちは唯々うなずいて下城していった。三河以来長岡藩には武士の心得として「常在戦場」（常に戦場に在り）という四文字があった。日ごろから倹約をむねとして、戦いに備えておけという戒めである。

閏四月（この年は二十九日間の閏月があった）、河井継之助は上席家老に任命され、執政として名実共に長岡藩政を牛耳ることになった。そしてさらに「軍事総督」に任じられ、藩の軍隊の総指揮官となることも決まった。藩の全権を握ったわけである。

五月二日、雨のなか、かの有名な「小千谷談判」が行われた。越後小千谷は会津藩の所領で、それを守る会津藩軍と朝廷軍の間ですでに小競り合いがはじまっていた。

長岡藩軍事総督河井継之助は目付の二見虎三郎を伴って、小千谷の慈眼寺で先鋒総督府軍監岩村精一郎と会談する。岩村は土佐藩出身でまだ二十三歳の若さだった。河井継之助は「恭順してもいいのだが、藩論が割れ、会津、米沢、桑名の兵が抵抗しているので、いましばらく猶予をいただきたい」と言い、懐中より「嘆願書」を取り出して差し出した。これまで朝廷軍の命に従わない長岡藩を快く思っていない軍監岩村は、「貴公の言うことは時間稼ぎに過ぎないのではないか」と断じ、論争となった。河井にしてみれば「この若造が」という思いもあっただろう。河井が「征討の理由がそもそもおかしい」と言うに及んで、岩村は憤然として席を立った。僅か三十分足らず、決裂だった。

長州の奇兵隊を率いて柏崎に来ていた北陸道鎮撫総督府本営の参謀山県狂介（有朋）は、「河井を拘留すべし」と伝令を走らせたが、すでに河井は小千谷を去っていた。「小千谷談判」についてはさまざまな解釈があるが、このときの河井継之助の情報収集と分析の甘さは否定できない。長岡藩のこれまでの対応から、総督府はすでに長岡藩を「朝敵」とみなしている。しかも小千谷の先鋒総督府は血気にはやる最前線の司令部である。今さら長岡藩の「嘆願書」など見向きもするはずがなかった。

河井継之助が用意した藩主牧野駿河守名の「嘆願書」には、「徳川家追討の御命令だ

が、忘恩は日本国の道理に反することなので、今日に至った。日本に対し海外の強国が富強を図るなか、小藩ながら我が藩は節約に努め、三年あれば海軍の育成も可能だ。ここで争っては、領民を苦しめ疲弊を極めるだけだ。一藩一国のために言っているのではない。世界に恥知らずの強国を前に、日本国は今こそ一致団結すべきである」（要約）と書かれてあった。卓見であり正論だったが、リアリズムに欠ける。河井がこの正論を朝廷・幕府双方に訴えるべく事前になんらかの「工作」を行った気配もない。河井は、せめて柏崎の北陸道鎮撫総督府本営に直接出向いて、「嘆願書」を提出すべきだったのかもしれない。参謀山県有朋はのちに、手記「越の山風」に河井の「嘆願書」全文を載せ、「もっともなことが記されている」と評したが、戊辰戦争が終わったずっとあとの話である。すべては、遅きに失していた。

河井継之助は、こうだと決めたら自説を変えることがなく、自分の意見に他人を従わせても、他人の意見には耳をかさなかったといわれている。自信過剰であり、ひとりよがりの傾向があった。最大の問題は、情報収集と戦略の欠如であろう。それが裏目に出た。

こうして長岡藩は奥羽列藩同盟に加わり、戊辰戦争に突入するのである。

長岡落城

西洋の兵器で武装しフランス式の軍事訓練を行っていた長岡藩の抵抗は予想を上まわったが、長岡藩及び会津などの同盟軍八千に対して朝廷軍は三万である。

そのころ江戸では、上野寛永寺に立てこもりあくまでも幕府に忠誠を誓う彰義隊二千に対して、大村益次郎率いる朝廷軍による総攻撃が行われた。五月十五日のことで、江戸は豪雨に襲われていた。江戸城はすでに朝廷軍が接収し、上野寛永寺に謹慎していた徳川慶喜は水戸へ移っていた。朝廷軍はアームストロング砲など最新鋭の兵器をもって攻め、夕方までに彰義隊を壊滅させた。

越後でも豪雨の日々が続き、信濃川は氾濫していた。五月十九日未明、朝廷軍の長州藩奇兵隊が豪雨で濁流になっている信濃川を渡河して長岡の街に突入し、家々に火をはなった。新政府の『太政官日誌』にはこう記されている。

「十九日には、未明より官軍一同砲発、その紛れに長兵（長州兵）には大島村、薩兵（薩摩兵）は下巻下村を押渡し進撃致し候処、暫時口々にて賊徒防戦致し候えども、ついに敗走致し候に付き追撃に及び、昼九時分（正午近く）にも候らわん、長岡城神田口と申す処へ攻入り候処、城門より大砲小銃を以て防戦に及び候に付き、正面または横合より城の堀

へ乗付け、激しく発砲致し候処、賊兵防守の術尽き果て、城中へ火を掛け逃去り候に付き、直ちに城内へ乗入れ、門を開き衆兵一時に進入、残兵等追討致し、その他敗走の賊兵、酒屋陣屋または会津へ逃行候らわん……」

新政府は、自らを「官軍」と称し、長岡軍を「賊徒」「賊兵」と断じている。長岡城には、大砲三門とガトリング砲二門が配置されていた。「城門より大砲小銃を以て防戦」の「大砲小銃」のなかに、河井継之助が自ら操作したといわれるガトリング砲もあった。[註1]だが、この報告書からは、「官軍」側がガトリング砲の脅威をうけた様子はうかがえない。

夜明け前に藩主忠訓は、少人数の家臣に守られて、峠を越えて会津へ向かって逃れた。奥方は寝巻きを着替える間もなかったという。病身の稲垣平助も藩主のあとを追ったが、疲労はなはだしく脱落し、加茂へ逃れた。長岡城は藩士たちが火をつけて炎上させた。平助の妻金が祖母と子どもたちを避難させ、稲垣家の屋敷に火をはなったのはこのときのことである。

長岡落城の事態をうけて「恭順派」が動いた。恭順派藩士と朝廷軍本営との接触を仲介したのは、「草莽（そうもう）の勤皇家」と呼ばれる大橋佐平[註2]（長岡の材木商の二男）や佐々盛衛（もりえ）（古志郡の庄屋）だった。彼らは密かに朝廷軍と通じていた。恭順派は加茂に潜伏する稲垣平助

に連絡したが、平助は病重く同行できないので息子の平十郎（当時十一歳）に代行させた。幼い平十郎を頭に立てて、安田杏・鉚蔵父子、崇徳館教授の山田愛之助や藤野友三郎ら十数人が朝廷軍の本営に出頭し、陳情書を差し出した。

内容は、「戦争は一部の奸臣がひき起こしたもので主家の本意ではない。主家再興のために格別の仁恵をたまわりたい」というものであった。朝廷軍側はその願意を受け入れ丁重に遇したが、欺瞞ではないかと疑ってもいた。

そのころの心境について稲垣平助は手記「誌禄」に書いている。

「いくら尽力しても効果なく、空しく奸臣のために一命を失うとすれば、所謂〝犬死に〟というものである。邦内の民の苦難は極まっている。仕える主は一代だが、社稷（筆者註＝藩という国家）は重代（代々）続くのだ。だから、（城を捨て会津へ去った）現藩主に従わず不忠といわれるかもしれないが、三百年続いた家老職に報い、主家の再興に尽くすならば、どうして私の微忠（原文のママ）がゆるされないはずがあろうか」（要旨）

平助が死を覚悟したとき

稲垣平助は決意する。自ら朝廷軍方に出向いて主家再興を懇願しよう、と。「誌禄」に

そって平助の行動をたどってみよう。

五月二十三日、長岡藩及び会津藩など同盟軍は、長岡城奪還をめざし加茂の町を出発した。稲垣平助はとどまり別行動をとった。

五月二十六日、平助は従者二人を伴って船で加茂川から信濃川に出たが、洪水で進めず対岸の味方村で下り、小船で鎧潟（現在は干拓されて残っていない）を渡って曾根（西蒲原郡西川町、現在は新潟市に編入）に到り萬福寺に泊まる。途中、一揆を起こした農民の一団に出会うが、領民を軍役にかり出そうとする藩への抵抗であるのを知った。

五月二十七日、病が重くなり、和納村の勤皇家伊東卯三郎の家で二十日間療養する。

六月十七日、密かに角田山南の麓の道をたどって日本海の五ヶ浜へ行く。

六月十八日、早朝、平助と従者二人は漁師に変装し、七人の船子を雇って漁船を出し、午後三時ごろ出雲崎の勝見浜に着いた。そこで警備していた朝廷軍の加賀藩兵に刀脇差を差し出して降伏の意を表し、本営出先参謀への拝謁を求めた。従者の家臣山本治平及び小者平沢梅八、船子七名全員は縄に繋がれた。平助は家老なので謹慎させられただけだった。

六月二十日、出雲崎口本営の出先参謀・薩摩藩士古松重郎太及び長州藩士伊藤伝之輔に

面会し、平助が主家再興の願いを訴えたところ、書面を提出するよう求められた。

六月二十二日、平助は「懇願書」を提出した。その中で「王政復古以来、徳川家は恭順謹慎し、長岡藩主牧野家もそれにならって総督府に御請書を差し出そうとしたにもかかわらず、奸臣たちの為に、勤皇の実効を果たせなかった」と述べ、「赤心一身をもって主家再興を願うのみであり、我が身はいかように扱われてもかまわない」と結んでいる。

宿所で謹慎する平助は死を覚悟した。

それから三十余日、ようやく稲垣平助の願いは朝廷に達せられたとの内意が伝えられた。

「亡国の臣として万死を免れ、あまりに有難く落涙に及びたり」と平助は記した。

平助の動向はその後、長岡の朝廷軍本営にいた大橋佐平らの耳に入り、大橋たちは平助の長岡への護送を要請した。

七月二十二日、平助は二ヵ月ぶりに長岡に戻り、本営付参謀の薩摩藩士吉井幸輔及び長州藩士白尾行八郎の預かりとなり、神田三之町の田上屋勘七宅で謹慎させられた。

翌二十三日夜、平助は突然外へ連れ出された。

「七月二十三日夜に入って白尾殿の使者に導かれ密かにある館へ行くと、予の祖母や妻が連れてこられ面会した。嗚呼、人の情をくみ且つ一身の覚悟もしておけという白尾君は実

に情け深いお方だ。だがこれはすべて本営の内命であろう」（「誌禄」）

長岡落城以来生死不明だった平助を妻に面会させたのは、朝廷軍本営の温情あふれる処置だったが、平助自身は「沙汰次第では死もありうることを覚悟しておけ」と受けとっていたことが推測できる。

この夜のことについて、鉞子は『武士の娘』のなかでこうふれている――

戊辰戦争がはじまり風雲急を告げたとき、母はまだ二十歳だったが、武士の妻としての務めは心得ていた。父が家を後にすると、世継ぎの息子は忠義な家来である蓑田（筆者註＝原文ではMINOTA 本名は原巳之太といい稲垣家の護衛役）に託して菩提寺（長興寺）に隠れさせた。

ある日、雨降りの真っ暗な夜、一人の若侍が母金のもとを訪ねてきた。そして、夫の稲垣平助は囚われの身となり、江戸に送られることになったが、今夜、真夜中に、城外の山のふもとの道を通りかかるときに会見をゆるされると、告げられた。母は死に装束を下にまとい懐剣を帯にさして、雨降る暗闇のなか使者のあとについていった。

「間もなく闇の中に提灯の明かりが揺れるのが見え、駕籠かきの土踏む音がだんだん近づいてきました。縄をかけられた駕籠が道におろされると、駕籠の両脇に警備の武士が立ち

ました。母が目をあげると、駕籠の小さな角窓に父の蒼白な顔が覗き見えました。しばしの沈黙のあと、父が口を開きました。『金か、予の刀にかけてよろしく頼むぞ』ただそれだけでした。駕籠の簾が下ろされ、小さな行列は再び暗闇の中に消えていきました。（中略）哀れな母には父のいった『刀にかけて頼むぞ』の意味がよくわかっていました。『予の死が迫っている。稲垣家先祖代々の家名を継ぐ息子のことをよろしく頼む』ということだったのです」（『武士の娘』、英文より筆者訳）

このとき実際に平助が江戸に護送されたという記録はないが、長岡藩の全貌を知る重要人物として江戸で厳しい詮議を受ける可能性はあった。

それにしても、なぜ鉞子はこのエピソードをあえて（しかも幾分か脚色して）書いたのだろうか。「主君」（藩主）のために戦って死ぬことも武士の道かもしれないが、「国」（藩）の存続のために命を賭して生き残りの道を模索することも武士の道ではないのか。平助は朝廷軍に命乞いをしたわけではないし、自分の地位保全を計ってもらおうとしたわけでもない。鉞子は、「父は決して裏切り者でなかった。長岡藩のために命を賭して信念をつらぬいた武士だったのだ」ということを何としても後世に伝えておきたかったのである。

裏切り者の烙印

七月二十五日早朝、河井継之助指揮の下、態勢を立て直した長岡藩軍及び同盟軍は、密かに長岡東北の八丁沖と呼ぶ沼地を渡り、朝廷軍に占領された長岡城下に攻め入った。奇襲攻撃による長岡城奪還作戦である。虚をつかれた朝廷軍は総崩れとなり退却した。

河井の命を受けた長岡兵の一隊は、稲垣平助の息子平十郎と恭順派がかくまわれていた石内村極楽寺を急襲し、別の一隊は稲垣平助の家族が潜伏している川崎村の清兵衛宅を襲って火をつけた。稲垣平助や恭順派の人たちは藩の「裏切り者」とされ、家族の命も狙われたのである。彼らはそれぞれ逃げのびるが、川崎村の清兵衛宅にかくまわれていた平助の妻金は身重のからだで、年老いた祖母と幼い娘四人（泰八歳、喜戸六歳、千代野五歳、建二歳）と共に、危機一髪のところ村人たちの手引きで身を隠すことができた。

四日後の七月二十九日、朝廷軍の反撃が始まり、長岡城は再び朝廷軍の手に帰した。朝廷軍のあいだでは、長岡藩への怒りから、「囚われの稲垣たちを全員斬るべし」との議論が巻き起こった。これは本営首脳部の意向でおさまるが、稲垣平助や恭順派の人たちは、長岡藩軍の急襲次第でも、あるいは、朝廷軍の意向次第でも、いつも死と隣りあわせてい

たわけである。

八月二日、戦いに敗れた長岡兵は、栃尾、吉ヶ平（南蒲原郡下田村）、そして難所の「八十里越」（実際は八里の距離だが、一里が十里にも思えるような峠）を越えて只見へ下り、只見川にそって会津へ向かった。戦いで怪我を負った軍事総督河井継之助は、八月十六日会津塩沢村にて落命している。享年四十一であった。

越後で戦われた北越戦争は、戊辰戦争のなかで最も凄惨な戦いとなった。朝廷軍の戦死者九百五十七名（薩摩藩二百三十九名、長州藩百六十名、加賀藩百一名、高田藩八十五名など）、奥羽越列藩同盟軍の戦死者千二百五十七名（米沢藩二百七十四名、長岡藩二百五十九名、会津藩二百三十二名、水戸藩百七十三名、旧幕府脱走兵からなる衝鉾隊百二十五名など）。両軍合わせて二千二百名以上の兵士が正味三ヵ月の北越の戦いで死んだ[註3]。

兵火で焼失した家三千八百軒以上、罹災者一万八千人以上。長岡は町の八五パーセント以上が焼失した。まさに恭順派が恐れていた事態となったのである。

八月五日、稲垣平助は、朝廷軍の命令で長岡に近い古志郡大島村に置かれた北陸道先鋒軍本陣へ出頭した。そこで大参謀の西園寺公望より「ご沙汰あるまで当分長岡地方民生局に出仕し、民心を慰撫して朝廷の徳意を宣布されたい」とのお達しがあった。

新政府は朝廷軍が占領した各地に民生局を設置して、困窮する被災者に年貢の免除や救援米の配付を行うなど民心の掌握にあたった。民生局の幹部には朝廷側についた諸藩の藩士が派遣されてきたが、現地事情のわかる地元の恭順派の藩士や町民が雇われた。稲垣平助は「これも主家再興の実績になる」と考えて、慣れない仕事に真剣に取り組んだ。

九月十四日平助は柏崎民生局への転勤を命じられた。しかし平助が柏崎赴任を拒んだため、九月二十四日、民生局出仕二ヵ月足らずで「お役目罷免、謹慎せよ」と命じられた。平助はせっかく拝命したいわば新政府役人の仕事を棒にふったことになる。

九月八日、元号は「明治」と改元された。「慶応四年」は「明治元年」となり、「江戸」は「東京」と名を改められた。東北における戊辰戦争も終息に向かっていた。

長岡藩の大隊長山本帯刀の部隊は本隊に追いつくことができず、同日、濃霧のなか会津付近の飯寺村で朝廷軍に包囲された。降伏を認めない山本帯刀や藩士たちは、故郷長岡や藩主がいると思われる方角に座礼しながら、斬首されていった。家老山本帯刀はまだ二十四歳の若さだった。

九月二十二日会津藩が降伏し、九月二十五日長岡藩の藩主牧野忠訓は付き添いの婦女子や兵士たちと共に米沢で降伏した。藩主忠訓は江戸へ護送され謹慎を命じられるが、藩士

たちには一ヵ月余りたってから国元へ戻って謹慎せよとの命令が下った。旧暦で十一月初め（新暦で十二月半ば）、すでに雪が降りはじめていた。

藩士だけでなく彼らを追うように逃げてきた母や妻や幼い子どもたち、それに八十歳を過ぎた年寄りなど、千六百余名という大集団だった。極寒のなか、峠を越え、山を越え、渓谷沿いの雪深い山道を歩いてきた。一行が長岡にたどり着いたのが十一月三十日（新暦で明治二年一月十二日）で、この年は特に大雪で七尺（二メートル）余りの雪が積もっていたという。[註4]

しかし、やっとたどり着いた長岡の大半は焼け野原で、住む家も食べ物も満足になかった。藩では、なんとか食える方法をということで、崩れた長岡城の堀を埋め、そこを田や野菜畑、あるいは桑畑にして、朝は七時ごろから夕方の五時ごろまで、藩士たちを働かせた。そして何がしかの賃米をやって困窮者の生活を助けた。さらに養蚕のために各通りの両側を耕して桑畑にした。人々はなんとか飢えをしのぐために知恵を出し合ったのである。

大久保利通に面会

主家再興を願って奔走する稲垣平助のその後に話を戻す。

明治元年（一八六八年）十月一日、稲垣平助は謹慎が解かれると、「主家再興」の懇願運動に専念する。平助の思いはここにあったわけで、柏崎民生局への転勤を拒否した理由もそのためだった。当時新発田に置かれた総督府へ何度も相談に行ったり、長岡藩再興を願う支藩の三根山藩主牧野忠泰との打ち合わせに出向いたり、休む間もなく、家族とも会っていない。

十月二十九日、平助は東京へ向かった。柏崎、高田、関川、善光寺、松代、小諸、追分、松井田、熊谷などを経て、十一月十一日、浅草広小路の駿河屋に投宿した。

途中、十一月七日、平助が泊まった小諸の宿屋に長岡民生局より飛脚便が届いた。文面には新発田の総督府の前原彦太郎（長州藩参謀）及び松平源太郎（越前藩御用人）連名の署名がなされていたが、内容は長岡民生局からのクレームを代弁したものであった。「そもとは急に東京へ行くようだが、ただちに引き返し長岡民生局に御用向きを説明せよ。旧藩の面々とも相談すべきである」と書かれてあった。長岡民生局には平助の同志でもある恭順派の旧長岡藩士が勤めていたが、なかには平助の独断専行をこころよく思っていない

者もいたのである。平助は「もはや道のりの半分を過ぎて戻れない。東京での嘆願の模様は至急連絡するので何卒ご配慮願いたい」と返答している。

稲垣平助手記「誌禄」によると、東京に着いた翌日、「十一月十二日、薩摩藩の吉井幸輔（すけ）殿の屋敷に参上したところ、上京したばかりで同居していた元薩摩藩参与大久保一蔵殿下に面会し、今般の上京の趣旨を申し述べた」とある。

三日後の十一月十五日、再び大久保一蔵（利通（としみち））に面会すると、「近々のうちに御沙汰あるべし」といわれ、軍務官で薩摩藩の西直八郎（なおはちろう）に「懇願書」を提出するよう指示された。

大久保一蔵は明治維新の政権中枢で重きをなす実力者であり、のちに参議・大蔵卿、内務卿を歴任する。寡黙で威厳があり近寄りがたい人物だったといわれるが、大久保が「御沙汰あるべし」といえば、その陳情案件は通ったも同然だといわれていた。

稲垣平助は早くも最大の難関を通過したわけである。平助は早速新発田の総督府に文書を送り、嘆願の首尾を伝えると共に、長岡民生局へよろしくご配慮願いたいと書いた。

それにしても、このときに稲垣平助が、吉井幸輔（薩摩藩の要職を務め西郷隆盛や大久保一蔵と懇意だった）に会い、しかも吉井の屋敷にいた明治政権の実力者大久保一蔵にいと

も簡単に会えたのは、なぜなのだろうか。大きな謎といっていい。

稲垣平助はたしかに吉井とはそれ以前に会ったことがある。朝廷軍に投降したあと出雲崎から長岡へ護送されてきたときに、平助の身柄を預かった朝廷軍本営付参謀の一人が吉井幸輔だった。その後世話になったお礼に「白紬（しろつむぎ）一反」を贈った。しかしその程度の関係で吉井が稲垣平助を大久保に会わせる労をとったとはとても考えられない。

稲垣平助は、大久保から色よい返事をもらった十一月十五日、大久保に「菓子一箱（代価一両）」を献上している。さらに軍務官西直八郎に懇願書を提出した二日後の十一月十八日には、再び大久保へ「蒲焼鰻一箱（代価二両）」を、西に「蒲焼鰻一箱（代価一両）」を献上している。

それにしても、大久保の好みをあらかじめ知ったうえに、大久保のような高官に失礼でないお礼のやり方は、誰かの助言がなければとてもできるものではない。

そうすると、平助のために大久保に会わせる労をとり、失礼でないお礼の方法を助言したのは、いったい誰だったのだろうか。

その人とは、平助六歳のとき、故あって稲垣家を去り、のちに薩摩藩島津家の姫君に仕えた平助の実母菊以外には考えられない。

「お江戸のお祖母さま」

『武士の娘』の「九．盂蘭盆」は、身につまされるような不思議な章である。英語の原文の題名は「あるあやつり人形の物語」である。実は、この題名の方がこの章で語ろうとした鉞子の真意が伝わってくる。

盂蘭盆とは祖先の霊を死後の苦しみの世界から救済するための仏事である。陰暦七月十三日から十五日を中心に行われるが、地方によって日程や行事は異なる。長岡では、祖先の霊をお迎えして送るための行事で、さまざまな供養がとりおこなわれた。

ところが文中に、鉞子の父方の祖母にあたるという女性が、「お江戸のお祖母さま」として突然登場する。毎年この盂蘭盆の時季に、見たことも会ったこともない「お江戸のお祖母さま」が幼い鉞子に高価な贈り物をしてきたというのである。

稲垣平助六歳のとき、天保十二年（一八四一年）十二月二十五日、平助の父茂快が二十四歳の若さで謎の死を遂げた。茂快は、京都所司代に就任した藩主牧野忠雅のもとで京詰め家老の任にあった。こともあろうに亡くなった場所が、妻菊の実家稲垣太郎左衛門家の屋敷だったという。

姻戚関係にある両稲垣家のあいだでは、平助家は勤皇派、太郎左衛門家は佐幕派で、なにかと意見が合わなかったといわれる。それに、平助家は内政（国家老）、太郎左衛門家は外政（おもに江戸定府、江戸屋敷に常勤して藩のため情報を集め折衝する役）という役割分担があった。忠雅の先代忠精（ただきよ）が京都所司代のとき（寛政十年～享和元年）も京詰め家老は太郎左衛門家親子が務めた。それなのに今回、国家老たるべき若輩の茂快がなぜ京詰め家老になるのかという不満が太郎左衛門家にあったとしても不思議ではない。

『武士の娘』では、「（祖父は）義父の屋敷で手厚い饗応（きょうおう）にあずかった後、不思議なほどに激しい苦痛を訴え、そのままこときれたと申します。その宴には数多くの熱烈な志士達が列席していたとかでございます。祖父はこの会合の意味を事前に気づいていたのでありましょうか、裃（かみしも）の下には（死者に着せる）経帷子（きょうかたびら）を着ていたことがその死後判ったときいております」と書かれている（鉞子は茂快の死んだ場所を江戸にするなど多少脚色して書いている）。

しかし本当の死因がどうであれ、幕府のおとがめをうけないために、茂快は「病気」そして「病死」と届け出るしかなかった。茂快の妻菊は里方にひきとられた。まだ二十歳だった。夫が亡くなったあと妻は未亡人となるはずであるが、「稲垣氏惣系（そう）図」には、「病

気」の夫が亡くなる四ヵ月前に「離縁」と記されている。離縁の理由は定かではなく、つじつまを合わせるために、夫の生前にさかのぼって離縁したことにしたとしか考えられない。

それ以来平助は生涯母親に会うことはなかった。翌年、平助はわずか七歳で家督を継いだ。母親に代わって幼い平助の面倒をみたのは祖母の建だった。

そうすると、鉞子が幼いときに一緒に暮らしていた「祖母」とは誰なのか。それは父の祖母、つまり鉞子の曾祖母建だったのである。寛政十一年（一七九九年）生まれ、息子（平助の父）が死んだ当時は四十二歳、鉞子が生まれた明治五年（一八七二年）には七十三歳だった。

里方に還された菊は、その後、平安や鎌倉の古典の書物をひもといたり、諸々の芸道に精進しながら（雅号を春泉と称した）日々を過ごしていたが、やがて薩摩藩島津家の江戸屋敷の奥女中として仕えることになった。[註5]

当時薩摩藩といえば、生麦事件のあと、鹿児島湾に侵入した英国艦隊と戦火を交えることになるが（文久三年の薩英戦争）、その後英国と和解し西郷隆盛、大久保一蔵らが中心となって倒幕運動の先頭に立っていく。

菊は、その献身ぶりを認められて島津家の姫君を世話する地位に就いた。その間、大久保一蔵、小松帯刀、吉井幸輔ら薩摩藩中枢の人たちと接する機会があったであろう。姫君のお輿入れのあと島津家からひまをとったが、その後なんらかのつてで稲垣家のあどけない孫の鉞子のことを知り、お盆になると贈り物を送ってくるようになったのである。理不尽な理由で稲垣家を去ったのだが、「夫の精霊が帰ってくるお盆に何かしてあげたいという思いが祖母にあったからだ」と鉞子は書いている。祖母菊も幼いころ「縮れ毛」だったので、ことのほか鉞子が可愛かったらしい。だが、菊は長岡の稲垣家を去って以来、息子の平助とは文通をしたこともないし、ましてやなにか贈り物をしてきたという話もない。

その平助についてである。明治元年十一月十二日、主家再興のために平助が、すがる思いで薩摩藩の吉井幸輔の家に行き、新政府の実力者大久保一蔵に面会できた事実。それも上京した翌日である。事前に面会の了解もとらずに、なんの面識もない賊軍の長岡藩の元家老が、新政府の実力者大久保に会って主家再興の嘆願をするということは、常識的には考えられない。[註6]

このときこそ、薩摩藩中枢の人たちと親しかった菊が、主家再興の願いを果たすために奔走する息子平助のために、直接であれ間接であれ、なんらかの口添えをしたと考えられ

るのである。千万無量の思いを残して幼いわが子のもとから去らねばならなかった母のせめてもの愛のつぐないでもあったのであろう。

「あるあやつり人形の物語」は、まさに時代に翻弄された銈子の祖母、「お江戸のお祖母さま」への鎮魂の章なのである。

認められなかった貢献

明治元年（一八六八年）十二月七日、降伏した「賊軍」の東北・北越諸藩の処分が発表された。

長岡藩は稲垣平助の嘆願どおり「主家再興」が認められた。「藩主忠訓の謹慎・謝罪を思し召し、家名立ち下され、更に二万四千石を下し賜り、長岡城を預けるものとする」

北越・東北の戊辰戦争の本格的な戦闘の火ぶたを切った長岡藩は「賊軍」のなかで最も罪が重いとも考えられるが、ふたを開けてみると、長岡藩の処分は会津藩に比べればはるかに軽くすみ、関係者を驚かした。同じ土地での再興がゆるされ、特に城地預かりとなったのは長岡藩と棚倉藩（現福島県東白川郡）の二藩だけで、他の諸藩はすべて城地没収となっている。前述したように、長岡藩は広大な城地が戻ってきたお蔭で、困窮する藩士

救済のために城の堀を埋め立て、田や畑に変えて利用することができたわけである。

翌十二月八日、主家再興の喜びを胸に稲垣平助は、主君牧野忠訓へのお目通りを願うため、忠訓が謹慎中の芝の昌泉院（増上寺の別坊）を訪れた。だが、忠訓からはにべもなく「面会せぬ」旨の返事がかえってきた。門前払いの扱いである。

そこで平助は「謝罪書」を忠訓へ提出する。「主君に従って馬前で死ぬのも、恥を忍んで降伏し社稷（藩）のために命をかけるのも、忠に変わりはありませぬ」と書き、自らの信念から「主家再興」のために努力してきた経緯をたんたんと説明した。しかしそれでもお目通りはゆるされなかった。

明治二年元旦、平助は書いた。

「光陰矢の如く、去年の春は北国にあって床の間の梅の花を眺めたが、今年の春は東国の野に咲く梅を見るしかない。去年の元旦は長岡城で礼服を着て祝ったが、今年の元旦は東京でただ一人祝うしかない。旧藩主に言葉をつくして謝罪しても信じてもらえないのはまことに残念至極だ」（「誌禄」より要約）

明治二年六月の版籍奉還で、藩主は藩知事となり、藩政府を司る大参事に牧野頼母（旧家老）、三島億二郎、小林虎三郎が任命された。三島や小林は、河井継之助の主戦論に

反対していたが、朝廷軍に降伏する道はとらなかった。戦争に突入したとき、三島は軍事掛として戦闘に参加し、小林（河井家と親戚だった）は母を連れて逃れた。藩の新体制が発足したとき、このことが二人と稲垣平助の明暗を分けることになったのである。

八月二十四日、長岡へ戻った平助に藩庁より俸禄の通知があった。旧藩時代に発表された禄高改正と同じく二千石から五百石とされたが、そのあとすぐに「不都合の次第これあり」との理由でさらに半分の二百五十石にされた。長岡藩の存続に関する限り、主家再興に奔走した稲垣平助の功績は大きかったはずである。しかし、藩知事（旧藩主）だけでなく、平助に同情的であったといわれる三島億二郎までも、平助に冷たかったのである。

稲垣平助は武士としての地位も面目も失った。名を「平（ひとし）」と改め、九月二十日、町はずれの古志郡川崎村地蔵町に居を定め、別れ住んでいた家族を呼んだ。明治五年六月鉞子が生まれたのはこの家だった。

しかし七万四千石から二万四千石に減知された長岡藩が、旧藩士たちとその家族を養うことはとても無理だった。藩財政が成り立たず、翌明治三年十月、長岡藩は政府に廃藩を申請し、それが認められて柏崎県（のちの新潟県）に吸収された。明治政府が明治四年に断行する「廃藩置県」の九ヵ月前のことであった。

毎日の食事もままならぬ塗炭の苦しみのなかにあった庶民のあいだから、この災難を招いた戦争の指導者河井継之助への批判や非難の声が高まった。例えば、慶応四年（一八六八年）七月二十五日早朝、長岡城奪還をめざす長岡藩軍六百余名が八丁沖の沼地を渡って朝廷軍を奇襲するが、長岡兵は朝廷軍がひそむ村々を焼き払った。「焼かないでくれ」と叫んで懇願する村人の声は無視され、村々は凄惨な修羅場と化した。その怨念は今も語り草になっているほどである。村人たちは河井継之助を許しがたい人物だと考えてきた。[註7]

大参事小林虎三郎は、「戊辰刀隊戦没諸士碣銘」（明治二年七月五日設立）の碑にこう書いている。

「戊辰の変、我が藩の権臣迷錯して、妄りに私意を張り、遂に敢て王師に抗して、城邑陥没し、社稷墟と為るに至る」

戦争によって藩を荒廃させた河井継之助ら主戦派の人たちを厳しく批判したのである。

新政府は、河井継之助や山本帯刀の両家の断絶を命じ、恭順派の藩士を藩庁に採用した。だが、稲垣平助は、新政府に仕えず、民間で武士の商法に挑戦する道を選んだ。

封印された父の事跡

世の中が落ち着くに従って、次第に、戊辰戦争で命を落とした旧藩士への慰霊碑がたてられ、彼らへの同情が高まるようになった。戊辰戦争の経緯がどうであれ、主君のため藩のために戦争に参加し犠牲になったのだ。それを「犬死に」といわれたらたまらない。

それは明治という国家が軌道に乗ることと連動していたといえる。「富国強兵」をめざし、天皇と国家への国民の忠誠心を教育するために「軍人勅諭」や「教育勅語」というものが制定されていく。仕えるべき「主君」が徳川家や藩主から天皇に替わっただけなのである。「主君」天皇のために命を捧げよ、敵に降伏するくらいなら、死ぬまで戦え、そうした国民教育が徹底されていくのである。

こうして、「主君」に殉じた河井継之助や山本帯刀は、時代と共に次第に再評価されるようになる。主君に命を捧げることこそ「武士の華」とされたのである。明治十七年（一八八四年）には両家の再興が認められた[註8]。河井継之助の伝記が次々に出版され、「不世出の改革者」「悲劇の英雄」として描かれる。今泉鐸次郎著『河井継之助伝』は河井再評価の決定版となった。

それに対比して、敵方に恭順した稲垣平助とその同調者は、「裏切り者」「腰抜け」、あるいは「異端者」と呼ばれた。彼らについて語ることさえ遠慮されるようになっていく。

稲垣平助の経歴や事跡は封印された。こうして、杉本鉞子は、幕末維新の父の事跡については、口を閉じなければならなかった。『武士の娘』のなかで父についてふれるとき、遠まわしに表現しているのは、その所為だったのだ。

昭和四年（一九二九年）、長岡の地元紙『北越新報』に『武士の娘』の翻訳を掲載するにあたって、翻訳者の目黒真澄は杉本鉞子に会い、こんな話を聞いている。

「去年五月、アメリカから帰国して長岡へ参りましたとき、たまたま長岡落城六十周年の記念行事が行われていました。しきりに参列をすすめる人がおりましたが、自分は稲垣平助の一女として、謹んで遠慮すべきと思い、遂に参列しませんでした」（『北越新報』昭和四年五月二十一日付）

戊辰戦争から六十年たっても、長岡には、稲垣家の人がおおやけの場に出ることを遠慮させるような雰囲気があったのである。

稲垣平助は、河井継之助のように他人を服従させるような迫力や弁舌に欠けていたことは事実だったであろう。しかし平助には武士としての品格があった。

こういうエピソードがある。慶応四年四月、越後路に迫った朝廷軍を目前にして佐幕か恭順かをめぐって藩論が割れ、不安のなか寝食ままならぬある日のことであった。藩の重

役である佐幕派の面々が老公（前藩主忠恭）の館に集まり、碁を打ちはじめた。家老の山本帯刀や稲垣主税たちはそのあと酒宴を催す意向だった。そこに居合わせた平助は毅然として「国家（藩）の存亡がかかっているこの非常時になんということか。皆家に戻って考えるときではないのか」とさとした。場はしらけたが、皆すごすごと帰っていったという。また、こんなエピソードも伝えられている。長岡落城が迫ったとき、貴重な家財道具を持ち出す際に、平助は主のいない河井家のものも運び出して自分の名で安全な場所に保管させたという（河井の命令で平助の家族が潜伏する家が襲われたのはその二ヵ月後である）。

稲垣平助は、長岡藩再興が実現したあと、虚しい絶望感に襲われた。藩のために命をかけて奔走したにもかかわらず、再興した長岡藩からは冷たい仕打ちを受けた。権力組織の中の人間関係の非情さ、権力闘争の虚しさを厭というほど味わったのである。

その意味では、明治になって稲垣平助は家族愛や人間愛の大切さにあらためて気づいたといっていいかもしれない。『武士の娘』が読む人に感動を与えるとしたら、鉞子が幼年期に味わった家族愛や人間愛が基調に流れているからであろう。

鉞子はその後、異国へ渡るという思いもかけぬ経験によって、故郷長岡の歴史を、そして日本の歴史を、いわば世界的な視野で見なおす機会を得る。父の怨念を背負っていた鉞

子の心の重荷は、静かに、そして美しく、氷解していくのである——

［註1］ ガトリング砲の操作をわきまえていたら威力を発揮できたのかもしれない。幕府が発注し新政府が引き取ったアメリカ建造の最新鋭艦「甲鉄」の後部にガトリング砲がそなえつけられていた。明治二年三月、「甲鉄」が宮古湾に停泊していたとき、榎本武揚配下の旧幕府海軍軍艦「回天」が奇襲し、接舷して斬り込み隊が突入した。このとき、「甲鉄」からガトリング砲が発射され、斬り込み隊をなぎ倒し（四名以上即死）、「回天」の甲板上にいた甲賀源吾艦長や顧問のフランス士官を死傷させた（吉村昭『幕府軍艦「回天」始末』文春文庫、平成五年）。

［註2］ 大橋佐平（一八三六～一九〇一）は、明治になって長岡の『北越新聞』を創刊し、出版社博文館を起こした。

［註3］ 稲川明雄編『北越戊辰戦争史料集』新人物往来社、平成三年

［註4］ 小金井きみ子（喜美子）「戊辰のむかしがたり」同右所収（喜美子は森鷗外の妹、長岡藩士の息子で解剖学者の小金井良精の妻、「戊辰のむかしがたり」は良精の母の逃避行を聞きまとめたもの）。高島一男「戊辰の夜明け」（長岡高校創立九十九周年記念講演、昭和四十四年）等による。

［註5］ 菊は、江戸城大奥に仕えたとの説もある（稲川明雄『長岡城　落日の涙』恒文社、

平成十三年）。

［註6］　例えば、長岡藩大参事三島億二郎は、再三再四東京へ出張し新政府首脳に面会し陳情している。だが、三島は若い伊藤博文には会っているが、大久保には会ってもらえなかった。「明治二年五月二十一日、午後、大久保一蔵氏を訪ふ、不在、一蔵氏は参与にて一六も休みなしという」（『三島億二郎日記2』）

［註7］　新保和雄「異聞　長岡戦争夜話」（『長岡郷土史』）

［註8］　山本家は旧長岡藩士高野貞吉の六男が入籍して相続する。のちの連合艦隊司令長官山本五十六である。

第三章　婚約、そして東京へ

兄平十郎のこと

幕末維新の激変で翻弄された稲垣家のなかで、精神的に最も大きな打撃をうけたのは嫡男（ちゃくなん）の平十郎であった。維新後、いち早く時代の変化を悟った平助は、息子に最先端の教育をうけさせたいと考えた。

長岡は教育熱心な土地柄だった。山本有三（ゆうぞう）の戯曲で知られる「米百俵」の話が有名だ。戊辰戦争の戦災で塗炭の苦しみにあった長岡藩にたいして、支藩である三根山藩から救援米百俵が送られてきたとき、大参事小林虎三郎が長岡の将来のためには子どもたちの教育こそ大事だと説いて、救援米を売って国漢学校を設立したという逸話である。

長岡は早くから蘭学や英学の導入にも熱心で、福澤諭吉の慶応義塾（英学）に明治二年（一八六九年）には十人、翌三年には九人もの子弟が入っている。数では全国各藩のなかで中津藩、紀州藩に次いで多かった。平助も息子の平十郎をなんとか慶応義塾に入れたかった。

明治四年七月、平助は息子を連れて上京し、本家にあたる旧鳥羽藩主の稲垣家を訪れた[註1]。当主の稲垣長敬（ながひろ）は、明治二年六月、版籍奉還で鳥羽藩知事、明治四年七月、廃藩

置県で藩知事を免官されるが、政府から俸禄をもらい麹町の旧江戸藩邸に住んでいた。このとき、長敬は十八歳だった。

稲垣長敬は、福澤諭吉とも交流があり、自らものちに慶応義塾大学部を卒業している。平助は長敬に、息子の平十郎を福澤諭吉の慶応義塾に三年間入塾させるべく身柄を預かってくれるよう頼んだ。そのために「金五拾円也、御肴料弐百疋」の目録を提出した。五拾円は平十郎の年間の学費で、御肴料二百疋（絹四百反）は鳥羽稲垣家へのお礼だったと考えられる。その年の暮れになると平助は、息子を預かってもらっている鳥羽稲垣家の当主夫妻から家令、家従、女中衆にいたるまで贈り物や金子を届けている。

平十郎は名を「央」と改めた。慶応義塾に入るには今風の名前の方がいいだろうという鳥羽稲垣家の忠告に従ったのである。福澤諭吉の慶応義塾で学ぶことは、まさに近代化を進める明治維新当時、最先端の教育をうけることであった。福澤諭吉は、官におもねることなく自立して民で生きていく方策を教えようとしていた。慶応義塾の卒業生には実業界で活躍した人が多い。平助も息子にそれを期待していたに違いない。

翌明治五年十月、央はめでたく慶応義塾に入塾した。央十五歳である。ところが、央は親の期待に応えられなかった。勉強に身が入らず酒を飲んでばかりいるという。稲垣平助

手記「誌禄」に初めて平助の実母の名が出てくるのは、明治六年のこのときのことである。

「予の実母春泉君並びに稲垣館二殿（筆者註＝菊の弟でのちに出てくる稲垣銀二と同一人物）より報知あり。（央は）全く不勉強と見なすしかない故に長岡へ帰るよう申し渡した」

平助が六歳のときに家を去り、それ以来会うことも手紙のやりとりさえもなかった実母に、福澤塾に入った一人息子の一大事とあって連絡をとり、何か事あれば知らせてほしいと頼んでいたのであろう。その連絡の手紙がこれだった。平助は嘆いている。

「嗚呼本当に困ったものだ。鳥羽稲垣家にお願いして助けてもらったのに、一年足らずで帰岡とは。稲垣家嫡流の跡取りがこのざまでは先祖に対して予は赤面するしかない。福澤の塾へ三年間通わせる費用として、田畑を抵当にして百五拾円の借金までしたのに……」

（「誌禄」より要約）

央は長岡に戻り、長岡洋学校に入る。長岡洋学校を卒業した央は、明治十年七月二十歳のとき、新潟警察署詰めの巡査になるが、これも長続きせず長岡に戻ってきた。

『武士の娘』によると、鉞子が幼いころ、突然兄が家から出て行く。それも兄の婚礼の当日で、稲垣家の玄関先で花嫁の行列をまさに迎えようとする寸前だった。

明治十二年初頭のことで、央二十一歳、鉞子七歳のときである。父の平助は、旅籠稼業「稲荷屋」の経営で苦労している真っ最中であった。幼い鉞子にはよくわからなかったが、兄は、当時家に花嫁修業を兼ねて小間使いとして住み込んでいた「たま」という品のいい商家出身の女性と恋仲になっていることを父に告白し、家を出ていったという。

父は家を出ていった央を「もはや息子とは思わない」と妻や娘たちに話していたというが、「誌禄」には央の動向がときどき記されている。やはり父親として気が気でなかったのだろう。そこには央の家出という記述はないが、それを裏書きするような書面がある。「央儀東京へ出仕」という但し書きがあり、明治十二年二月十四日付の父稲垣平助と伯父槇行造（母の実家の当主）に宛てた央直筆の手紙が貼り付けてあった。そこには以下のように書かれてあった。

「稲垣家嫡流の息子なのに、若い時から学業を修めず怠惰放恣、日々むなしく過ごしてきました。家や大人の道理にそむき家名を興起できなかった罪は実に大きいと思います。今や前非を悔悟するばかりで、今から思えば汗背恐懼の至りであります。願わくば大人央の心情をご高察いただき、しばしのお暇を賜りたいと存じます。これからは初志を忘れず、辛酸艱難こそ汝を玉にするとの金言を守って、必ずや成功を遂げ、これまでの過誤と

不孝の罪をつぐないたいと思います。恐惶頓首百拝、稲垣央」（要旨）

央はこの年の十月、「陸軍教導団」[註2]（陸軍下士官の養成機関）に入団し、二年後の明治十四年七月砲兵科を卒業、陸軍砲兵伍長として東京鎮台陸軍砲兵大隊第二中隊に配属された。陸軍教導団に入るにあたっては、平助がひそかに東京在住の実母春泉の弟である稲垣銀二に頼み、従五位久本芳照殿下という人の保証をうけたという。

『武士の娘』では、東京から「佐藤少佐」という父の親友が長岡を訪れて、央の近況を伝えたことになっている。その際平助は妻と鉞子を同席させていて、「わが家には娘がいても、息子はいないはずです」と語る。ややあって、父は母に優しく「お客様にお酒を一献」と頼み、佐藤少佐と静かに碁をうつのである。

母の心労は大きかった。息子に嫁入りしてきた花嫁をそのままひきとり、娘同様に面倒をみて、のちに他家へ嫁がせたという。息子が家出した年の夏から秋にかけて、気丈な母は大病に倒れ、三ヵ月間近く病床にふしていた。

明治十四年六月、明治政府の重鎮で軍部を掌握する山県有朋（参議・陸軍卿）が北越巡察の折長岡へ立ち寄った。山県は、戊辰戦争の際、長州奇兵隊を率いて長岡城攻撃を指揮した人物である。稲垣平助は山県に拝謁し、陸軍教導団に入団している息子の引き立てを

陳情している。「誌禄」には、その際長岡の銘菓「越乃雪」二重を献上したとある。

央はその後（明治十六年四月）、東京鎮台付陸軍砲兵軍曹を拝命し、山砲兵第一大隊第二中隊砲車長に任命されている。山県が実際に力になったのかどうかはわからないが、東京鎮台の指揮官（参謀長）は、山県の息がかかった長州出身の乃木希典（まれすけ）陸軍大佐だった。

命の恩人がひらいた未来

必ずや成功してみせると父に誓っていた央は、いつまでたっても下士官どまりの軍隊生活に嫌気がさしてきた。軍隊では陸軍士官学校卒業のエリート士官（尉官以上の将校）と陸軍教導団出身の下士官（曹長、軍曹、伍長）のあいだには歴然と一線が引かれていた。これ以上軍隊にいても所詮（しょせん）出世はできないのだ、と央は絶望的な気持ちになっていた。

下士官服役期限（明治十四年七月の下士官拝命より満四年）が迫ると、央は、当時チャンスを夢見て海外へ出かけた多くの青年たちのように、アメリカへ渡ることを考えるようになった。故郷の父平助から「近ころは通風のせいか歩行も困難で杖をついて歩いておる」との書簡（明治十七年十二月二十四日付）が届き、父の健康が思わしくないことを知るとますます焦りを感じた。父平助は明治十八年（一八八五年）五月二十九日に亡くなっている

が、勘当同然の央は、故郷に顔向けができず、父の葬儀にも戻らなかったようである。

同じ年の明治十八年六月二十五日付で央は、「砲車長」を免じられて「武器掛」になっている。下士官服役期限が迫り、閑職に異動させられたわけである。[註3] そして翌七月、除隊する。ちょうどそのころ、央のもとに渡米をすすめるうまい話がまいこんできた。央が渡米したのは、この年の夏ごろと考えられる。

鉞子によれば、兄は「さる貿易会社」にだまされて渡米したのだという。

「兄はある人の口ぐるまにのせられて、アメリカに事務所をもっているという、さる貿易会社に持ち金全部を投資してしまいました。そして、アメリカの方の仕事をひきうけてくれれば、社員にしようといわれますと、武家育ちの兄のことでありますから、商売のことは何も判らないままに、すぐそれをひきうけて、出帆（しゅっぱん）したのでございました」（『武士の娘』）

央はサンフランシスコに着いてすぐにだまされたことを知る。貿易会社の支店というのは日本人街の小さな玩具店で、店員の妻らしい人がいたが、央のことなどなにも聞いていなかった。央はうす汚いホテルに身を寄せるが、そこは労働者か安月給とりかと思われる日本人たちが賭け事などをしているようなところだった。央にはなにもかも不愉快だっ

た。

持ってきたお金を使い果たし、仕事もなく憔悴しきった央が、路上で偶然出あった人物が杉本松雄だった。鉞子の未来の夫になる人である。松雄は、どこか紳士らしい兄を好ましく思ったのか、自分の店に働き口を見つけてくれたという。


杉本松雄

杉本松雄（松之助）は、文久二年（一八六二年）京都郊外（現京都市伏見区）の「草津の湊」で魚問屋を営む杉本庄太郎の二男として生まれた。「草津の湊」は、鴨川と桂川の合流点近くにあり、江戸時代、大坂と京都をつなぐ水運の荷揚げ地として賑わっていた。四歳のとき父が亡くなり、母の手で育てられた。十五歳のとき家出し、苦労の末、明治十五年（一八八二年）、横浜から渡米したという。二十歳のときであった。[註4]

杉本松雄は、サンフランシスコで働き、アメリカの貿易商に認められて、自分の店を持つまでになった。央と松雄は、性格的に意気投合するところがあったのであろう。央は二十七歳、松雄は二十三歳、四つ違いであった。

とにかく異国で無一文になった央にとって、杉本松雄は命の恩人といえる人だった。

当時、留学生をふくめ雄飛をめざして海外へ渡った青年たちは数多くいた。どちらかといえば成功した例ばかりが語られるが、その蔭には、ノイローゼになったり病に倒れたり、仕事がうまくいかず挫折した人たちがかなりいた。なかにはそのまま異国で骨を埋める場合もあったが、同胞の助けをかり借金をして、こっそり帰国する人たちも少なくなかった。杉本松雄のお蔭で帰国できた央も、その一人だったといっていい。

鉞子によると、翌明治十九年五月、平助の一周忌が過ぎて初夏がやってきたころ、央は長岡へ帰ってきた。平助は遺言のなかで息子の過去をゆるし、家督を継ぐことを認めていた。

その夜、稲垣家の主におさまった兄のために、近親者が集まって歓迎の小宴が開かれた。だが、兄を見る鉞子の目は厳しい。

「私はしげしげと兄を見つめておりました。洋服のお袖がつまっていることや、黒い靴下などが下働きの人を思わせるのでございました」（同前）

兄の央は、アメリカへ行って一年足らずで帰ってきた。父に誓っていた人生再起の夢は無残にも破れたのだった。

兄の央は、帰国してから、アメリカで助けてもらった杉本松雄としきりに手紙のやりと

りをするようになる。そうしたある日、親族会議が開かれた。兄、祖母、母、そして親戚の叔父、叔母たちが集まってなにやら相談していた。そこに鉞子が呼ばれ、母から縁談が成立したことを告げられる。

当時の日本では女性は家が決めたところに嫁ぐのが普通だったので、鉞子は素直にそれを受け入れた。相手は兄の恩人杉本松雄である。婚約したとき、杉本松雄は二十四歳、鉞子はまだ十四歳だった。鉞子は、未来の夫のもとへ嫁ぐための花嫁修業をはじめるのである。

ところで、十四歳になったばかりの妹を異国にいる日本人に嫁がせる兄の意図はなんだったのだろうか。杉本松雄が、武家育ちでつつましく忍耐強い嫁なら異国の生活に耐えてくれると考え「鉞子を嫁に」と頼んだのだろうか。あるいは、何らかの意図があって兄がすすめたのだろうか。恐らくその両方の思惑が合致したのであろう。央は、松雄の助けをかりてもう一度アメリカへ渡って、一旗揚げたいと考えていたようである。

その後杉本松雄から、西海岸から東部（オハイオ州シンシナティ）へ移って、独自の商売をはじめることにしたので数ヵ年は日本に帰れないから、鉞子に単身で渡米するようにという便りがくる。単身でアメリカへ行くならまず英語を学ぶ必要があるという兄の言葉か

ら、鉞子は東京の学校へ行くことになった。

鉞子の遊学のために、母は夜な夜な古い衣類を丹念にほどき、いしがその布を染めかえて通学用の着物に仕立て直してくれた。そして遊学の経費捻出のために、また土蔵から多くのものがおしげもなく売り払われたという。

鉞子は、仲の良かった友だちと、雪が解けはじめた信濃川の土手でお別れの摘み草をする。めいめい紫のお高祖頭巾を被り、派手な長襦袢をのぞかせながら、手に手に竹籠をもって駆けまわりさざめきあった。「思えば、これが、長岡で過した若い日の最後の楽しい思い出になってしまいました」と、鉞子は書いている。[註5]

東京への旅

明治二十年（一八八七年）初春、東京の親戚から入学手続きがすんだとの連絡があった。十五歳の鉞子は兄の央に伴われ、二台の人力車と荷を運ぶ荷駄馬で、東京まで八日間の旅をする。当時、越後から東京へ行く道のりは二つあった。一つは小千谷、湯沢を通り三国峠を越え、群馬の高崎にぬけていく道である。もう一つは、長岡から日本海側に出て直江津から高田を通り、妙高山の峠を越えて信濃に入り、長野、小諸を経て、高崎へぬけ

ていく道である。このとき、鉞子たちは初春の雪解けが遅い三国峠を避けて後者の道を選んだ。

「初旅」と「旅に学ぶ」の二章は、紀行記としても出色のものであろう。つぎはぎしたお坊様のお袈裟を思わせる棚田、鎮守のお社や水車がみえる風景、信州の山村に伝わる姥捨て山の話、かつて稲垣家に仕えていた爺やの妹みよとの心温まる再会、東京から高崎にまで通じていたいわゆる「陸蒸気」に乗るとき、ホームに下駄をぬいであがり兄に叱られたユーモラスなエピソードなど、日本の田舎の原風景が生き生きと描かれている。

この旅の道中、鉞子は兄から聞かれる――

「エツ坊、家ではいつ頃、お前を尼にすることを思いとどまったのだろうね」

「さあ、判りませんわ」と私は答えました（『武士の娘』）。

しかし、兄からこう聞かれて、鉞子はハッと思い当たることがあった。鉞子を尼にしようという祖母の言葉に黙って従っていた父は、内心では承知しがたく思っていたのだ。そこに兄の家出という事件が起こり、父は鉞子を家の後継者として育てる決心をしていたふしがある。父の死後、兄は戻っては来たのだが、アメリカで助けられた恩人に鉞子を嫁がせることになり、「鉞子を尼に」という話はいつの間にか立ち消えになっていたのである。

鉞子がこの旅でたどった道は、かつて父平助が江戸（東京）へ行くときに通った道でもある。道中、鉞子の心のなかにしばしば父の面影がよみがえってくるのであった。

東京では、かつて鉞子の兄が福澤諭吉の慶応義塾に入るとき世話になった旧鳥羽藩主の稲垣長敬が面倒をみてくれた。「親戚中で信望のあつい東京の若い叔父」とは長敬のことと考えられる。[註6] 当時三十三歳であった。

鉞子は、数ヵ月間、叔父の「大きなお屋敷」（鳥羽稲垣家の上屋敷は麹町区麹町八丁目にあった）から、叔父が世話してくれた「ある名高い女学校」に通った。それは明治十八年に創設された「華族女学校」と考えられる。そこで英国帰りの先生から英語を学んだという（そのころ米国帰りの津田梅子が華族女学校で英語の先生をしており、鉞子は津田に英語を学んだ可能性もある）。

しかし、学校でも叔父の家でも礼儀作法ばかりがうるさかった。兄の央は「アメリカへ行くには妹はもっと実際的な教育をうけたほうがいい」と考え、父の旧友である「佐藤少佐」[註7]に相談したところ、少佐の妻の母校である宣教師の経営する学校を紹介してくれたという。

「海岸女学校」

その学校は、アメリカのプロテスタント（メソジスト監督教会）の婦人伝道会が、明治十年（一八七七年）、東京築地鉄砲洲（てっぽうず）の外国人居留地に設立したミッション・スクール「海岸女学校」であった[註8]。「海岸女学校」は、のちの青山女学院、今日の青山学院の前身である。

『武士の娘』によれば、鉞子は、一学期終了まで（一学期は九月から、二学期は翌年の二月からはじまる）麹町から毎日二里ほどの道をかよったという。その後、鉞子は寄宿舎に入った。

鉞子は宣教師の女性教師から英語を学んだ。だが鉞子が「英語」に接するのはこれが初めてではなかった。鉞子の父は、維新後も二年に一度爺やをつれて東京へ通っていたが（父は「文明開化の窓」と呼んでいた）、家族への土産には西洋から輸入された化粧用具や文具のほか、『泰西史鑑（たいせいしかん）』や『ウイルソン読本』、それに英文学古典の詩や短編を抜粋した本などがあった。

鉞子の心の眼を西欧に向けさせた『泰西史鑑』は、旧約聖書の天地創造からコロンブスのアメリカ大陸発見やフランス革命までの西洋の世界通史の翻訳である。明治二年から明

治十四年まで全三十冊が刊行されている。そのうちの十冊を平助が仕入れてきた。『ウイルソン読本』は、当時世界で最も普及していた英語の教科書である。明治初期から明治二十年にかけて使用された「小学読本」は、この『ウイルソン読本』を参考にして編纂された。鉞子はいち早くこうした書物に接していたので、学校で原書を読んでも理解しやすかったといっている。

故郷長岡で武士の娘として伝統的な教えとしつけを仕込まれて育ち、何ごとにもひかえめだった鉞子は、ミッション・スクールの明るくきびきびした若い外国人女性教師と日夜接するうちに、「閉じられていた心」が次第に開かれていった。

当時、海岸女学校はモダンな白亜の洋風建築で、有能なアメリカ人女性教師をえて評判が高く、生徒数は百名を超えていた。鉞子が入学した当時の校長ミス・アンナ・アトキンソンは婦人伝道会の年会で報告している。

「海岸女学校は、同等程度の官立の学校と同じに完全な日本学関係のコースをもち、それに加えて、生徒の多くは英学のコースをとるが、この英学コースは、アメリカのハイスクールのカリキュラムとほとんど同じ程度のものである。（中略）われわれの目的は、生徒たちをよい学生で、よいキリスト教信者にするのみでなく、やがてよき主婦にして、よき

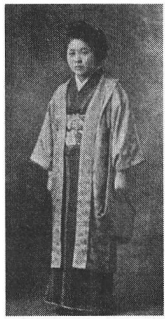
母となる女らしい女性を育成することにある」[註9]

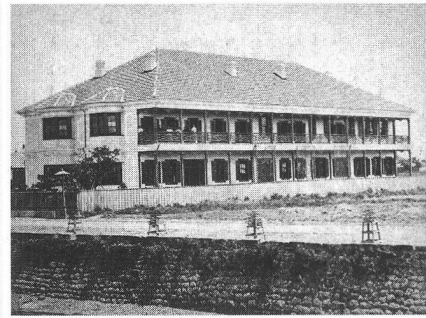
当時の海岸女学校の授業や生活の様子について、明治二十一年に卒業した飯久保冬（いいくぼふゆ）がこう回想している（飯久保は鉞子の先輩で、卒業後は青山女学院の教師）。

「授業はほとんど英語で行われ、はじめからウイルソンのリーダー（読本）を使用した。その他、国語、漢文、日本外史、音楽、裁縫、編物（スペンサー先生）等の科目があった。また、毎金曜日に『メソジスト教会問答』があり総て一人で暗誦させられたものだった。午前は日本語、午後は英語の勉強をする様になっていた。

生徒はほとんど寄宿舎生活で、部屋は畳、食事はお沢庵、おみおつけ等純日本式にして、日本人の生活を乱さないようにこころづかいしてあった。寮生は毎朝食事前に髪を結い、身だしなみを整（ととの）えなければならない。これが間に合わない時などは、はしご段のふちに石けん箱などを置いて出ると、スペンサー先生がすっかり取り片付けておしまいになるので生徒達は困ったものだった。また、その日その日の授業が出来ない場合など、チャペル先生のお部屋へ呼出され暗誦出来るまで反復練習を行うなど、勉強と共に全生活、全人格の陶冶（とうや）という点で細かい心づかいが配られていた」[註10]

ここに出てくるスペンサー先生（ミス・マチルダ・スペンサー）は、のちに鉞子の能力を





海岸女学校（青山学院資料センター所蔵）と女学校時代の鉞子（雑誌『ASIA』1924年3月号より）

高く評価し、鉞子の人生に大きな影響を与えることになる。

明治半ば、女学生のあいだに恋愛文学の波がおしよせていた。アルフレッド・テニソン（十九世紀イギリスのヴィクトリア王朝時代の詩人・小説家）の『イノック・アーデン』など、誰かが恋愛ものの翻訳書を手に入れようものなら、まわし読みされた[註11]。

鉞子も恋愛小説に読みふけったひとりだったが、「精神の強さや高貴さという点では、親の子に対する恩愛の情とか、主従の間の忠節とかには、較ぶべくもないように思われました」と『武士の娘』に書いている。

鉞子の性格をしのばせるエピソードがある。

雪深い長岡の冬の夜長に、祖母が語ってくれた滝沢馬琴（ばきん）の『南総里見八犬伝』を寄宿舎で読みふけっ

ていたとき、見廻りの先生から「そんな本は為にならない」といわれ没収された。鉞子は、その韻律的で雄大で雄渾な文章、そして仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の八つの徳を象徴する八犬士の伝奇的な物語は、日本の古典であるばかりか世界的な文学だと考えていた。英文学でも動物を人間化した寓話や童話をよしとしているのに、なぜ「八犬伝」がいけないのか理解できなかったといっている。卒業前に、「八犬伝」は鉞子の手許に戻ってきたが、鉞子はその後も愛読していた。

鉞子はなぜキリスト教徒になったのか？

鉞子はミッション・スクール在学中にキリスト教の洗礼を受けている。これは鉞子の人生のなかで最も重要な転機の一つであろう。

明治になって日本へやってきた宣教師たちの多くは、まだ二十代の女性で、若々しく使命感にあふれ魅力にみちていた。

学校で読まされた「聖書」については、『武士の娘』のなかで鉞子はこう書いている。

「英語を除きますと、私は学課の中で歴史を好みました。殊に旧約聖書は一番好きで、熱心に読み耽りました。その表象的な文飾は日本文によく似ており、その中に出てくる英

雄の長所も短所もまた日本の古武士と同じに感ぜられました」

だが、ミッション・スクールに通っているうちに、鉞子の心のなかでは、微妙な変化が生じていった。この心境の変化は、鉞子自身の言葉によってしか伝えることはできないだろう（以下、『武士の娘』からの引用）。

「私とて幼い頃は幸福に過して参りましたが、そこには歓喜とでも名づけたいような心のときめきはありませんでした。（中略）

ところが、女学生生活に入った私は、健かな明るさの息吹を胸一杯に呼吸するようになり、万力の如くに私を捕えていた束縛はゆるみ、うちにたれこめていた憂鬱も消えてゆきました。（中略）私の幼時の思い出の中にある人々は表情に欠けておりました。（中略）人々はお辞儀をし、歩き、話し、笑み交すのですが、そのお辞儀も歩行も話も笑いも、昨日と今日と何の変るところもなく、一昨日とも、否、遠い昔とも変りないのでございます」

そして、自由闊達で表情豊かな教師たちの精神を支えているものがなんなのかに思いをいたし、鉞子はごく自然にキリスト教をうけいれていったようだ。

「さて私がどうして基督教信者になりましたのか、その動機ははっきり判りませんが、そ

れは突然起った変化ではありませんでした。私の精神の自然の発達に伴って起ったことであろうと思います。ですから、今過去を振返ってみましても、はっきりした疑問というものは、ほんの一、二を数えるのみでございます。読書をしたり、考えたり、感じたりしていますうち、私の魂は未知の世界にのびてゆき、ゆるやかに、なめらかに、殆んど意識しないうちに、哲理や神秘や諦めの信仰を離れて、自由と快活と希望との高い理想の世界にとけこんで行ったのです」

そもそもアメリカの宣教師が設立したミッション・スクールは、キリスト教布教ということが使命の核心である。従って、アメリカの先生たちの最大の関心事は「何人の生徒がキリスト教の洗礼をうけたか」だった。しかし、生徒たちもその親たちも、キリスト教布教が学校の目的だとは思ってもいなかった。アメリカの言語や習慣を教えてもらうことがなによりの入学の動機だったのである。

従って、鉞子が母や親戚や長岡の友だちにキリスト教徒になることを伝えると、皆一様に驚き、鉞子を変人扱いすることになった。江戸時代の三百年間、基督教（キリスト教）は禁制であり、邪教とされてきた。明治になっても、しばらくは「基督教禁制」の高札が立てられたままであった。明治六年（一八七三年）、政府は外国からの抗議で高札を撤去

し、キリスト教布教は自由になったが、異教にたいする人々の心情はそう簡単には変わらなかった。

鉞子は、「他人の意見に寛容であった父からいろいろと学んでいた母は、新しい宗教にたいする偏見はなかった」と書いている。そして、「キリスト教がご先祖様をないがしろにするものではないことを知ると安心して（鉞子の）受洗を承諾した」という。

［註1］鳥羽藩（三万石）は小藩だが、鳥羽の港は江戸～大坂間の〝風待ち港〟として知られ、わが国屈指の良港で物流の要地として栄えた。また背後には伊勢神宮が存在するという重要な位置にあった。

［註2］明治政府は、明治七年、士官養成を行う「陸軍士官学校」と下士官養成を行う「陸軍教導団」を発足させた。下士官は徴兵された兵卒（平民）を戦闘集団として鍛え上げる役割で、実戦経験のある元藩士などが指導にあたっていたが、数が足りなかったため、士族を臨時募集した。教導団は歩兵、砲兵、騎兵、工兵、楽隊の諸科に分かれ、入団者は十二～十五ヵ月訓練をうけたあと、各部隊に配属された。入団時から費用はすべて官費でまかなわれ、服役期限は下士官拝命から満四年とされていた。しかし、「士官学校」入学者は難関を突破したエリートだったのにたいして、「教導団」入団者の大半は職にあふれた士族たちで、必ずし

も資質がいいとはいえなかった。徴兵制が軌道に乗ると、兵卒から優秀なものが下士官にとりたてられるようになり、教導団の役割はなくなった。陸軍教導団は明治三十二年廃止された。

［註3］　陸軍教導団証書。「砲兵軍曹稲垣央、第一連隊第一中隊砲車長差免同中隊武器掛申付候事、明治十八年六月二十五日、砲兵第一連隊」（央の息子重政の二女牧浦浩子氏所蔵）

［註4］　長岡史楽会『長岡史楽会レポートvol.1（知られざる杉本鉞子資料）』平成七年

［註5］　鉞子が叙情ゆたかに描いた信濃川の土手に、「長岡『武士の娘』研究会」（代表佐々木佳子）の尽力で「『武士の娘』文学碑」がたてられている。

［註6］　昭和四年七月付の稲垣央から稲垣長昌（長敬の養子）宛の手紙のなかで、稲垣長敬宅へ「十四歳（ママ）の小女だった妹鉞子」を連れて行った思い出が記されている（牧浦浩子氏所蔵）。

［註7］　青山女学院（海岸女学校）校友会名簿には、「佐藤少佐の妻」らしき名前はない。「佐藤少佐」は仮名の人物と考えられるが、誰なのか特定できなかった。

［註8］　築地の外国人居留地は今日の中央区明石町一帯で、現在は聖路加国際病院がある。

［註9］　『青山学院九十年史』昭和四十年、及び『日本におけるメソジスト監督教会婦人伝道会第三回年会議事録、東京青山、一八八六年八月二十七日～九月一日』〔英文〕（青山学院資料センター所蔵）

［註10］　青山学院女子部『八十周年記念会報』昭和二十九年（青山学院資料センター所蔵）

［註11］　『イノック・アーデン』はテニソン作の物語詩。船乗りイノック・アーデンが家族の

ためにひと山あてようと航海に出たものの、遭難して孤島に流される。十数年の歳月を経てようやく故郷に帰ってきたら、妻はイノックの親友だった幼なじみと再婚して幸せに暮らしていた。イノックは黙って身を引く。

第四章　空白の五年間

給費生の義務

鉞子は、明治二十二年（一八八九年）六月、海岸女学校全科を修了し、つづいて明治二十六年六月、東京英和女学校普通本科を卒業した。海岸女学校で二年間、東京英和女学校で四年間、合わせて六年間ミッション・スクールに在籍したことになる。東京英和女学校は、海岸女学校が手狭（てぜま）になったため青山に建てられたもので、海岸女学校の上級生が進学した。

ところで鉞子は、卒業のあと、すぐに未来の夫が待つアメリカへ渡ったわけではない。鉞子が渡米するのは、なんとその五年後の明治三十一年（一八九八年）のことである。

しかしこの五年間については、『武士の娘』でなにもふれられていないし、鉞子自身もなにも語っていない。『武士の娘』を読んでいる限り、ミッション・スクール卒業後鉞子は、ごく自然に、あっという間にアメリカへ渡ったことになっているのである。

この五年間は鉞子の人生のなかで「空白の五年間」といっていい。

鉞子は、このかけがえのない青春の五年間を一体どう過ごしていたのだろうか。意外なことに、卒業後、鉞子は東京浅草の小学校で働いていたのである。[註1]

ヒントになるのは、明治二十二年、海岸女学校へ入学した米山春の回想である。

「生徒はほとんど寄宿生で通学生はごくわずかだった。学費などは出す人もあり出さない人もあるという様な具合で、今から考えると夢のようなのどかな制度だったと思う。[註2]しかし学費を出さない人は学校の為に何年間か奉仕することになっていたそうである」

しかし実際には、「学費を出さない生徒」には、相当に厳しい義務が課せられた。

メソジスト監督教会婦人伝道会は、明治十二年、「奨学金制度」（スカラシップ）を設け、一人につき年間四十ドルの奨学金三十人分を日本へ送ってきた。

給費生がもらう額は「生活費と学費の全額」「学費のみ」「学費の一部」などまちまちだったが、給費生は卒業後、一定期間働く義務が課せられた。婦人伝道会が経営する小学校の教師として働くか、教会などで宣教師を手伝う仕事に従事した。期間は貸与された金額によって決められ、大概は一年ないし三年とされていたという。

ところが鉞子に課せられた義務はきわめて重いものだった。

〈奉仕期間、五年間。奉仕する場所、東京浅草デー・スクール〉

鉞子は一瞬目の前が真っ暗になった。

「五年間」ということなら、給費額として最高の「生活費と学費の全額」をうけていたか

らだったと考えれば納得できる。明治二十一年度の海岸女学校の例でいうと、在籍した百二十二名のうち、全額給費生二名、半額給費生四十二名、自費学生七十八名となっている。この「全額給費生二名」のひとりが恐らく稲垣鉞子だった。六年間（正確には五年半）に及ぶ給費額はかなりの額になったはずである。鉞子は、その経費を実家や親戚から払ってもらうのが困難であることをよく理解しており、全額給費生として卒業後の奉仕活動で弁済する道を選んでいたのである。だから何年間であれ働く覚悟だけはできていた。

鉞子が予想だにしていなかったのは派遣先である。多くが希望する派遣先は、横浜の小学校だった。学校には教師が住む付属の宿舎があり、となりには幼稚園やバイブル・ウーマン（婦人伝道師）養成学校もあった。安全で働き易い場所である。ところが鉞子が指示された派遣先は東京浅草の小学校だったのだ。五年間でさえ辛いのに、よりによってなぜ「浅草」なのか。当時、浅草は伝道会が「異教徒のとりで」（ミス・スペンサーの言葉）とみなしていたところである。「浅草寺」と「吉原」で知られる浅草は、キリスト教布教のためには最悪の場所と考えられていた。越後の田舎育ちの鉞子には到底見当もつかないところであった。

だが、鉞子は黙々と従った。そして身のまわりの荷物をまとめて浅草へ向かった。明治

二十六年夏のことである。「空白の五年間」はここからはじまる。

浅草の「みんみん学校」

鉞子が派遣されたところは、浅草の私立美以美小学校といわれるデー・スクールであった。メソジスト監督教会婦人伝道会が明治十九年（一八八六年）に設立した学校である。美以美小学校の「美以美」とは、メソジスト監督教会伝道会（Methodist Episcopal Mission）の頭文字「M・E・M」からとった漢字の当て字であった。「美以美」あるいは「美以」と書けば「メソジスト」を意味するのである。浅草の子どもたちは「みんみん学校」と呼んでいた。[註3]



マチルダ・スペンサー
（青山学院資料センター所蔵）

明治十五年ごろ、浅草には江戸時代の寺小屋から発展した私立の小学校が六十五校もあり、公立の小学校は五校に過ぎなかった。

鉞子が赴任したとき、校舎は、新谷町二番地（現西浅草三丁目）の借地にあった。生徒の多くは、浅草界隈の職人、小売業、露天商、芸人、日

雇いなどの家庭の子どもたちだった。経済的に恵まれない家庭が多く、家の仕事を手伝ったり子守をする児童が多いため、出席率は五〜六割程度だった。生徒の大半は尋常小学校（四年制）で卒業し、高等小学校（四年制）へ進学する生徒はごくわずかであった。月謝は、親の収入によって「三十銭、二十銭、十銭、免除」の四段階に分けられていたが、免除される生徒が多かった。

メソジスト婦人伝道会が設立した小学校は、東京には五校（築地、三田、神田、深川、浅草）あり、明治二十七年六月、この五校をまとめて管理する「美以小学校協賛会」が発足した。主宰したのは東京地区の婦人伝道総責任者である宣教師ミス・マチルダ・スペンサーで、この協賛会で五校の校長や教職員の任免、給与、教育方針、教科書の選定等が決定されることになった。ミス・スペンサーが海岸女学校で音楽や編み物や生徒のしつけを担当していたことは前述した。鍼子のこともよく知っていた[註4]。

美以小学校協賛会の二回目の会合（明治二十七年九月二十四日）で浅草の美以美小学校の一ヵ月の収支と教職員の給与が報告されている。

月謝収入　　十円十五銭

地代　六円
保険　一円二十五銭（一ヵ月）
給料　山本（主事、校長代理）十二円五十銭
　植松　九円
　野崎　七円
　稲垣　六円
　小使　二円
雑費　二円八十三銭五厘
支出合計　四十六円五十八銭五厘

「稲垣」とあるのは稲垣鉞子のことである。当時の小学校教員の初任給は八円、教員免許のない准教員の初任給は五円だった。鉞子は准教員で、二年目に一円あがって六円になったのである（ちなみに当時巡査の初任給八円、高級公務員の初任給五十円）。学校の収支は、一ヵ月三十六円四十三銭五厘の赤字である。その分は伝道会の寄付でまかなわれた。

校舎の近くの新谷町三番地に小さな借家があり、ここで鉞子は同僚の先生たちと住ん

だ。鉞子は生活をぎりぎり切りつめて、渡米のための旅費を蓄えるのが精一杯だった。

「士族の娘が浅草へ働きに行った」といえば、借金返済のために吉原界隈で身を沈めたに違いないと考える人は少なくない。事実、没落した士族の娘が吉原の遊女になったという話には事欠かなかった。浅草には独特な伝統と気風があり、住むとなると、よそ者にはなかなか馴染みにくいしきたりや付き合いがあるという。鉞子はこのときのことはなにも語っていないし書き残してもいないが、その苦労は想像に難くないのである。

鉞子の前任者と考えられるひとがいた。国分節という。兵庫県の士族の娘で海岸女学校を卒業したあと、婦人伝道会が経営する深川喜音小学校で一年、そしてこの浅草美以美小学校で四年働き、明治二十六年（一八九三年）五月に退職している。鉞子は国分節の後任として派遣されたと考えられる。当時の尋常小学校は読本、算術、修身、習字が基本で、女子には裁縫や礼儀作法が加わる。新人の鉞子が受けもたされたのは小学一年生だった。

初年度から鉞子は必死に働いた。同僚の山本貞吉（京都府平民）や植松文次郎（静岡県平民）は、三十歳前後の真面目な青年たちだった。二人は、雇われたときはキリスト教徒ではなかったが、その後教会に通うようになり、精力的によく働き規律を重んじる人たちとしてミス・スペンサーに信頼されていた。信頼にたる同僚がいたことは鉞子に幸いだっ

た。

日本におけるメソジスト監督教会婦人伝道会の年会報告書が残っている。毎年七月または八月に東京か横浜で年会が開かれ、函館、弘前、米沢、仙台、東京、横浜、名古屋、長崎、福岡に派遣されている女性宣教師数十名が集まった。そこで各地区の教会や学校の過去一年間の伝道活動について報告が行われ、方針や人事が審議された。この年会報告書はニューヨークの本部にも送られていた。

明治二十七年七月に開かれた年会で、ミス・マチルダ・スペンサーは、過去一年間（明治二十六年九月〜明治二十七年六月）の浅草美以美小学校についてこう報告している。



渡米前の鉞子
（雑誌『ASIA』1924年8月号より）

「浅草デー・スクールもまた、とても貧しい子どもたちが出席しています。しかし、彼らの多くはあたまがよく徐々に行儀や道徳を身につけつゝあります。最低学年の生徒を受けもつ先生は青山の卒業生ミス・イナガキ（稲垣鉞子）です。子どもたちにたいする彼女の深い愛は、子どもたちの注目と従順さを勝ちとっています。

この学校は近所の人たちに評判がよく、登録された生徒数は百十五名に達しています」[註5]（筆者訳）

ミス・スペンサーは、鉞子について「子どもたちにたいする彼女の深い愛」という言葉で満足の意を表しているのである。前任者の国分節について言及されたことは一度もなかった。ほかの学校についても一教師の名前をあげてこれだけほめている例はあまりない。鉞子が宣教師たちから注目され期待されていたことがよくわかる。鉞子は海岸女学校在学中、成績が優秀だったばかりでなく、将来性が高く評価されていた。ミッション・スクールの学生の将来性とは、キリスト教伝道活動の能力という意味である。

鉞子が子どもたちの心をつかんだのは、彼女の口からあふれるように出てくる日本の昔話だったであろう。『武士の娘』のなかで書かれているように、鉞子は幼いときから祖母や乳母が語る日本の昔話を聞いて育った。彼女が話す昔話は、粗雑で騒々しい浅草の子どもたちの心にも響いたのだ。うっとりとして聞く幼い子どもたちの表情に鉞子は胸をなでおろし、「私にも先生が勤まるかも」という自信をもったにちがいない。鉞子は子どもたちのあいだで評判の女先生になった。

問題は、なかなか馴染めない浅草という土地である。鉞子が赴任した年、伊藤栄とい

うベテラン教師が雇われていた。鉞子より五歳年上で岐阜県の士族の娘だった。だが、彼女は一年で退職した。「よそ者の若い女に浅草は勤まらぬ」と地元ではいわれていたという。補充されなかったので、二年目の年度は五人いた先生の仕事を四人で負担するしかなかった。

「たけくらべ」の世界

稲垣鉞子が浅草へ赴任してきたちょうど同じころ（明治二十六年夏）、浅草の下谷龍泉寺町（現竜泉）に樋口一葉が母と妹を連れて引っ越してきた。龍泉寺町は吉原遊郭の目と鼻の先にあった。鉞子が住む新谷町から歩いて十五分ほどのところである。一葉は鉞子と同じ明治五年（一八七二年）生まれ、二十一歳だった。ふたりとも武士の娘であり、借金返済という同じ理由から浅草という土地へやってきた。

鉞子は三百年続いた家老の娘だったが、樋口一葉の父は山梨の農家出身で江戸に出て来て苦労の末、慶応三年（一八六七年）に同心株（筆者註＝同心は与力の下で庶務や警察の仕事を担う下級武士。その役職が株として売買された）を買って下級武士になった人で、いわばにわか武士である。明治になって警視庁に勤め、娘の一葉はなに不自由なく少女時代を送

った。だが父は旧幕臣の出世が難しいことを知って、官職を退いて事業に手を出す。武士の商法である。そして事業に失敗して大きな借財を遺して死ぬ。一葉十七歳のときで、それ以来一葉は一家の主として母と妹をかかえ極貧の生活を余儀なくされた。

針仕事だけでは生計は立たず、文才があった一葉は短編小説を書いて売り込む。明治二十五年二十歳のときに書いた「うもれ木」が注目されるが、その原稿料は十一円七十五銭にしかならなかった。切りつめても三人家族の二、三ヵ月分の生活費で消えてしまう額である。銭子ものちに生計のたしにするために文を書いて売り込む運命になるのだが、それはこの二十数年後のことである。

一葉は借金をくりかえして生活するが、心機一転をはかるべく家財を売って、下谷龍泉寺町に雑貨駄菓子の店を開いたのだった。だが、生存競争の激しい浅草で素人女の商売が成り立つはずもなかった。越してきて十ヵ月、翌明治二十七年五月、一葉は店を廃業して本郷の丸山福山町に転居した。それから一葉は、おさえていた創作の情熱がほとばしるかのように、珠玉の作品を次々に書いて発表する。「大つごもり」「たけくらべ」「ゆく雲」「にごりえ」「十三夜」「わかれ道」など、「奇跡の十四ヵ月」と呼ばれる時期である。それらを書き終えたあと、明治二十九年十一月二十三日、結核に冒されていた一葉はわずか二

十四歳で急逝する。鉞子がまだ浅草で働いていたときである。

死後、樋口一葉の作品への評価が一挙に高まり、「夭逝（ようせい）した天才作家」といわれた。文学への関心が高かった鉞子は、一葉の作品をむさぼり読んだことだろう。そこには貧しくても必死に生きようとする女の悲劇が、どうにもならぬ明治の社会を背景に、鮮明に描かれていた。一葉が同じ浅草のすぐそばに住んでいたことを鉞子が知るのは一葉が亡くなってからだったろうが、好奇心の強かった鉞子は同僚の男先生に案内されて吉原のお祭り見物に行ったときに、一葉の店の前を通り一葉と目をあわせたことがあったかもしれない。

樋口一葉は浅草の龍泉寺町での体験から彼女の最高傑作とされる「たけくらべ」を書いた。「たけくらべ」は浅草の下町の子どもたちが主人公である。

「生意気は七つ八つよりつのりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそゝり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちよんちよんと拍子を取りて、運動会に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしきに教師の苦心さこそと思はるゝ入谷ぢかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近く、（中略）通ふ子供の数々に或（あるい）は火消鳶人足（ひけしとびにんそく）、おとつさんは刎橋（はねばし）（筆者註＝遊女の逃亡を防ぐため吉原の周りに掘られたどぶ川にかかる橋）の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子（はしご）のりのまねびにア

レ忍びがへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言（もぐりの弁護士）の子もあるべし、お前の父さんは馬（遊興費を払えないお客の家までついて行って不足分をとりたてる男）だねへと言はれて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしほらしさ」（樋口一葉『にごりえ・たけくらべ』岩波文庫）

鉞子が相手をした子どものなかには、一葉が描くこうした吉原遊郭に関係する仕事で生活の資をえている親の子もいたのである。時にはこうした親とも接触しなければならなかったであろう。鉞子にしてみれば別世界の人たちだった。

浅草の住人は一般に他人からとやかくいわれるのが大嫌いで、一本気でせっかちである。酒好きの人も少なくない、と地元の人は言う。こじれると大変だ。相手によっては刃傷沙汰にもなりかねない。ヤクザ、テキヤもいたし、さまざまな不良の輩もいた。歴史的に差別されてきた職業の人たちもいた。この人たちの多くは迷路のような長屋の一画に住んでいた。とにかく鉞子の周りにはこれまで接したことのない人たちがたくさん住んでいた。よそ者のクリスチャンから見れば、浅草はまさに「異教徒のとりで」だったのである。

鉞子は美人とはいわれなかったとしても、魅力的な目をした気品ある女性だった。街を

歩けば、独身の女先生として特別の目で見られたであろう。時にはからまれたり、すり寄ってくるうるさい男もいたであろう。

銭子は郷里長岡で厳格な武士の教育を受け、東京のミッション・スクールで開放的な女性の生き方を知った。そしてこの浅草で、複雑で矛盾にみちた近代日本社会の縮図を見た。銭子の心のなかの葛藤は決して小さくはなかったはずである。

この二十数年後に書くことになる『武士の娘』のなかで、彼女はさりげなく書いている。

「子どもの頃から、女が男に劣っているということは強く教え込まれていました。そして、それは運命と思っていましたから、疑ったこともありませんでした。けれども年を重ねるにつれて罪もない人に不幸が重なって困っていられることをたびたび見るにつけて、（中略）冷酷な運命という大きな力について、思い惑うようになり、ついに、私の心は、これに向って淡いながら反抗に近い気持をもつようになりました」（『武士の娘』「十五．受洗」）

このくだりは、浅草時代の経験が大きく反映していると思われる。

だが、銭子の社会の見方や生き方は、樋口一葉とは対極にあるといっていいくらい異な

っている。世の中について、一葉が悲観的だとすれば鉞子は楽観的だった。一葉が厭世的だとすれば鉞子は楽天的であった。一葉にとっては、男女の愛憎関係が最大の、あるいは唯一といっていいテーマだった。だが、鉞子にとって、恋愛は、家庭や社会の人間関係に比べれば大きな位置を占めなかった。

一葉と鉞子には共通するところもある。ふたりとも、権威に弱いようにみえるが、心のなかでは権威を軽蔑していた点である。一葉の人気が高まったとき、森鷗外は幸田露伴、斎藤緑雨との同人「めざまし草」に、人気絶頂の若い樋口一葉をさそった。だが一葉は、人気などは一時的なものだと考えて、権威ある大先輩からの〝名誉ある申し出〟をことわった。一葉は「日記」にそれを正直に書いていた。鉞子は『武士の娘』のなかで、権威がものをいう世の流れに乗れなかった父を擁護し、のちの作品『お鏡お祖母さま』では、国策に順応する〝軍国の祖母〟を描きながら軍国主義に殉じる悲劇を書く。

「我は女なり。いかにおもへることありとも、そは世に行ふべき事かあらぬか」（樋口一葉「みづの上」）とは、鉞子にも通じる明治生まれの知的女性の共通認識だった。

慶印寺に眠る人

明治二十八年（一八九五年）五月、メソジスト婦人伝道会の五つのデー・スクールの連合ピクニックが催された。場所は隅田川をはさんで築地の海岸女学校の対岸にある佃島（つくだじま）の公園である。鉞子は浅草の生徒たちと一緒に川舟に乗って隅田川を下り、佃島にあがった。

約六百名の児童たちは各校それぞれのバッジ、花飾りをつけ、小旗、のぼりを立て、浅草は紫、深川は黄、神田は赤、三田は緑、築地は白の色分けをした。一同整列し『主われを愛す』を合唱して遊戯に入ったが、なかでも日頃練習をかさねた柔軟体操は生徒全体の調和がとれていて素晴らしかった。「この公園は樹木がない。しかし陽射しは強くなかったので、何の事故もなく子どもたちは大喜びであった」と報告されている。[註6]

鉞子は久しぶりに開放感を味わったことだろう。

翌明治二十九年七月の婦人伝道会年会で、ミス・スペンサーは再び鉞子に言及している。

「青山の卒業生ミス稲垣は、変わることなく低学年の子どもたちの信頼をえている。最も熱心な教師のひとりであり、生徒たち全員から愛されている」

この年の学校の生徒数は百七十六名に増え、平均出席率は八割を超えていた。間違いな

く鉞子はミス・スペンサーの期待に応えていた。夏休みも正月も、鉞子は故郷長岡に帰らなかった。夏はサマースクールの手伝いがあったし、冬は伝道活動で最も重要なクリスマス・シーズンだったからである。

だが、心のなかは決しておだやかだったわけではない。結婚が五年先になったのである。同年輩の友人たちは次々に結婚していた。このあとアメリカへ渡り結婚するときに鉞子はこう書いている。「〝人生三つの必然的運命（誕生・結婚・死）〟のうちの第二の運命（結婚）がやってまいりました。結婚は、古い日本では、誕生と死と同等な位置をしめる大事な運命だったのでございます」（『武士の娘』「十六、渡米」、筆者訳。このセンテンスは日本語版では訳されていない）。学校を卒業したらすぐにでも結婚のため心はずませてアメリカへ行きたかったというのが、若き鉞子の偽らざる本音だったであろう。

浅草の五年間は、鉞子にとって、実は精神的にも体力的にもかなりきつかった。

だが、のちに『武士の娘』を書くことになったとき、鉞子はこの五年間のことは書かなかった。いやむしろ書けなかったのではないか。鉞子は浅草の五年間は心の奥底に秘めておくことにしたのである。

浅草で過ごしたころの大きな慰めは、美以美小学校がある同じ町内に「お江戸のお祖母

さま」が葬られているお寺があったことである。鉞子はその偶然を神に感謝した。「お江戸のお祖母さま」とは、鉞子の父平助の実母稲垣菊（雅号春泉）のことである。

寺の名を「慶印寺（けいいんじ）」といった。慶印寺は、天文五年（一五三六年）に創立された日蓮宗の古刹（こさつ）で、美以美小学校と同じ新谷町にあった。

稲垣平助の「誌禄」によれば、明治十二年十二月一日、稲垣菊（春泉）が亡くなったとき、春泉と一緒に暮らしていた弟の稲垣銀二が平助に手紙を寄こし、「春泉の遺骨を稲垣太郎左衛門家代々の菩提寺慶印寺に埋葬する」ことを知らせている。江戸定府が長かった稲垣太郎左衛門家は浅草に菩提寺があったのである。[註7]

「お江戸のお祖母さま」には、鉞子は一度も会ったことがないが、生涯忘れることのできない祖母であった。鉞子は、春と秋のお彼岸、そして盂蘭盆（うらぼん）の時季には、花をもって敬愛する祖母がねむる慶印寺へお墓参りに出かけたことだろう。そして、時代に翻弄された祖母と父への想いを新たにしたにちがいないのである。それはまた浅草で働く鉞子の心の支えにもなった。

時代のなかの鉞子

鉞子は浅草の教育現場で、時代の大きなうねりに直接ふれることにもなった。「教育と宗教の衝突」といわれる深刻な事態である。

明治初頭、「神仏分離令」が発せられ、「廃仏毀釈」と呼ばれる仏教寺院や仏像の破壊など仏教迫害の動きがみられたが、明治後半には、キリスト教にたいする国家権力の干渉が行われ、教会やミッション・スクールへの嫌がらせや焼き打ちが頻発した。

鉞子が東京で学校生活をおくっていた明治二十二年（一八八九年）、二十三年は、明治史における画期的な時期である。明治二十二年二月十一日「大日本帝国憲法」が発布された。憲法第二十八条には「信教の自由」が謳われており、キリスト教団体は祝賀会を開いて祝った。だがこの条文は「日本臣民ハ安定秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」とあるように、「国家の方針に背かない限りに於いて」という制限がついていた。

翌明治二十三年十月三十日「教育勅語」が公布される。すべての臣民（国民）は神聖化・絶対化された天皇の赤子として、指示された徳目に従わなければならないとする明治国家の教育理念が明示され、全国の学校に「教育勅語の謄本」と「天皇・皇后の御真影」

が下賜された。だが、キリスト教徒である内村鑑三の教育勅語にたいする礼拝拒否事件（明治二十四年一月九日）などをきっかけに、キリスト教は「君主の上に神があるのを信じる」非国家主義的な宗教だとして攻撃され、ミッション・スクールの宗教教育にたいするさまざまの非難・介入が行われるようになった。

特に日清戦争（明治二十七～二十八年）で国民のあいだに高揚した愛国主義、国家主義の趨勢のなかで、ミッション・スクールに通う生徒数は激減し、閉鎖する学校もあった。浅草美以美小学校も、その後時代の波に抗しきれなかった。関東大震災で校舎が灰燼に帰したあと、生徒たちは公立小学校に転校し、メソジスト婦人伝道会はのちに美以美小学校を廃校にした。鉞子が浅草で働いていたときは、ちょうどこうしたキリスト教伝道の受難の時期と重なっていたのである。

当時浅草のキリスト教伝道活動のなかでの大きな課題は、「禁酒運動」だった。

十九世紀中ごろ、アメリカの清教徒の流れをくむキリスト教団体のあいだから「飲酒は人間と社会を堕落させる悪の根源だ」として禁酒運動がはじまり、一八七四年オハイオ州で「キリスト教禁酒婦人連盟」が結成された。日本では明治十七年、西周、津田真道、加藤弘之、西村茂樹、長与専斎、中村正直ら明治の啓蒙家と呼ばれるそうそうたるメンバ

ーによって「大日本節酒会」が結成された。当時、青少年たちの飲酒による品行の悪さが大きな社会問題になっていたからである。明治十九年にはキリスト教禁酒婦人連盟の日本支部として「日本キリスト教婦人矯風会」（矢嶋楫子会長）が結成された。

下町の浅草では飲酒が原因のいさかいや痴話げんかが絶えなかった。親の飲酒のせいで崩壊寸前の家庭の子どもたちも少なからずいた。小学生の飲酒までも問題になっていた。美以美小学校には「浅草少年禁酒軍」が組織され、少年の飲酒を禁じ、大人たちに禁酒を訴える運動を行っていた。鉞子はその運営を一所懸命手伝った。鉞子はこの禁酒運動を通じて「日本キリスト教婦人矯風会」を知り、後年アメリカから帰国したさい働くことになるのである。

明治三十一年春、浅草美以美小学校で「禁酒大演説会」が開かれた。[註8]

三月二十七日午後七時、来たり会する者三百有余名、入るを得ざるもの数十名。以って盛会と為すべきなり。その執行順序左のごとし。

一　賛美歌　　一同
一　聖書朗読　　田島清蔵

一　祈禱　　稲垣いち子
一　開会の趣意　　松井くま
一　演説　国家の勢力　　美山（みやま）貫一君
一　演説　少年禁酒軍に告ぐ　　安藤太郎君
一　賛美歌　　一同

「祈禱　稲垣いち子」とは、稲垣えつ子（鉞子）のことである。

明治三十一年三月といえば、鉞子の五年間の奉仕活動がまさに終了しようとしているときであった。この禁酒大演説会は鉞子の奉仕活動の有終の美を飾るイベントでもあった。

鉞子の先生であり監督者だったマチルダ・スペンサーは、前年の十一月以来、婦人伝道団本部への報告と休暇のためアメリカへ一時帰国中であった。

マチルダ・スペンサーの留守をあずかっていたミス・クラリッサ・スペンサーは、鉞子の退職を惜しんでこう報告している。

「この一年は、浅草の美以美小学校にとって大へん実りある年でした。校長のミスター植松、ミス稲垣、ミス関（長野県士族の娘で青山女学院の卒業生）が学校のために一所懸命働

き、素晴らしい成果をあげてくれました。（中略）東京府の視学官が最近視察にきましたが、学校の様子にたいへん満足して、この学校は地域のなかでも最良のものだと話していました。残念なのは、この春、低学年の有能な先生であるミス稲垣が結婚のためアメリカへ去ったことです。われわれにとって大きな痛手でした。彼女は青山の英和女学校の卒業生で、五年間この小学校で非常に誠実に働き大きな成果をあげました。私はしばらく彼女の代わりをどうすればよいのか、茫然自失しておりました」[註9]

東京府庁に申請された鉞子の「外国旅券下付票」（外交資料館所蔵）によると、「稲垣鉞、族籍・新潟県士族央妹、住所・浅草区新谷町三番地、渡航主意・宗教学研究」とある。「住所」は下宿していた浅草の教員住宅の住所である。渡航目的は「結婚のため」としてもよかったはずであるが、当時写真による移民妻の募集に応じた日本女性の集団渡航や、だまされて渡米して娼婦にさせられる事例が話題になっていたので、鉞子は「結婚のため」という理由を避けたのだろう。そしてミッション・スクールで働いていたことを理由に、渡航目的を「宗教学研究」とした方が当局に説明しやすかったからだと考えられる。

明治三十一年四月下旬、間もなく二十六歳になろうとしていた鉞子は、横浜からアメリカ客船「S．S．ドリック」号で単身アメリカへ向かった。

この五年間の苦労は、杉本鉞子の人生に大きな意味をもった。この五年間の試練と経験で、鉞子は、精神的・人格的に強くなり、自立心の強い女性に成長した。それだけではない。青春の五年間を奉仕活動に捧げたことは、鉞子がこれからめざすアメリカでは、日本では想像できないくらいに高く評価され尊敬されることなのであった。未来の夫杉本松雄も、そのことをよく理解していたが故に辛抱して鉞子を待っていたのである。

［註1］　筆者の知る限り、この貴重な事実をつきとめたのは、長岡の郷土史研究グループ「長岡史楽会」のメンバー（川越泰代、石坂節子、鈴木千枝子、高橋祐子、斉藤孝子、青柳保子）である（『長岡史楽会レポートvol.1』）。

［註2］　青山学院女子部『八十周年記念会報』（青山学院資料センター所蔵）

［註3］　『浅草教会の百二十年』（ＤＶＤ）日本基督教団浅草教会、平成十八年

［註4］　『美以小学校協賛会記録』（青山学院資料センター所蔵）。ミス・マチルダ・スペンサー（一八四八～一九三三）は、ペンシルヴェニア州フィラデルフィアに生まれ、音楽学校卒業後三年間教鞭をとったのち、一八七八年（明治十一年）来日、海岸女学校の教師を務めた。のち東京地区のデー・スクールや婦人伝道の総責任者に就任。教えをうけた生徒たちの多くから尊敬され、引退後も亡くなる直前まで日本に滞在していた。

［註5］『日本におけるメソジスト監督教会婦人伝道会第十一回年会議事録、東京青山、一八九四年七月六日～十三日』（英文）（青山学院資料センター所蔵）

［註6］『日本におけるメソジスト監督教会婦人伝道会第十二回年会議事録、東京青山、一八九五年七月十一日～十七日』（英文）（青山学院資料センター所蔵）

［註7］慶印寺はその後、大正十年ごろ道路拡張にともなって他所に移った。当時広大な境内にあった「慶印寺」と末寺の「寛受院」「寿仙院」のうち、寿仙院だけが今も残っている。頻発した浅草の大火、関東大震災、東京大空襲などを経て、稲垣春泉の墓の行方は不明である。

［註8］『護教』第三百五十号、明治三十一年四月九日（青山学院資料センター所蔵）

［註9］『日本におけるメソジスト監督教会婦人伝道会第十五回年会議事録、横浜、一八九八年七月十一日～十九日』（英文）（青山学院資料センター所蔵）

第五章　アメリカへの旅立ち

オハイオ州シンシナティ

鉞子は、船旅で三週間ほどかけて着いたサンフランシスコで数日間休養したあと、大陸横断鉄道に乗って未来の夫となる人がいるオハイオ州シンシナティへ向かった。およそ一週間の列車の旅である。鉞子は横浜からずっと着物で通した。

オハイオ州は、ヴァージニア州と並んで、最も多くの大統領を輩出してきた州として知られている。初代のワシントン大統領以来、ヴァージニア州からは八人、オハイオ州からは七人の大統領が出ている。南部のヴァージニアが、ワシントン、ジェファソン、マディソンなど「建国の父祖たち」を生んだ農業を基盤とする保守的な州だったとすれば、北部のオハイオは、十九世紀後半アメリカ資本主義を発展させた先進的な州だった。同州出身の大統領には、グラント、タフト、ハーディングらがいる。

十九世紀末、鉞子が渡ったアメリカ社会は大きな変化をとげようとしていた。

内戦（一八六一〜六五年）で、ジョージア州など南部の心臓部は荒廃に帰した。その後、南部の再建や西部の開拓が飛躍的に進むと、大陸横断鉄道の建設、鉄鋼業の興隆、石油の発見と開発、資金調達と投機を扱う金融業の発達など、アメリカ的資本主義が急速に発展

する。鉄道王バンダービルト、鉄鋼王カーネギー、石油王ロックフェラー、金融王モルガンなどの大富豪が登場する一方、都会には貧しい人たちやあらたな移民のふきだまりである貧民窟が拡大し、工場では労働争議が起こる。社会全体で異常な物欲主義や金権政治が横行し、『トム・ソーヤーの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』の作家マーク・トウェインは、この時代を「金メッキ時代（Gilded Age）」と呼んだ。

オハイオ州は、まさにこうした変化しつつあるアメリカの真っ只中にあった。「オハイオ」とは、先住民イロクォイ族の言葉で「美しい川」の意味である。

シンシナティは、オハイオ川の曲がりくねった流れに沿って広がる盆地を七つの丘がとり囲み、街全体が巨大な円形劇場を思わせるような景観をなしていた。西部開拓のルートであるオハイオ川の交易港として栄え、「西部の女王」と呼ばれた。ドイツ系の移民が多いが、彼らは蛇行しながら滔々と流れるオハイオ川に故郷のライン川の面影を見いだして心を慰めたという。街には雑貨店、ホテル、レストラン、酒場が立ち並び、西部へ向かう人たちで賑わった。鉄鋼、食肉、衣料、木材の各産業が栄え、一八八〇年代末には人口三十万、オハイオ州最大の都市となった。ロックウッド陶器やアイヴォリ石鹸などの地場産業でも知られる。アイヴォリ石鹸の広告で有名になったP&G（プロクター&ギャンブル）

社はのちに、洗剤や化粧品などを製造販売する世界最大の家庭消費財メーカーへと発展する。

親日家ウイルソン家の人たち

汽車がシンシナティの薄暗いユニオン駅に着くと、混雑したプラットフォームに、ねずみ色の服に麦藁帽子を被った日本の青年が立っていた。それが杉本松雄だった。

驚いたことに、鉞子が初めて聞いた言葉は「どうして日本の着物を着てきたのですか」だった。すっかりアメリカ生活に慣れた松雄から見ると着物姿の鉞子はよほど奇異に映ったのであろう。鉞子は少し不安になった。

出迎えの黒馬二頭だての馬車は、二人を乗せて、シンシナティの上流階級が住んでいるクリフトンと呼ばれる小高い丘へとのぼっていく。

「馬車は広い芝生にそうて曲り、灰色の大きな建物の広い玄関の前にとまりました。扉を背にして、見るから気高い感じの夫人と、背の高い白髪の紳士が立っておられました。夫人は手をさしのべて、真心こめた出迎えの詞を述べて下さいましたが、余りの有難さに、言葉も出ない私でした。傍の白髪の紳士のやさしいお顔を仰いで、その慈愛に満ち

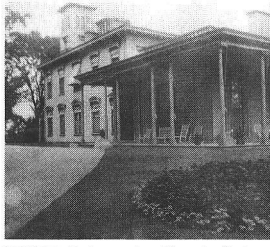
た笑いのかげに、また亡き父を見出して、私の心には平和がしのびよるのでした」（『武士の娘』）

出迎えた老夫婦は、オーベッド・ウイルソン夫妻であった。このときオーベッドは七十二歳、妻のアマンダは六十六歳だった。駅からの馬車は、ウイルソン夫人がさしむけてくれたものだった。

オーベッド・ジュニア・ウイルソンは、教科書出版事業で五十代にして財をなすと、第一線からは身を引き、頻繁に世界旅行に出かけた。体調がすぐれず主治医からのんびりした船旅をすすめられたからである。旅行に出てリラックスするとオーベッドの健康はみち







若き日のオーベッド・ウイルソン、アマンダ夫人肖像画、ウイルソン邸は現存しない（写真は1910年ごろ）

がえるように回復した。一八七七年に出かけたときは、五年間もかけてヨーロッパ、アフリカ、パレスチナ、シリア、トルコなどをまわっている。帰国すると自宅の私設図書館で、訪れた国々の自然や歴史や文化の研究に没頭した。そのかたわら教会や大学などに多額の寄付を行い、慈善活動家として地域の尊敬を集めていた。シンシナティのカレッジ・ヒルには今もウイルソン夫妻を顕彰した高齢者用施設ツインタワーズが建っており、シンシナティ大学にはオーベッド・ウイルソン記念講堂がある。

オーベッドの父は、ニューイングランドのメイン州ビンガムに定住したピューリタン（清教徒）の家系で、メソジスト監督教会の牧師だった。十四人もの子どもに恵まれたが、家は豊かではなく、子どもたちはそれぞれ自力で身を立てた。二男のオリヴァーと弟のジョンはオハイオ州のシンシナティへ仕事を求めて旅立った。

オーベッドは末っ子で、一八四六年二十歳のとき、公立学校の教師として身を立てた兄のオリヴァーを頼ってシンシナティに出てきた。彼も学校の教師となったが、五年後目を患ったために教師をやめ、ウインスロープ・スミス教科書会社の一部門である旅行代理店に雇われた。そこで彼は頭角をあらわし、スミス社長に認められて本業の出版部門の責任者として重用された。スミスが引退すると、オーベッドは会社のパートナーとなり、ウ

イルソン・ヒンケル教科書会社を設立する。その後アメリカン・ブック・カンパニーと合併し、世界最大級の教科書会社に発展した。

オーベッドの妻アマンダ・ランドラムは、ケンタッキー州オーガスタの出身で、父は夫の父と同じくメソジスト監督教会の牧師だった。アマンダは若いころシンシナティで教師となった。シンシナティはオハイオ川をはさんでオーガスタからそれほど遠くない。彼女は教科書の編集にたずさわった際オーベッドと知り合い、一八五三年結婚した。ウイルソン夫妻は共に教育熱心で、敬虔（けいけん）なメソジスト派のキリスト教信者だった。

メソジスト派は、十八世紀のイギリスで、キリスト教信仰覚醒運動から生まれたプロテスタントの一派で、質素で規則正しい生活方法（メソッド）の実践をめざすことで知られている。イングランド国教会から迫害され、新大陸アメリカへ渡り、西部開拓と共に信者をふやした。ミッション・スクールや日曜学校の設立、貧民救済などの社会福祉、禁酒・禁煙運動などに熱心なことでも知られていた。鉞子がかよった海岸女学校もメソジスト監督教会のミッション・スクールだった。武士の娘だった鉞子にとって、アメリカで最初に暮らす場所がピューリタンの流れをくむ規則正しく節度ある生活を重んずる人たちが多く住むところだったことは、幸運だった。ごく自然に土地の人たちと馴染むことができた。

ウイルソン夫妻が初対面の鉞子にことのほか親しみをもって接するのは、明治十九年（一八八六年）秋にオーストラリア、ニュージーランドへ行き、サンドイッチ諸島（今日のハワイ諸島）で冬を過ごしたあと、翌明治二十年春、日本に立ち寄って四、五ヵ月間滞在し、日本の文化や日本人の魅力に目を開かされたからだった。このときは二人の姪が同行していた。

当時船で横浜の港に着いた外国人の賓客（ひんかく）の多くは横浜グランド・ホテルに宿泊した。熱心なキリスト教信者だった夫妻は、明治日本のミッション・スクールをいくつか参観している。ウイルソン夫妻は故郷シンシナティのメソジスト監督教会本部からあらかじめ紹介を受けてきていた。横浜地区の伝道会の責任者は、ミス・メアリー・ホルブルックで、シンシナティから派遣されてきていた宣教師だった。

夫妻が最初に訪れたのは、横浜のバイブル・ウーマン（女性伝道師）養成学校だった。バイブル・ウーマンとは、宣教師に同行して通訳を引き受けさまざまな活動を助ける女性で、宣教師と日本人とのコミュニケーションには欠かせない存在であった。経験をつむと各地の教会や日曜学校に派遣され聖書の講読や奉仕活動に従事した。婦人伝道会が最も力をいれていた学校で、二十五人の生徒が学んでいた。このときのウイルソン夫妻の訪問が

よほど印象に残ったらしく、ミス・ホルブルックは、この年八月に開かれた年会で報告している。

「この四月、私たちはシンシナティのオーベッド・ウイルソンご夫妻訪問の栄に浴しました。ご夫妻は私どもの生徒のひとりに大へん関心を示され、彼女が卒業するまでの全教程をまかなうに足るお金をおいていかれました」[註1]

ここにはその生徒の名前は記されていないが、のちにウイルソン夫妻は鉞子に「山田小梅さんという才智に富んだ女生徒を見出し、日本の若い世代に大きな希望を抱いた」と語っている。[註2] 山田小梅は卒業後、アメリカで教育を受けた三谷牧師と結婚し、札幌の教会でキリスト教伝道につくしている。

ウイルソン夫妻は、バイブル・ウーマン養成学校で「ミセス・イナガキ（稲垣夫人）」という女性にも会っている。彼女は、二十数人にのぼる盲目の女性たちを世話するクラスを開設して話題になっていた。[註3] ただし、名前は同じ「イナガキ」だが、鉞子の稲垣家とは全く無関係である。なお滞日中にウイルソン夫妻が築地の海岸女学校に立ち寄った可能性もあるが、この年の秋に入学した鉞子がウイルソン夫妻に会ったという記録はない。

さて、このときのウイルソン夫妻の旅行につきそっていた二人の姪とは、フローレン



フローレンス・ウイルソン

ス・ウイルソンとコーラ・ストーンである。

フローレンス・ウイルソンは、のちに杉本鉞子の生涯の友になる女性で、オーベッドの兄ジョンの娘である。当時三十一歳。このときの日本滞在の体験はフローレンスの人生に決定的な意味をもった。叔父のオーベッドと共に、日本という国に魅せられたからである。フローレンスは帰国後、日本について学び、ますます興味を抱くようになった。

コーラ・ストーンは、ウイルソン夫人アマンダの妹サリーの娘だった。子どもに恵まれなかったアマンダは、妹の子どもたちを殊のほか可愛がっていた。サリーの夫リチャード・ストーンはヴァージニア出身の弁護士で、ウイルソン夫妻の家の近所に住んでいた。

その後夫妻は海外旅行をひかえ、クリフトンの広壮な邸宅で静かに暮らしていた。鉞子が会ったのはそうした初老のウイルソン夫妻だったのである。鉞子はのちに「ウイルソン夫妻は私にたいし娘のように愛情をこめて接してくれました」と回想している。

フローレンスとの出会い

鉞子の夫となる杉本松雄は、一八九六年（明治二十九年）にサンフランシスコからシンシナティへ移り、街の中心街で日本の工芸品や雑貨を扱う店「ニッポン」を開いていた。当時アメリカでは日本趣味が人気を博しており店はかなり繁盛していた。

一八九八年六月のある日、鉞子と松雄は、ウイルソン夫妻のはからいでウイルソン家の屋敷の広間で結婚式をあげる。

「松雄の傍には親切な会社の同僚の方が立ち、私の傍には後に私の一生を通して恩母となり恩姉となって下さった方が立っていられました」と鉞子は『武士の娘』に書いている。

松雄に付き添った人は、白山谷喜太郎（しらやまだにきたろう）という人物である。地元のロックウッド陶器会社の陶器絵師で、松雄が開店した「ニッポン」の共同経営者になっていた。白山谷は、一八八六年二十一歳のとき、シンシナ



杉本松雄の店「ニッポン」（左端が松雄）

ティ工業博覧会の日本館で陶器絵師として実演した際、富豪でロックウッド陶器会社の創設者であるマリア・ロングワース・ステラー夫人に乞われて、そのまま居残り、数々の優れた作品を制作していた。杉本に地元の有力者で日本びいきのステラー夫人やウイルソン夫妻を紹介してくれたのは、白山谷だった（白山谷は、その後ずっとシンシナティに暮らし、一九四八年に亡くなっている。杉本夫妻にとっては忘れられない恩人であり友人であった。シンシナティ美術館の一室には白山谷が絵師としてかかわった迫力ある陶器の数々が展示されている）。

花嫁の鉞子に付き添った人は、ウイルソン夫妻の姪フローレンスである。気品ある着物姿の鉞子を見てフローレンスは、まさにこの人こそ期待して待っていた日本人だと思った。運命的な二人の出会いである。鉞子二十六歳、フローレンス四十二歳のときである。

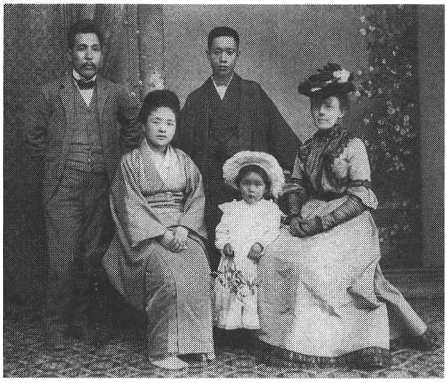
この日の結婚式は、シンシナティでのちのちまで話題になった。

鉞子の友人の一人で、作家であり、『ニューヨーク・タイムズ』紙や『シンシナティ・タイムズ・スター』紙のコラムニストだったイフィジーン・ベットマンが書いている。

「内気だったエツ・イナガキは、一八九八年、勇気をふるって日本から未知の世界へやってきた。シンシナティの五番街とヴァイン街の近くに日本商品の店をもつマツオ・スギモ

トと結婚するためだった。二人は、ラファイエット通りのオーベッド・ジュニア・ウイルソン夫妻の屋敷の大広間で結婚式をあげた。それ以来、杉本鉞子とその家族は、古き佳きシンシナティの人たちにとって伝説となったのである」[註4]

結婚した二人は当初街なかの借家に暮らしていたが、その後、フローレンスと母親のセーラが住むカレッジ・ヒルの屋敷に泊めてもらった際、二人からすすめられて一緒に暮らすことになった。セーラの夫ジョン・ウイルソンは七年前に亡くなっていた。カレッジ・ヒルは、クリフトンから馬車で三十分のところにある丘の上の静かな住宅地である。



結婚3周年と思われる。左から松雄、鉞子、白山谷喜太郎、花野、フローレンス（1901年ごろ）

鉞子は、セーラを「アメリカの母上」(American Mother) と呼んだ。なにも知らないアメリカの暮らしのなかで、故郷の長岡の実母と同じような存在になるからである。「アメリカの母上」と呼ばれる人物は、いつも鉞子の

疑問に答え、生活の手助けをしてくれる。ただ、『武士の娘』のなかでしばしば登場する「アメリカの母上」には、鉞子の生涯の友となり姉となり、時には母のような存在になっていくセーラの娘フローレンスの面影が色濃く投影されている。時にはフローレンスその人ではないかと思われる場合もある。

とまどいと支えと

暖かい季節になると、「アメリカの母上」の屋敷のまわりには、ドイツスズランが一面に咲き、白と紫のライラックの花が色鮮やかに開いた。

アメリカ最初の一年は、ウイルソン家の暖かい庇護のもと、あっという間に過ぎていった。さまざまの習慣の違いにとまどいながら、鉞子は「幸福な一年」だったと言っている。

しかし『武士の娘』には、彼女が体験したカルチャー・ショックの数々が紹介されている。

鉞子は日本で習得してきた花嫁修業の成果を試みようとするが、まごつくことが多かった。夫が商用で毎夜つづけて帰りが遅くなったとき、「日本の母上」の言葉に従ってから

だの具合が悪くても起きて待っていたら、「アメリカの母上」に反対された。鉞子はどちらの母上のいうことをきくべきか思い悩んだ。

女中（家政婦）のクララがさくらんぼのパイをつくってくれたことがあった。アメリカのさくらんぼは香りがよくいかにも美味しそうだった。夫が帰ってきたので出すと、さくらんぼのパイなんかすっぱくて好かないといわれ、夫が食べないものを妻がいただくわけにいかないので、美味しそうなパイを引っこめさせた。クララはびっくりしていた。

クララがいつもよくつくしてくれるので、なにか贈りものをしたいと松雄に相談すると、アメリカではお金が一番よいといわれる。そこで日本でしているように、新しいお札だけを選んで白紙に包み、「御菓子料」と上書きしたところ、それを見た松雄が噴き出した。

「ここじゃ、そんな廻り諄いことをせず、むき出しでお金をやればいいんだよ」

「でも、それでは乞食にやるようになりますもの」

「そんな心配をしなくてもいいよ。アメリカ人は働きの代償としてお金を考えているんだよ。お金に精神的な価値など認めてはいないのだよ」

松雄にこういわれ、鉞子は感謝の示し方が日本とアメリカでこうも違うものかと考えこ

んでしまう（会話は『武士の娘』より引用、以下同）。

カレッジ・ヒルには「進歩クラブ」とよぶ文芸クラブがあり、会員たちは持ち回りで自宅でお茶の会を開く。お茶の会では、アメリカの女性たちは、まるで街なかにでもいるかのように、靴を履いたまま、帽子をかぶり手袋もはずさないで、立ったまま楽しそうに話している。鉞子はまるで萎れた花のようになり、アメリカの母上にたずねられた。

「あまり騒がしく、興奮して、疲れたの？」

このように鉞子は日本との違いにとまどうことが多かったが、いつも蔭から支えてくれる人がいた。フローレンス・ウイルソンである。

不思議なことなのだが、シンシナティの家で毎日のように顔を合わせていたはずのフローレンスそのひとが、『武士の娘』のなかに一向に登場してこないのである。ただそれらしい女性にさりげなくふれているところが二ヵ所だけある。

一ヵ所は、前述したように、結婚式のときに付き添ってくれた人について書いてあるところである。この人は間違いなくフローレンス・ウイルソンである。

もう一ヵ所は、鉞子の最初の娘の名前（花野）をつけるときに、夫の松雄が「日本語に訳すと『花』を意味するアメリカの母上のお名前をいただいたらどうだろう」（筆者訳）

というくだりである。『武士の娘』の訳者大岩美代は、この箇所を日本の読者が理解しやすいように「お母さまのお名フロレンス、即ち咲く花を頂いてはどうだろう」と意訳している。無論、花野の「花」はフローレンスの名前にちなんだことは間違いないのだが、英語の原文には「フローレンス」という名前は出てこない。

鉞子はのちに告白しているように、「フローレンス」の名前を出すことをフローレンスその人から固く禁じられていたのである。

しかしフローレンス・ウイルソンとの出会いほど、杉本鉞子の人生を変える運命的な出会いはなかった。この二人の出会いと友情は、ほとんど奇跡といっていいかもしれない。フローレンスなくして『武士の娘』は書かれなかっただろう。

杉本鉞子をさらに知るためには、鉞子の人生を変えたフローレンス・ウイルソンとは何者だったかを知る必要がある。

［註1］『日本におけるメソジスト監督教会婦人伝道会第四回年会議事録、東京青山、一八八七年八月十日～十七日』（英文）（青山学院資料センター所蔵）

［註2］杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（1）」（『婦人之友』昭和十五年一月号）。鉞

子は、ウイルソン夫妻の日本滞在を「明治二十三、四年（一八九〇、九一年）」と書いているが、記憶違いである。

［註3］　宣教師たちは、貧しい盲目の女性たちをキリスト教信仰に導くミセス・イナガキの努力を高く評価して、ニューヨークの本部に報告している。アメリカの報告書に「ミセス・イナガキ」の記述が多いせいか、「このときにウイルソン夫妻は鍼子の稲垣家の家族と親しくした」と誤解しているアメリカ人が多い。

［註4］　Iphigene Bettman, After 40 Years, Enquirer Contributor, 1962. 9. 23

第六章　フローレンス・ウイルソン

オハイオ川にはぐくまれた町

フローレンス・ウイルソンは、一八五六年四月八日インディアナ州フロイド郡ニューオールバニーに生まれた。鉞子より十六歳年上である。

ニューオールバニーは今日、歴史が止まったような町である。メイン・ストリートには、町の開拓者スクリブナー兄弟の家や町の富豪ワシントン・デポーの冬のマンションなどがたち並んでいる。街なかには町の繁栄をいろどる元オペラ座や古色豊かな教会がある。一八三二年創業の葉巻タバコ店まである。だが、人通りはまばらで、かつてこの町がオハイオ川の発展をになった蒸気船建造の中心地だったという面影はどこにもない。

オハイオ川は、ペンシルヴェニア州ピッツバーグの二つの川の合流点を起点とし、全長千五百七十九キロ、ミシシッピ川に合流する大河で、流域の面積だけで日本の国土の一・三倍もある。オハイオ州シンシナティはちょうどその中間点に位置する。ニューオールバニーは、シンシナティから二百キロ下流にあるオハイオ瀑布（落差八メートル）の下手にあり、そこからオハイオ川を下るとミシシッピ川に出る。ミシシッピ川の上流へ行けば西部開拓の基地セント・ルイス、下流へ行けばニューオーリンズの港に達する。

ニューオールバニーは、十九世紀半ば「黄金の五〇年代」を迎える。当時アメリカは、五大湖、ミシシッピ川、オハイオ川を中心に湖や河川を結ぶ運河が次々に建設され、水運交通の最盛期にあった。蒸気船建造の拠点になったのは、その材料となる木が育つ森林を後背地としていたからだ。各地から優秀な造船技術者が集まり、「エクリプス」「セント・ジェームズ」「ロバート・E・リー」など著名な蒸気船が次々につくられた。一八四〇年から六〇年までの二十年間だけで二百五十隻の蒸気船が建造され、造船の関連産業が発展して栄えた。一八五〇年代、人口は八千人を超え、インディアナ州で人口が最も多い町となった。

フローレンスの父ジョン・ウイルソンがこの町にやってきたのは、そのころのことだった。

メイン州から兄オリヴァーと共にシンシナティにやってきたジョンは、働きながら夜学に通って弁護士の資格をとると、新興の町ニューオールバニーへやって来た。シンシナティからオハイオ川を蒸気船で半日の距離にある。町には弁護士の仕事がいくらでもあった。三十歳のときである。その後ジョンは、南部のヴァージニア州から移住してきた農場主の娘セーラを知り結婚する。一八五四年、長男ハリーが生まれ、一八五六年フローレン

スが生まれた。四人家族である。そのころには街の中心部に自分の法律事務所を開いていた。

ジョンは政治への関心が高く、フローレンスが生まれた年の一八五六年に共和党から連邦下院議員選挙に立候補したが、民主党候補に大差で敗れた。ニューオールバニーは当時南部に基盤がある民主党色の強いところであった。

だが、この平和な町に時代の暗雲が徐々に近づきつつあった。アメリカ史上最大の危機、日本で南北戦争といわれる「内戦」(The Civil War)である。

国を二分した内戦

オハイオ川を境に、北部のインディアナ州は「自由州」、南部のケンタッキー州は「奴隷州」だった。ニューオールバニー対岸のルイヴィルには「奴隷市場」があった。多くの奴隷たちがオハイオ川を渡って逃亡してきた。ニューオールバニーには、奴隷の逃亡を助ける秘密組織(「地下鉄道」と呼ばれた)があった。おもにバプチスト教会の黒人牧師たちが手をかしたが、白人のなかにも協力者がいた。フローレンスの父ジョンもその一人だった。ジョンは子どものときから牧師だった父から「虐げられたる人々を救え」と教えら

れてきた。宗教的信条からも法律家としての正義感からもジョンは奴隷制を認めることはできなかった。だが、「自由州」とはいっても奴隷の逃亡を助けることは違法行為だった（連邦議会で成立した「逃亡奴隷法」は奴隷の逃亡を助けた者に罰金を科した）。

ニューオールバニーの産業は南部に依存していた。インディアナ州には南部から移住してきた農場経営者が多く住んでいて、農産物の大半は南部向けであった。ジョンの妻セーラの両親の家もそうだった。彼らの多くは南部に親戚がいたので表立って奴隷制に反対するわけにはいかなかった。なによりも大きな問題は、ニューオールバニーの産業の要（かなめ）である蒸気船建造の発注主の大半が南部諸州の船会社だったということである。町の産業界としては、南部の顧客を怒らせるわけにはいかなかったのである。

一八六〇年の大統領選挙が近づくと、国論は分裂した。

奴隷制廃止論者が多い共和党は、イリノイ州スプリングフィールドの弁護士エイブラハム・リンカーンを大統領候補に指名した。ジョン・ウイルソンはリンカーンを積極的に支持し、町の共和党選対本部の幹部として活躍した。フローレンスによれば、ジョンは弁舌に優れ、各地で応援演説を行った。リンカーンが選挙運動のためインディアナ州へくると、しばしば同行してリンカーンの選挙演説の下書きを手伝ったという。

だが、地元のニューオールバニーでは、南部に同情的な民主党支持者の方が多かった。地元有力紙『デーリー・レジャー』は民主党支持の論陣をはり、「リンカーンが当選すれば国を分裂させる危険があり、ニューオールバニーの経済は破綻する」と主張した。

一八六〇年秋、リンカーンが大統領に当選したが、ニューオールバニーでは投票総数の三分の二近くが民主党支持だった。町の民意は南部に同情的であった。

弁護士ジョン・ウイルソンは難しい立場にあった。町では少数派だったのである。のちにフローレンスが、銖子が語る日本の内戦（戊辰戦争）での彼女の父の立場を理解できたのは、自分の父の苦しい立場を知っていたからであった。

十一月二十日の夜、フロイド郡の庁舎で市民集会が開かれた。

激論の末、決議案が採択された。「南部の兄弟たちといさかいを起こす理由はなにもない」という原則が確認され、その上で憲法の遵守、「逃亡奴隷法」の廃止、そしてどこからであれ攻撃されたら郷土を守ることが決められた。[註1] だが、一部の市民から出された「南部支持」の決議案は採択されなかった。町は南部のおかげで繁栄してはいるが、市民の大半は奴隷制を嫌悪していた。「南部と争いたくはないが、南部に与するわけではない」という苦肉の選択であった。

リンカーンの大統領当選が決まると、南部の州（State）の「アメリカ合衆国」（United States of America）からの脱退がはじまった。サウスカロライナ、ジョージア、テキサス、ヴァージニアなど十一州が脱退し、「アメリカ連合国」（Confederate States of America）を結成した。「奴隷州」のケンタッキー州とミズーリ州は賛否両論で内紛がはじまった。

一八六一年三月十日（日曜日）早朝、ジョンは、蒸気船でシンシナティまで行き、弟のオーベッドを訪ねた。二人が会うのは久しぶりのことだった。「二人は午前中ずっと話し込んでいた」と、オーベッドの妻アマンダは記している。[註2] 二人はリンカーン支持を確認しあった。

三月二十八日、ジョン・ウイルソンは「ニューオールバニー郵便局長に任ず」とのリンカーン大統領の辞令を受け取った。当時最も重要な通信手段である郵便は連邦政府の管轄下にあり、各地の郵便局長は四年毎に連邦政府から任命された。普通は郵政長官が任命するが、大きな町の郵便局長は大統領が直接任命した。選挙協力への論功行賞でもあった。

四月十二日、サウスカロライナ州チャールストン湾に浮かぶサムター砦（とりで）（合衆国守備隊）にたいする南部連合軍の砲撃から戦争がはじまった。リンカーン大統領は、これを待

っていたかのように、南部連合軍を合衆国への「反乱軍」と呼び、戦いを宣言した。優柔不断だったニューオールバニーからも義勇兵たちが続々と前線へ送られていった。

町には合衆国軍（ユニオン・アーミー　いわゆる北軍）の兵站（へいたん）基地が設けられ、武器や食糧が保管された。戦争が激しさをますと、町に仮設病院が設置され、それでも足りなくなると学校が臨時の病院になった。幼いフローレンスは、休校になった学校へ血だらけの傷病兵たちがオハイオ川を越えて続々と送り込まれてくる恐ろしい光景をよく覚えている。

町に多くのアフリカ系アメリカ人が避難してきた。戦争前、黒人は町の人口の八パーセントを占めていただけだったが、それが倍に増えた。内戦がはじまった翌一八六二年七月二十二日、仕事をめぐる黒人と白人のいさかいから白人が撃たれて死亡し、白人による暴動が起きた。黒人へのリンチが行われ死傷者が出たが、軍隊の介入で翌日事態は収拾に向かった。[註3]

ジョンは、内戦によってむしろ先鋭化する人種間の紛争に大きなショックをうけた。

内戦は四年間にわたって続いた。北軍の戦死者三十六万人、南軍の戦死者二十六万人、合計六十二万人。リンカーンの命令で、ニューオールバニーにも「国立墓地」が設けられ、戦死者たちが葬られた。だが、同じアメリカ人でも南軍の戦死者は国立墓地に葬られ

ることはなかった。いずこも「勝てば官軍」「負ければ賊軍」なのである。

一八六五年四月三日、南部連合国の首都リッチモンド（ヴァージニア州）が陥落し、四月九日、アポマトックスで南部連合軍総司令官ロバート・リー将軍が降伏文書に署名した。四月十四日、戦勝にわくワシントンのフォード劇場で観劇中のリンカーン大統領は、俳優ジョン・ウィルクス・ブースに撃たれ、翌日絶命した。内戦は大統領暗殺という悲劇をもって終結したのである。

デポー女学院と卒業エッセー

リンカーンの棺（ひつぎ）が故郷のイリノイ州スプリングフィールドに戻り、埋葬されたとき、ジョン・ウイルソンは友人のひとりとして棺のそばに寄り添っていた。ジョンは、副大統領から大統領に昇格したアンドリュー・ジョンソンによって郵便局長を再任された。内戦で町の産業は停滞したが、ウイルソン家の生活は安定していたといってよい。そのなかでフローレンスはのびのびと育っていた。

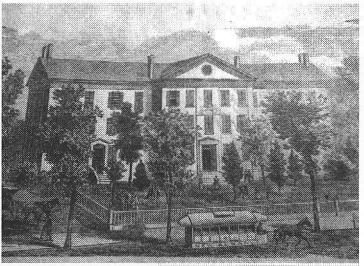
「ミス・ウイルソンは、何一つ不自由なく成長されて、十七歳にしてすでにデポー大学を卒業されたという聡明なお方でした」と鉞子は記している。[註4]

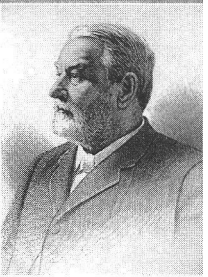
「デポー大学」といえば、普通、インディアナ州の州都インディアナポリスにほど近いグリーンキャッスルにある大学をさす。明治以来外交官の珍田捨巳（ちんだすてみ）など日本からの留学生も多い。ところがデポー大学にはフローレンス・ウイルソンの卒業記録が一向に見つからない。「なぜだろう?」と不思議に思いながらニューオールバニーの町の歴史をたどっていたところ、ニューオールバニーにもう一つの「デポー大学（カレッジ）」があったことを知った。いやもう一つというよりは、「デポー」という名のカレッジが最初に設立されたところはニューオールバニーだったのである。

デポー（De Pauw）とは、ワシントン・デポー（一八二二〜一八八七）という人物の名前からきている。デポー家はフランスの古い貴族だった。アメリカ独立戦争の際、祖父のチャールズは、独立を支持するラファイエット侯爵の義勇軍に参加してアメリカへ渡り、ヴァージニアで結婚してそのままアメリカにとどまった。アメリカ生まれの父ジョンは、インディアナ州ワシントン郡サーレムに移住して土地を購入し、弁護士、判事として身を立てた。一八二二年に生まれたワシントン・デポーは十六歳のときに父を失い財産を引き継いだ。ワシントンは、となりのフロイド郡ニューオールバニーで発展する製材所や製粉所、そして穀物取引に投資して財をなした。デポーは民主党員だったが、内戦がはじまる

と、合衆国軍（北軍）の勝利を確信して政府債に巨額の資金を投資し、莫大な利益を得る。その後厚板ガラス工場など新しい産業の育成にも寄与し、名実ともにニューオールバニーを代表する事業家となった。

財産を築いたデポーは教会と学校に多額の寄付を行った。ニューオールバニーの「デポー女学院」（DePauw College For Young Women）はその一つだったのだ（のちにグリーンキャッスルのインディアナ・アズベリー大学もデポーから巨額の寄付をうけ「デポー大学」と改称する。デポー女学院はその後経営が立ち行かなくなり二十世紀初頭に閉校になる）。





デポー女学院とワシントン・デポー（© New Albany Froyd County Public Library）

一八六九年九月、フローレンスはデポー女学院へ入学した。満十三歳のときである。四年制で寄宿舎生活を義務づけられていた。理事長はワシントン・デポーだが、二十人の理

事のなかにジョン・ウイルソンが法律顧問として名をつらねている。ジョンはこの年四月、グラント大統領政権になって郵便局長の職を解かれ、弁護士業に復帰していた。

「デポー女学院の一番大切な目標は、生徒たちの精神的道徳的な力を育成し、考えて調べる習慣を養うことにある」と学校便覧にうたわれている[註5]。授業は、講読、地理、歴史、哲学、ラテン語、フランス語などの基礎科目から、幾何学、化学、天文学、植物学、論理学、倫理学、英文学、政治経済学など高度なカリキュラムが組まれていた。このほか選択科目として音楽と美術があり、フローレンスは美術を選択した。彼女は特に英文学に関心が高く、シェークスピアを研究している。そのころ町に「シェークスピア・クラブ」が発足していた。

校則はきわめて厳しかった。授業は、午前中は八時半から十二時まで、午後は一時半から四時半まで、夕食のあと寄宿舎での自習が七時から九時までと決められていた。「授業中の私語は一切禁止」「手紙を書くのは金曜日の夕方または土曜日の日中のみ」とか、「寄宿生は先生の同伴がない限り学校の敷地外へ出てはならない」「通俗小説を読むことを禁ず」など厳しい規則を定めていた。理事長のデポーは、フローレンスの父ジョン・ウイルソンと同じく、規則正しい生活方法を重んずるメソジスト派の敬虔なキリスト教徒であっ

た。鉞子がうけた「武士の教育」にどこか通じるものがあり、フローレンスがのちに「武士の娘」鉞子にことのほか親近感を抱いたこともうなずけるのである。

一八七二年六月十三日夕、デポー女学院の卒業式が町のオペラ・ハウスで行われた。そのなかにフローレンスもいた。彼女は所謂（いわゆる）「飛び級」をして三年間で卒業したことになる。満十六歳（数え年十七歳）であった。

卒業式が行われたオペラ・ハウスは一八六六年に建てられたもので、二千五百席あり、当時インディアナ州随一のものであった。町の人口は一万五千人を超え、交響楽団も結成されていた。アメリカのカレッジの卒業式では、選ばれた卒業生が自分で書いたエッセーを朗読するのが慣わしであった。この日の卒業式では八名が選ばれたが、フローレンスもその一人だった。地元紙『デーリー・レジャー』はこう報じている。

「昨夜、オペラ・ハウスでデポー女学院の卒業式が行われた。開校以来最も輝かしく成功した卒業式だったというのが全列席者の評価である。（中略）

エッセーを朗読した二人目はフローレンス・ウイルソン嬢で、タイトルは『女性の王国』だった。このエッセーはウイルソン嬢の知性と心情を吐露したもので、彼女がいかに非凡な才能をもつ女性であるかを示している。女性の本望を崇高な視点から語っていた。

女性の本望は、政治の世界や討論会の闘士になることではなく、愛すべき甘美で純粋な『家庭の王国』の戦士になることにある、家庭にこそ女性の気品が輝くのであり、女性の影響力が力をもつのである、とウイルソン嬢は結んだ。彼女のエッセーは、会場の知性ある聴衆から高く賞賛された[註6]」

当時アメリカでは、女性のあいだから禁酒運動や婦人参政権運動が高まり、女性の社会進出が大きな話題になっていた。そうした時代的な変化のなか、あえて「家庭の大切さ」をフローレンスは強調していたのである。

青春のフローレンスにも忘れられない男性がいた。結婚の約束もしていたといわれる。しかし彼は飲酒癖が直らず、信仰篤いフローレンスと結局そりが合わなかった。

父ジョンは、リンカーン暗殺以来、政治の世界に嫌気がさし失意のなかにあった。内戦終結後、人々の多くはお金もうけに狂奔し、政治の世界では汚職と賄賂が横行していた。ジョンはそうした世の中についていけなかった。フローレンスは、時代の波に乗れない父の苦衷が痛いほどよくわかった。鉞子の父への思いと通じるものがあった。

一八八一年夏、家族はオハイオ州シンシナティへ引っ越し、カレッジ・ヒルのオーベッドの夏の別荘を借りて住んだ。ここで親子三人の静かな生活がはじまった（フローレンス

の兄ハリーは結婚して他所に住み、子ども二人に恵まれた）。だが、父のジョンには最早かつての覇気はなくなっていた。その後病に倒れ、一八九一年七十二歳で亡くなった。

一八九八年（明治三十一年）六月、シンシナティでフローレンスと鉞子が初めて出会ったとき、二人には、相通じる人生経験や社会的関心があったことがよくわかる。

二人はまるで会うべくして会ったかのようだった。

フローレンスの日本滞在

明治三十五年（一九〇二年）春、フローレンスは、鉞子の母金から日本へ招待された。一度日本に住んでみたい、とフローレンスが強く希望していたらしい。鉞子がその意をくんで、郷里の母へ頼んだのかもしれない。

このとき、フローレンスに同行して、鉞子は三歳になる長女花野を連れて越後長岡へ里帰りすることになった。毎年春、夫の松雄は店の品物の買い入れのため日本へ帰国する。この年はそれに合わせて、妻と娘の里帰りを実現させたのである。松雄は商用をすますとすぐにアメリカへ戻ったが、鉞子はフローレンスを案内して、長岡へ向かった。

すでに上野から直江津まで信越線が開通し、直江津から長岡までは民間の北越鉄道が開

通していた。だが、このときは稲垣家の召し使いが鉞子たちを直江津駅に迎えに来ていて、長岡までおよそ七十キロの道のりは人力車を使った。沿道の山あいにはまだ桜の花が咲いていて、鉞子はフローレンスにそれを是非見せたかったのである。

鉞子は、フローレンスと一緒に一年間近く長岡に滞在した。二人の友情はますます深まった。鉞子とフローレンスが滞在したのは、星忠吾・建夫妻が経営する「稲荷屋」である。[註7] そこに鉞子の母金も住んでいた。

鉞子は、翌明治三十六年五月、迎えに来た松雄と共にアメリカへ戻るが、フローレンスはそのまま残り、もう一冬を過ごす。こうしてフローレンスは、鉞子の故郷長岡で二冬二年間を暮らすことになるのである。今でいうホームステイである。

フローレンスは、初めて長岡へ行ったとき四十六歳。青色の眼、褐色の髪、背の高さは五フィート五インチ（約百六十五センチ）あり、若いときダンスを習ったというだけあって、すらりとした美しい婦人だった。慎ましい性格だが、接する人にはいつも明るく親しみやすかった。

長岡でフローレンスは、まさに伝統的な日本の田舎の文化になじんだ。彼女は稲垣家が用意した西洋式の椅子に座るのを拒み、畳の上に何時間でも静かに座っていた。食事もす

べて日本のものを食べた。「わたくしは日本人と同じように感じ、同じように考えていたいのです」と話していたという。

「田舎の結婚式に呼ばれますと、フローレンスは、何時間も続くお祝い事にそれこそ土地の人たちと同じように参列していました。そればかりか、どんな小さな田舎の催しやお祭りにも参加していました。彼女は傍観者や見物人としてではなく、土地の人間の一人になりきっていたのです。彼女に接した人たちは皆、彼女の心の広さを教えられました。『わたくしはアメリカ生まれですが、世界市民の一人でもあるのです』と彼女はよく話しておられました」と、鉞子は回想している。[証8]



長岡滞在中、地元の小林写真館で撮影したフローレンスの肖像（長岡史楽会所蔵）

フローレンスは、頼まれて長岡中学（現長岡高校）で英語を教えた。長岡中学の機関誌『和同会雑誌』（明治三十六年七月）

に「ウイルソン嬢を迎ふ」の記事が載っている。

「我中学校は、昨秋偶然外国教師を雇うことを得たり、米国人ウイルソン嬢即ち是なり。嬢は米国シンシナチ市の名媛、我が国風視察として久しく当地に住せらる。之れ本校に学ぶものの幸福というべし、好機逸すべからず諸子奮発勉励せよ」

フローレンスは、「和同会」の新年会で、当時アメリカの大学生の間ではやっていた韻文を嘹喨と吟じ、参会者たちに大きな感銘を与えた。韻文の朗詠は、シェークスピア劇に通じていたフローレンスが得意とするものだった。

卒業式で来賓として祝辞を乞われると、フローレンスは黒紋付きでしずしずと講壇にすすみ、おもむろに「長岡中学、誠に大変、結構、中学校」と意外にも日本語で言い、静かに礼をして歩を返した。この片言の日本語はしばらくのあいだ長岡の流行語になったという。

フローレンスは二冬長岡に滞在した。この体験が、のちに鉞子が『武士の娘』を執筆するときに、フローレンスが貴重な助言を与えることを可能にしたのである。なによりも鉞子が日本独特の伝統文化を英語で表現するときに、フローレンスの助けがなかったら、欧米人が理解し感動するような英文にはならなかったのではないかと考えられる。フローレンスの死後、鉞子自身がその裏話を語ることになる。

文筆にかける信頼関係

このとき鉞子は、フローレンスに同行して久しぶりに帰った故郷について小文を書き、長岡からアメリカの新聞に投稿している。ニューヨークの『ブルックリン・デーリー・イーグル』紙[註9]（一九〇二年七月六日付）に載った「桜の花咲く季節、日本の休日」というエッセーである。

鉞子が少女時代を過ごした懐かしい故郷の自然や父母や召し使いたちの思い出、そして人力車で直江津から長岡へ行く道中のエピソードをつづったものである。

人力車で長岡に近づいたところ、スタンダード石油会社の油井（ゆせい）のやぐらが目立ち、風景がすっかり変わってしまったと嘆いているが、春を迎えて満開の桜の花で彩られる故郷の美しい自然は変わっていなかった。

「欧米の方々がバラの花に心をよせるように、日本の人々は桜に心を惹（ひ）かれます。いつの時代からでしょうか、桜は大和魂のシンボルになりました。散っても花の美しさや香ばしさを失わない桜は、名誉のために死を恐れない武士の心に通じるといわれます」

そして「アメリカから来たお客様」がなにを見て驚き、なにに興味をもったかをユーモ

アをまじえて書いている。アメリカのお客様とは、もちろんフローレンス・ウイルソンのことである。

鉞子とフローレンスが人力車に乗っていくと、花見から帰ってくる老若男女のグループとすれちがう。彼らはご機嫌で、あたりかまわず子どものようにはしゃいでいた。

「わたしたちの人力車が猛スピードで走っていくと、彼らはてんでバラバラに狭い道の端に立ちつくしていました。今になっても思い出し笑いをしてしまうのですが、このときの外国のお客様の驚いた顔付きったらありませんでした。（中略）

急な坂道になったので、わたしたちは人力車から降りて、山際（やまぎわ）の狭い道を登って行きました。すると突然、人の声が真上の方から聞こえてきました。見上げると、谷間を見おろす岩の上に二人の男がのんびり坐っておりました。二人は、遠く雪をいただいた山の稜線と、そのなだらかな山すそに黒々とひろがる松林や竹林の眺めを鋭い目で食い入るように見つめているようでした。わたしの友だちはびっくりした声でたずねました。『あの方たちはいったい誰なの？』わたしはただ『庭師よ』と答えました。わたしの答えで彼女はますます驚いた様子でしたので、説明いたしました。日本では庭をつくることは芸術であり、庭師は芸術家なのです、と。彼らは自然から学び、家の狭いお庭に自然の小さな景観

を再現するのです。日本の大抵の家には、山や谷や橋や川や滝など、それぞれ独自の景観をそなえたお庭があります。夏の夕方になると、家族全員が縁側に坐って、その景色を見て楽しむのです。ちょうどお金持ちが秘蔵の絵画を壁にかけて楽しむのと同じことなのです」（筆者訳）

日本の自然の美しさや伝統の素晴らしさを伝えようとする鉞子の気持ちが伝わってくる。「時代のお蔭であったのでしょう、私のエッセーが意外に珍しがられて、なかには小学校の教科書にそのまま載せられるというような例も幾つかありました」と鉞子はのちに語っている。

このエッセーでは、「人力車」が一つのキー・ワードになっている。フローレンスは、日本に関する本をほとんど残らず読んでいたので、エリザ・シドモアの『JINRIKISHA DAYS IN JAPAN』（New York & London 初版一八九一年、邦題『シドモア日本紀行　明治の人力車ツアー』外崎克久訳、講談社学術文庫）も読んでいたにちがいない。人力車で日本を旅することは、フローレンスの夢でもあった。シドモアは、フローレンスと同年輩で、日本の文化に魅せられ、その世界的価値を高く評価したジャーナリストであり紀行作家である。二十数年後に出版される杉本鉞子の『武士の娘』は、後述するようにシドモアが期

待した現実の生きた日本人像を描くことになるのである。

このとき銭子は、フローレンスにエッセーの英語の添削をしてもらっている。文筆にかける銭子とフローレンスの信頼関係は、実にこのときにはじまったのである。

もともと作家志望だったフローレンス・ウイルソンは、「シンシナティ婦人出版クラブ」に所属し、エッセーや詩を書いていた。当時の会員紹介記事がある。

「ミス・ウイルソンはいま日本にいるが、日本人や日本の慣習に関する物語を書いている杉本夫人に協力して、アメリカのシンジケート（記事の配給会社）に日本の記事を書いている。彼女は日本でアメリカについて講義し、詩も書いている」[註10]

そのころ書いたと思われるフローレンスの詩が一つだけ見つかった[註11]。

「ファースト・ローズ」（最初のバラ）という題名である。

放浪する旅人のように
あの人が西からやってきた
黄昏（たそがれ）のあかりをたよりに
から松をはらいのけながら深い森をぬけて

ひとり身のさびしさをささやいていた

あの人は横笛を唇にあて
古い詩の一節をやさしく低音で吹きはじめた
南の方から
やわらかく銀色に輝きながら
雨が降り出すまで吹いていた

イグサの岸辺に囲まれた灰色の湖のほとりで
あの人が奏でるロンドから
妖精のような韻の音が
ためいきのように聞こえてきた
あの人のはるか昔の笛の楽譜から
「六月の悲歌」が生まれたのだ

わたくしはきのう朝、
たしかにあのひとの足音を聞いた
「なんと喜ばしいことか！
六月がやってきたではないか
見たまえ！　その最初の贈りものを！
この赤ワイン色のバラを！」
こう詠ってあのひとは
渡り鳥のように飛び去った

この詩には、古いゲーリック語（アイルランドやスコットランド方言のもととなったケルト語に属す古代アイルランドの言語）が使われ、英語の韻をふくんでいる。フローレンスの教養の深さをうかがわせるものである。そしてこの詩から、「あの人」と結ばれなかった人生への哀愁とフローレンスの新たなる決意が伝わってくるような気がする。六月の贈りもの「最初のバラ」とは、鉞子との出会いをさしているのではないだろうか。

フローレンスは、若いときから「女性の王国は家庭にある」と考えてきた。日本に二年

間滞在してみると、日本には伝統にはぐくまれた「家庭」があり、そこに女性の生き方がたしかに根付いていた。それが現実に一人一人の女性にとって幸せなのかどうかは断言できないにしても、考えてみるヒントがたくさんあった。日本の家庭と女性というものを、アメリカの家庭と女性と比較しながら、描けないだろうか。そこには家庭の大切さについて示唆するものがたくさんあるはずだ。それも文才のある鉞子に書いてもらうのだ。そのためにはどんな協力もおしまない。心のなかでフローレンスはそう決意したのである。フローレンスのこの決意があればこそ、のちに鉞子は努力を重ね、『武士の娘』を書くに至るのである。

明治三十七年（一九〇四年）の年が明けると、朝鮮半島と満州（現中国東北部）をめぐって日本とロシアとのあいだで緊張が高まった。今にも戦争が勃発しそうだとの観測は、アメリカの新聞でも大々的にとりあげられた。シンシナティの親族や友人たちから、フローレンスにすぐに帰国するようにとの手紙が送られて来ていた。日露間で戦争がはじまれば、強大なロシア帝国海軍がすぐにでもフローレンスが滞在する日本海側に攻めてくると考えられていたのである。二月八日、日露戦争がはじまった。フローレンスは急きょ横浜から船に乗って帰国した。

冷静な目からの日米文化比較

長岡の里帰りから戻り、鉞子は夫と娘と幸せな生活を送っていた。明治三十七年（一九〇四年）五月、二女の千代野が生まれた。

鉞子は、アメリカの生活になじむにしたがって、日本の文化と比較しながらさまざまな疑問を感じるようになっていた。鉞子はそれをいちいちフローレンスに問いかけた。そのなかから独特な「日米文化比較」が、『武士の娘』のなかで書かれることになるのである。

朝食後、夫の松雄が仕事に出かけると、「アメリカの母上」は縫い物や編み物をかかえ、鉞子は英語の勉強のために新聞を手に、ベランダの安楽椅子に座って過ごすのが日課となった。鉞子が新聞で第一に目に留まる記事は離婚の裁判欄だった。それも離婚を望む数が男より女のほうが多いのを見て驚いた。当時、大抵の日本人はアメリカでは女性が男性よりも優位な地位にあり、男性は女性に柔順な国だと思っていた。ところが必ずしもそうではないらしい。むしろアメリカ女性は意外に弱い立場にあることに鉞子は気づくのである。

「アメリカへ来て、どうしても馴染めないものの一つは、婦人と金銭に対する不真面目な

態度でありました」（『武士の娘』「十八．風習のちがい」）

　鉞子は婦人だけの集まりで、アメリカの妻たちは買い物でも寄付するお金でも、いちいち夫の同意をえなければ自由に使うことができず、夫に買ってもらった帽子を売って五ドル安いものに買い替えたとか、アルバイトをして小遣いをかせいだとか、夫が寝ている間にポケットから無断でお金をぬきとってきたとか、そのような話を冗談まじりに聞かされる。鉞子は、女性が自由で優勢なはずのアメリカで、威厳も教養もあり、一家の主婦であり、母である婦人たちが、夫に金銭をねだったり、恥ずかしい立場にま





母と娘。左は花野（5歳）と、右は千代野（0歳）。シンシナティのカレッジ・ヒルにて（1904年）

で身を置くということは、とても信じられなかった。時が経つにつれて、この冗談のなかに、きびしい事実が根底に横たわっているのではないかと思うようになる。

鉞子は、時代におくれているといわれる日本の家庭の主婦の立場を思いおこした。

「私がこちらへ参ります頃は、日本はまだ大方、古い習慣に従って、女は一度嫁しますと、夫にはもちろん、家族全体の幸福に責任を持つように教育されておりました。夫は家族の頭であり、妻は家の主婦として、自ら判断して一家の支出を司っていました。家の諸がかりや、食物、子供の衣服、教育費を賄い、又、社交や、慈善事業のための支出を受持ち、自分の衣類は、夫の地位に適わせるよう心がけておりました」（同前）

鉞子は、女性の地位はアメリカが進んでいて日本はおくれている、というような先入観にとらわれることなく、社会の慣習や価値観のちがいという視点からアメリカと日本を冷静に比較しているのである。それはフローレンスにも共通する認識であった。

好奇心旺盛なアメリカの女性たちは、こうした鉞子の説明にますます興味をもち、質問を浴びせるのだった。鉞子は、東京のミッション・スクールで、長岡の少女時代に身につけた堅苦しいしつけや習慣とは異なった自由な開放感というものを知った。そして自由と平等の本場とされるアメリカの人たちの日常生活の実際の姿を毎日のように見ながら、あ

らためて日本とはなんなのかを考えずにはいられなくなった。

ある日、街の夫の店へ行ったとき、日本人が見たらまがいものだとわかるような日本の商品が並んでいた。みな「メイド・イン・ジャパン」のしるしが入っている。松雄が言うには、これは、アメリカ人が自国向きに考案して、日本の工場に注文し、輸入したものだという。「アメリカ人が欲しがるものをつくらないと売れないのだよ」と夫が言った。その晩、鉞子は眠れなかった。「もし日本が、その芸術的な標準を下げてしまったら、日本は世界に向かって、何を求めたらよいのだろうか？」鉞子は思い悩んだ。そしてこう書いている。

「私の知っている庭職人に、時間払いでなく、一仕事ごとに賃銀を貰う人がありました。この人が半日がかりでした仕事を、それも庭石をほんの二三寸動かすだけのことでまたやり直しをいたしました。でも、気に入ったところへ石を据えると、汗をふきふき、その傍に腰を下し、お金にもならない時間を空費することなど、気にもとめず、庭石を眺めながら、煙草をふかしているのですが、その顔には、喜びと満足の色があふれているのでした。

この年老いた職人のことを思い出しますと、自分の芸術を誇り得る喜びを捨てて、何の価値があろうかと思ったことでありました。私は庭師から職人、教師、政治家のことへと

思い及びました。それは皆同じことなのです。誇りをきずつけるということ、努力の結果として到達し得た最高、最善なるものをも支え得なくなるということは、個人にとっても国家にとっても、その精神の発達を死に導くものでございます」（『武士の娘』「十九．思うこと」）

［註1］ Betty Lou Amster, New Albany on the Ohio, Historical Reviw 1813–1963, 1963

［註2］ William Thomas Venner, Queen City Lady : The 1861 Journal of Amanda Wilson, 1996

［註3］ Pamela R. Peters, *The Underground Railroad in Floyd County*, McFarland & Company, 2001

［註4］ 杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（2）」（『婦人之友』昭和十五年二月号）

［註5］ CATALOGUE of The Trustee, Faculty, and Pupils of DePAUW COLLEGE FOR YOUNG LADIES, New Albany, Indiana, for The Collegiate Year 1869–1870（デポー大学図書館所蔵）

［註6］ New Albany Daily Ledger, Friday, June 14, 1872（ニューオールバニー公共図書館所蔵）

［註7］ 明治三十六年元旦の長岡経済会『共同年賀状』に「稲荷屋方、ミス・ウイルソン、

杉本エツ、星忠吾」の名前が載っている（『長岡市史　通史編（下巻）』、青柳保子「誌禄と杉本鉞子」『長岡郷土史』）。

［註8］故フローレンス・ウイルソン一周忌にあたり鉞子が友人たちに送った小冊子（英文）（昭和八年十月）

［註9］Cherry Blossom Season : A Holiday Time in Japan. THE BROOKLYN DAILY EAGLE. New York. Sunday. July 6,1902. 同紙は当時米国で最も読まれていた新聞のひとつ。一八四一年創刊、一八四六年から二年間若きホイットマンが編集長をつとめていたことでも知られている。

［註10］Cincinnati-The Queen City 1788-1912 by Rev. Charles Frederic Goss. 1912（シンシナティ公共図書館所蔵）

［註11］Electic Magazine, Sep. 1906（ニューヨーク公共図書館所蔵）

THE FIRST ROSE

He came a-wandering from the West,
　By twilight ways, through the leafly woods.
Where larches swept against his breast
　And whispered of green solitudes.

He put his feadan to his mouth
And played, low-sweet, an olden rann,
Till at his calling, from the South,
The rain fell, soft and silver-wan,

By one gray lough with rushy rim,
Whose sagans sigh a fairy rune,
The far-off piping notes of him
Made Sorrow-music for the June.

I heard his steps pass Yester-morn
Fleet as a bird that comes and goes;
"O Joy!" he sang, "for June is born,
Lo! Her first gift! this wine-red Rose."

第七章　帰国

兄と妹

ここで少しわき道にそれる。鉞子の生涯にいろいろな意味で大きな影を落としている兄央（旧名平十郎）のその後のことである。『武士の娘』のなかではふれられていないが、鉞子が暮らしたシンシナティにも、兄の影が見え隠れするのである。

鉞子は、幕末維新の父と兄の足跡をたどり、わずか十歳足らずの兄央が生死をさまよい、「切腹」を迫られる体験をしたことを知った。明治になって、時代にどうしても対応できないでいる兄の姿を、時には厳しい批判の目でみることもあったが、同時に深い愛情の念をもって見つめ、兄が稲垣家の家長であることを片時も忘れることはなかった。

鉞子がアメリカの生活を語っている数章のなかで、ただひとこと、兄にふれているところがある。「十六．渡米」の最後のセンテンスである。

「（シンシナティでの）心地よい住み家で得られた愛情と心遣いと知恵のお蔭で、私は最も良きアメリカを見わたす機会に恵まれました。そして良きアメリカを理解し、その良いところを多く学ぶことができたのです。それは、この同じアメリカをごく狭い範囲でしか見なかった私の兄の体験とは、実に対照的だったと思います」（筆者訳）

央は若いときに家出して、アメリカへ渡り妹の未来の夫となる杉本松雄に出会った。そもそも松雄と鉞子の結婚を決めた張本人である。しかし考えてみれば、この兄がいなかったら鉞子はアメリカへ行くことはなかったろうし、ましてや『武士の娘』を書くこともなかったであろう。姉たちと同じように、親に言われるまま故郷長岡で平凡な結婚をして子どもを産んで、一生を終えただけだったかもしれない。運命とは不思議なものである。

だが、一年足らずの渡米で、兄の人生観は変わった。長岡の生活になじめず、定職につくでもなく、結局親の財産を食いつぶすだけだった。『武士の娘』のなかで、鉞子は次のような兄が語った言葉を書きとめている。

「（筆者註＝家の土蔵に保存されている）宝ものなど、苦労の種になるばかりだよ。こんなに貧乏しながら、むかしの足軽や仲間共の用いた道具を幾箱も持っていたって仕方がないからね。昔は役に立ったかも知れないけれどこれからは、家の子孫も実業（原文ではcommerce）の戦場で戦うんだから、こんなものは無用だよ。当世では一にも黄金（原文では〝wealth〟「黄金」と訳されているが、「お金」と訳したほうがわかりやすい）二にも黄金、黄金をうるには実業（原文ではbusiness）よりほかにはないのだ」

鉞子は、兄がアメリカへ行って付き合ったのはほとんど「商売人たち」ばかりだった、

と言っている。そして「お金がすべてだ」といったような金儲け主義に染まって帰ってきたのである。数年後、央はもう一度一旗あげようとしてアメリカへ渡った。

央が稲垣本家（旧鳥羽藩主）稲垣長敬の息子（養子）長昌宛に出した手紙がある。

そのなかで央は、「明治二十二年九月八日渡米」し、その際長敬に「越後長岡稲垣家の宝物なる系図と外四品の保管をお願いした」ことを記している。この手紙は、その保管してもらっていたものをひきとるために、長敬の跡継ぎである長昌に（長敬はすでに亡くなっていた）長年の好意を謝したものである。[註1]

「明治二十二年九月」といえば、鉞子が築地の海岸女学校全科を修了し、青山の東京英和女学校普通本科へ進んだころのことである。央の息子重政によれば、央はそれから十年間ほどアメリカにいたという。確かに鉞子をミッション・スクールに入学させたあとの五年間、そして鉞子が卒業して浅草で小学校の先生をしていた五年間、合わせておよそ十年のあいだ、鉞子の周辺には兄の存在が全く感じられないのである。

明治二十二年（一八八九年）から十年といえば、明治三十二年になる。その前年に鉞子は渡米するので、「兄が見送ってくれた」という鉞子の記述（『武士の娘』「十六．渡米」）は事実と違うことになる。央が昭和十四年（一九三九年）八十一歳で亡くなったとき、お通

夜の席で銭子は甥にあたる央の息子重政に話している。[註2]

「今日は本当のことを話してあげましょう。あなたのお父さんは、あなたよりも美男子でした。いつも胸にバラの花をさしていました。ある日多くのアメリカ人を向こうにまわして喧嘩をし、ふくろだたきにあって気絶して、わたしたちの店に運び込まれました」

「わたしたちの店」とは、シンシナティの中心街にあった松雄が経営する店しかない。そこにかつぎこまれたということは、このとき央は銭子夫妻が住んでいるシンシナティにいたことになる。重政の回想によれば、アメリカでの央の体験は波乱万丈だったようだ。

「あるときカーボーイの群れに入り彼らとレースをしたことがあった（この牧場には風月堂の主人がいたが彼はお金を持っていてこの牧場の客人であったが、父は一介の労働者であった）。カーボーイとのレースは平地では負けなかったが、丘を走る場合は彼らにかなわなかった。カーボーイの一人が何かの理由で欠員ができ、『おまえ、やって見るか』と言われ、馬はもともと教導団じこみの腕前であったので彼らの仲間に加えてくれ正式に勤務することになった。一日の労働賃金は七弗（ドル）五〇仙（セント）であったとのこと」

央は家出したあと、陸軍教導団（陸軍下士官の養成機関）へ入団し、東京鎮台の山砲隊で軍務についていたことは前述した。彼は馬術に優れ、明治天皇が臨席する場でその技を

見せたこともあったという。当時アメリカ各地には広大な牧場があったので、央がカーボーイの仕事にありついたことは十分あり得た話である。重政の回想は続く。

「南ア戦争に際して、アメリカ海軍は、領事館保護のために出動することになり軍艦を港に待機させ、水兵を半舷上陸させたところ、水兵が帰ってこなくなり急遽『世界に漫遊したい者はアメリカ軍艦に乗れ』と言う広告を出したので、それに応じて艦に乗った。中国人とかメキシコ人とか他国人が多く応募し、甲板に整列したところ、外に日本人が交っていた。彼も軍人だったので、上手に並びすぐに目についたがお互いに軍人であることを隠す約束をしたと嘘のような話を聞いている」

南ア戦争は一八九九年から三年間、南アフリカの植民国家をめぐってオランダ系移民のボーア人とイギリス人が争った戦争であるが、アメリカは自国民保護のため軍艦を派遣した。「水兵」は海軍に属す兵員なので、下船したまま帰ってこないとなると逃亡罪になり軍規で厳重に罰せられる。従って央がいう「下船して帰ってこなかった水兵」とは、恐らく軍艦の「下働き」の人たちのことであろう。当時かなりの数の中国人や日本人やメキシコ人などが、軍艦のさまざまな仕事の「下働き」として雇われていた。コックやボーイや食器洗いなどはまだましなほうだったが、燃料の石炭を蒸気機関の罐（かま）にくべる下働きとな

ると煤塵や高熱にさらされるので相当な重労働だった。彼らも「シーマン（Seaman＝水兵、船員）」の名目で募集されたのかもしれない。

前例がある。南ア戦争がはじまる前の年、一八九八年二月十五日の夜、スペイン領キューバのハバナ港で米戦艦メイン号が突然爆発し沈没する事件が起きた。スペイン側の機雷による陰謀だとして、当時のアメリカの新聞が「メインを忘れるな！」と書きたててアメリカ国民の戦意を煽りたて、米西戦争勃発のきっかけになった事件である。実際には石炭の自然発火だったとみられているが、この爆沈で二百六十六名の乗員が死亡した。そのなかにコックやボーイとして雇われていた日本人六名が含まれていたのである。メイン号犠牲者の記念碑がワシントンのアーリントン墓地にあるが、二百六十六名の犠牲者の名前のなかに「オトジロウ・イシダ」以下六名の日本人の名前も刻まれている。メイン号には八名の日本人が乗艦していた。

従って央が何らかの下働きの要員として南アフリカ行きの軍艦に雇われたことは十分ありうる話である。ただ央は、「下働き」というのでは格好がつかないので、「水兵」と言ったまでなのだろう。鉞子の兄央の二度目の渡米も、結局「下働き」で終わったのである。

央は帰国したあと、明治三十七年（一九〇四年）に始まった日露戦争への出征を希望し

たそうであるが、それは実現しなかった。央はその前後、脇屋登志（わきやとし）という女性と結婚して（央はすでに四十五、六歳なので相当な晩婚である）長男重政をもうけるが、息子五歳のときに妻が病気で亡くなった。登志は能や琴をたしなむ優雅な女性で、このころの央は生涯で最も幸せな時期だったという。だが妻に死別してから酒におぼれ働く気力も失った。そして親子二人の暮らしは落ちるところまで落ちた。神戸で父と子ふたりの生活だったが、山本有三の小説にあるような「長屋住まいの水場一つ、一穴（便所一つ）の生活だった」と重政は回想している。

重政は、大正七年（一九一八年）十四歳のとき、叔父・叔母を頼って長岡へ行き、星忠吾・建夫妻の世話になって、長岡工業高校を卒業したことは前述した。大正十二年十九歳のとき技術者として岐阜県大垣の工場に就職し、父央と再び一緒に暮らした。その後重政は大日本紡績（日紡）に就職し、大阪や明石など関西で暮らした。二十七歳のときに結婚し、妻静子との間に六人の子どもをもうけている。

稲垣重政は、祖父と父についてこう書きのこしている。

「祖父平助は信念をもって自らの道を選んだのであるが、藩政から除外されてしまった。

（中略）


稲垣央と重政・静子夫妻（長岡史楽会所蔵）

平助は平民となって宿屋稼業を始めたが見事失敗、平十郎（央）はアメリカくんだりまでいってこれも失敗。平助、平十郎はこの時代の波に乗れなかった。乗れないというより落伍者だったが、わたしは好きである。まことに『さむらい』がしみついていた」

重政の思いは、叔母の鉞子に通じるものであった。「武士の娘」鉞子が生涯を通して身のまわりでしばしば目にしたことは、賊軍となった元武士たちの悲惨な姿だった。しかし鉞子は愚痴と思われるようなことは一切書いていないし語ってもいない。愛する兄ではあったが、彼女は兄のような道は歩まなかった。時代は激変したが、人間として失ってはならないものは何なのか、考え続けていたのである。

アメリカ世論の変化

鉞子が渡米した当時、アメリカでは日本への関心が高まっていた。日清戦争で「眠れるアジアの獅子」と呼ばれていた清国を破って以来、日本は「日出づる国」として注目されるようになった。一九〇二年（明治三十五年）

に日英同盟が締結されると、日本の国際的な地位が高まった。一九〇四年、日露戦争がはじまり大帝国ロシアを相手に旅順攻略、奉天会戦、日本海海戦と次々に日本軍の勝利が伝えられると、日本人の強さはどこから来るのかに関心が集まった。そして日本が、「交戦国は捕虜を人道的に取り扱わねばならない」と規定した「ハーグ陸戦条約」（一八九九年）を遵守し、ロシア兵捕虜を丁重に待遇している事実が国際的に報道されると、日本への評価は賞賛に変わった。

当時、アメリカで出版された新渡戸稲造の『武士道、日本の魂』が、日本人のモラルの高さを説明する書としてベストセラーになったのは、そうした時代的背景があった。『武士道』を読んだセオドア・ローズヴェルト大統領は、息子や友人たちにこの本を読むようしきりにすすめた。ローズヴェルト大統領は、日露戦争では終始日本を支持し、戦力・戦費ともに限界に達していた日本からの要請をうけて、ロシアとの講和に尽力した。その背景に、大統領の世界戦略への並々ならぬ遠謀深慮があったことも忘れるわけにはいかない。

一九〇四年二月八日、日本がロシアに宣戦布告したとき、ローズヴェルト大統領は息子に宛てた手紙（一九〇四年二月十日付）のなかで、「わたしは日本に勝って欲しいと心から

願っている。なぜならば日本はアメリカに代わってロシアと戦っているからだ」と書いている[註3]。これは、アジア進出をはかる大国ロシアを阻止する日本の戦略的役割を評価した言葉であった。ローズヴェルトには「極東の勢力均衡（バランス・オブ・パワー）」が頭にあったのである。東アジアで、ロシアも日本も、どちらかが一方的に強すぎても弱すぎても困る。均衡がとれていることが一番望ましいのである。南ア戦争の対応などで手一杯で、アジアに戦力をさく余裕がなかった日本の同盟国イギリスも、同じ立場だった。

従って、日露戦争が終結した後、日本が、アメリカの「領土保全」「門戸開放」政策を無視して、朝鮮半島から満州へと軍事力を増強し、一方的独占的に権益を拡大していくと、米英の対日政策は徐々に変わっていった。アメリカ人の親日感情は冷え込み、アメリカ西海岸では、公立学校からの日本人学童隔離が実施され、日本人移民排斥（はいせき）の動きが表面化していく。

破産、そして夫の急死

シンシナティに住む銈子には、まだそうした世論の変化は感じられなかったが、夫の商売に思わしくない変化が生じつつあった。それまでは商売は順調で、オハイオ州デートン

とイリノイ州シカゴに支店を開くまでになった。だがその拡大路線はうまくいかなかった。日本ブームが次第にしぼみ、松雄の店で扱う日本製品の売れ行きが急速に落ちたからである。日本に発注した商品の支払いができなくなり、松雄の店は破産する。

一九〇八年（明治四十一年）春、鉞子が「母上」と呼び、娘たちが「おばあちゃま」と呼んでなついていたフローレンスの母セーラが亡くなった。その年の初夏、鉞子は娘二人を連れて日本へ帰国した。破産した松雄は、店の立て直しに専念するために、とりあえず家族を日本へ帰したのである。

その二年後の明治四十三年夏、フローレンスからの電報で、鉞子は、夫がシカゴの病院で七月二十六日に急死したことを知らされる。急性盲腸炎だったという。杉本松雄は、シカゴの支店を整理するために滞在していたのである。四十八歳だった。

夫の死に目にもあえず、鉞子は途方にくれた。アメリカでの生活の目途が立たなくなったため、そのまま日本に留まるしかなかった。松雄の葬儀は亡くなった一ヵ月後東京で行われた。シンシナティの生活は十年間であっけなく幕を閉じたのである。

鉞子と娘二人の暮らしを心配して、郷里長岡の母金がやって来て、一緒に住むことになった。その後、母の体調があまり良くないというので、一番上の姉泰にも来てもらった。

金と泰は年齢が十五歳しか離れておらず、母と娘というよりは姉妹のようであった。鉞子にとっては、母と姉から稲垣家に代々伝わってきた昔話や戊辰戦争当時の悲劇をあらためて聞く機会にもなった。

帰国した鉞子の大きな悩みは、子どもたちの教育であった。二人の娘は日本語を話せなかった。今日でいう帰国子女である。千代野は、近所で自宅を開放して幼稚園を経営していた外国人夫婦の世話になったが、花野を受け入れてくれる小学校が見つからなかった。おがみたおしてやっと青山小学校の三学年に編入させてもらうと、鉞子は毎日教室の最後列の席に坐ってノートをとり、帰宅後花野に日本語を英語に直して教えた。花野は算数と体育だけは得意だったが、次第に日本語を覚え他の教科も理解できるようになった。

生活の方も楽ではなかった。鉞子は渡米前の浅草時代に知った日本キリスト教婦人矯風会で、英語の仕事を手伝った。明治十九年に結成された矯風会は日本最初の婦人団体といわれる。アメリカのキリスト教婦人禁酒連盟の日本支部であった。鉞子が関わった仕事は、おもに矯風会の機関紙『婦人新報』の英文欄（WOMAN'S HERALD）の編集やアメリカ本部から派遣されてきた婦人宣教師たちの通訳であった。仕事熱心だった鉞子は、のちに矯風会の青年部長に選ばれている。収入を得るために鉞子は、クエーカーのミッショ

ン・スクールである普連土女学校（現普連土学園）で英語を教えることもあった。

再び日本へやってきたフローレンス

鉞子の夫松雄が亡くなって一年ばかり経ったころ、シンシナティからフローレンスが日本へやってきた。フローレンスは、「懐かしいあなた達がどう暮らしているのか、どうしても心配でならないから」といい、シンシナティの家を引き払って越してきたのだという。フローレンスはすでに五十五歳になっていた。

フローレンスによれば、松雄の臨終に立ち会ったときに「家族をよろしくお願いします」といわれ、「はい、お引き受けします」と約束したのだという。のちにある人からその徳を称えられると、フローレンスは「東洋には『一諾を重んず』という言葉があると聞いています。アメリカにもその心はありますよ」と微笑んでいたという[註4]。

娘たちは、シンシナティで一緒に暮らしていたフローレンスが大好きで、「アンテ」（おばちゃま）と呼んでなついていた。鉞子の母金とは長岡でのホームステイ以来の旧知の仲である。金は英語を一言も話さなかったが、フローレンスとは意思が通じ合った。フローレンスは、すぐに日本のしきたりや生活になじみ家族の一員となった。まさに「影の形に

添う如く」（鉞子の言葉）フローレンスは鉞子とその家族とともに半生を過ごすことになる。

　このころ鉞子たちは赤坂区青山に家を借りて住んでいた。フローレンスは教えることが好きで、住んでいる家から近かった青山学院の学生たちに英会話を教えていた。時には木挽町（現銀座）の凮月堂に学生たちを連れて行って、食事やお茶を楽しみながら西洋料理の食べ方や作法を教えていたという。

　早稲田大学英語会がシェークスピアの芝居を原語で演じることになったとき、フローレンスがシェークスピアの研究者であることを知った大学当局はフローレンスを招き、指導にあたってもらった。早稲田大学にはシェークスピア全集の翻訳で著名な坪内逍遥教授がおり、シェークスピアの演劇がしきりに演じられていた。フローレンスは、セリフの読み方などを指導する一方、自分で持っていた衣装や道具を提供した。当時の総長大隈重信はその好意を大い



再来日したフローレンスが、東京の鉞子の家でくつろぐ

に徳として、のちに鉞子たちが再びアメリカへ行くことになったとき、フローレンスのために送別の会を催した。鉞子も招かれたが、寒い冬のことで、大隈侯は庭内の温室に咲き誇っていた一輪の蘭の花を自ら手折ってフローレンスに贈った。

一九一四年（大正三年）八月末、フローレンスの叔父オーベッド・ウイルソンが亡くなった。八十八歳だった。電報で知ったフローレンスは未亡人になった叔母のアマンダへお悔やみの手紙を送り、鉞子のことを語っている。

「敬愛するアマンダ叔母さまへ……

ご存じのように、イナガキさまは叔母様とオーベッド叔父様のことを心から敬ってこられました。叔母様の最愛のひとが亡くなったとの一報が届いたとき、鉞子様は、まず叔母様のご様子をお気遣いになって尋ねたのでした。そしてすぐに鉞子様は家の仏壇のところへ行かれ、旅人に未知の行く先を照らす小さなお灯明をあげられました。一時間ほどして居間に入ってみますと、鉞子様は額縁を白い布で柔らかく囲った叔父様のご写真を床の間に飾っておられました。その下には白菊を活けた白い花瓶が置かれ、小さな青銅の器には香木がたかれておりました。鉞子様は（クリスチャンでしたので）娘の花野さんにこうしていいかどうか尋ねられ、ウイルソンさんはどんな宗教のどんな慣習であれ敬意をうけ

るに値するご立派な方だったのですと話されました。そして叔父様の写真の前にひざまずかれ、柔らかく手を打って、神々に叔母様が生きておられる限りいつも叔父様がおそばにおられるよう祈っておられました。（中略）一九一四年十月九日、東京、日本」[註5]（筆者訳）

フローレンスはこの手紙のなかで鉞子のことを「イナガキさま」と旧姓で書いている。この呼び方には鉞子への尊敬の念がこもっている。二人の関係は尊敬し尊敬される間柄であった。そしてこの手紙からもわかるように、アマンダも亡くなったオーベッドも、そしてフローレンスも鉞子も、敬虔（けいけん）なキリスト教徒であったが、仏教にたいしても、恐らくどんな宗教にたいしても、深い敬意をあらわす寛大な心をもっている人たちだった。

鉞子がお灯明をあげた仏壇は同居する母金が毎朝毎夕お参りしている仏壇だった。

娘の教育と夫の実家に悩む鉞子

大正四年（一九一五年）一月、母の金が亡くなった。七十二歳だった。

そのころ鉞子はふたりの娘のことで悩んでいた。たしかに娘たちは上手に日本語を話し、物言いも静かになりしとやかになった。しかし内心鉞子は、娘たちにとって本当にそれで幸せなのだろうかと自問していた。特に上の娘の花野のことが心配だった。

「これが上品な、しとやかなというものでございましょうか？　左様に違いありません。けれども、私の一声に答えて、飛上ってくるすばやさはどこへ行ったのでございましょう？　見たい、聞きたい、したいのあの愉快さ、熱心さはどこへ行ったのでございましょう？」（『武士の娘』）

母の死後、鉞子は娘をつれてもう一度アメリカへ行くことを考えるようになった。フローレンスも賛成してくれた。

しかし鉞子にはぬきさしならぬ難題があった。亡き夫の実家との関係である。

この問題は、鉞子が娘ふたりと日本へ帰国し、夫の松雄が急死したときからはじまった。京都の杉本家のしきたりとして、杉本家の家長は長女の花野に引き継がれ、妻鉞子の側には資産がないので夫側の親戚が養女として引きとるというのである。未亡人になった鉞子も同居はできるが、娘の養育に関してはなんの権利もなくなるという。この経緯は、原文の「二十四．再び日本へ」（In Japan Again）では書かれているのだが、日本語訳の際にはこの章は割愛されている。鉞子が、まだ生存していた杉本家の親戚のプライバシーに配慮したからではないかと考えられる。この章によれば、京都の親族会議で、鉞子は幼い娘を代弁するかたちでやっと発言が認められ、日本のしきたりや日本語のわからない娘

を事情に通じていない親戚の人が育てるのは難しいことなどを訴えて、やっと鉞子のもとで娘たちを養育する了解を得たことになっている。

だが、花野が日本語を覚え十五歳になると、再び養女問題がもちあがった。そこで鉞子は、アメリカの真心をこめて受け入れる人（恐らくフローレンスの叔母アマンダ）の手紙をもって親族会議に列なり、アメリカに永住するつもりだった夫の松雄が「娘たちに高等教育を受けさせたい」と願望していたことを強調して、もう二、三年アメリカへ行かせてほしいと懇願した。松雄の親族側にも、賛同する人がいて、鉞子の希望はやっと認められたという。

アメリカへ旅立つまえ鉞子は長岡を訪れた。そして故郷の変貌ぶりに鉞子はいたく失望した。古き佳き長岡の原風景がなくなろうとしていたからである。かつて住んでいた屋敷は跡形もなくなり、見栄えもしない洋風の女学校（のちの長岡女子師範学校）が建っていた。袴をつけた女生徒が三々五々と行き交うのを見ながら、鉞子は「心の奥底に疼くような痛み」を感じていた。

『武士の娘』は、再びアメリカへ出かける準備のところで終わっている。鉞子は、祖母が語った「黒船」の話を思い出しながら、日本とアメリカの未来に思いをはせるのである。

だが最終章について語る前に、再びアメリカへ渡った鉞子のその後の生活と『武士の娘』執筆にいたる経緯をさぐってゆく。

［註1］　昭和四年七月付（牧浦浩子氏所蔵）。稲垣長昌は明治八年生まれ、伯父にあたる旧鳥羽藩主稲垣長敬の養子になり跡を継いだ。慶応義塾卒業、従三位、子爵（『大衆人事録』東京篇、帝国秘密探偵社、大正十四年）。

［註2］　稲垣重政「回想の長岡―随想断片」（『長岡郷土史』）

［註3］　*The Letters of Theodore Roosevelt*, Harvard University Press, 1951-54

［註4］　杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（2）」（『婦人之友』昭和十五年二月号）

［註5］　In Memoriam: Obed J. Wilson（1826-1914）（シンシナティ大学図書館所蔵）

第八章　賞賛された「不屈の精神」

シンシナティへ再び

大正五年（一九一六年）三月半ば、七年半過ごした東京をあとに鉞子の家族は再びアメリカへ旅立ち、五月初めシンシナティへ着いた。十八年前鉞子が結婚式をあげたクリフトンの大きな屋敷には、八十歳を超えたアマンダ・ウイルソンが召し使いと共に住んでいた。夫人はこころよく鉞子たちを迎え入れてくれた。収入のあてもない鉞子やフローレンスにとって、アマンダの助けがなければ暮らしてゆけなかったであろう。

長女の花野は全寮制の私立の女子高校ミス・ケンドリックス・スクールに入学した。シンシナティでは上流階級のお嬢さんのためのエリート校として知られていた。二女の千代野は、鉞子たちが以前に住んでいたカレッジ・ヒルの小学校に通うことになった。

鉞子はアメリカへ出発する前に日本矯風会から頼まれていたことがあった。キリスト教禁酒婦人連盟のアメリカ全国大会へ日本代表として出席することである。

大会は、一九一六年十一月インディアナ州の州都インディアナポリスで開催された。鉞子はシンシナティから最速の特急列車に乗り、三時間半をかけてインディアナポリスに着いた。一八七四年、オハイオ州でキリスト教禁酒婦人連盟が結成されて以来、会員は年々

ふえ、この年には二十五万人を超えて政治勢力としても無視できない存在になっていた。理想主義者として知られる民主党のウイルソン大統領も支持を表明していた。

禁酒運動が高まった背景にはアメリカの宗教事情があった。よく言われるように、アメリカ人の七五～八〇パーセントはキリスト教徒で、その六〇パーセントはプロテスタントである。プロテスタントには福音派と呼ばれる聖書の教えを忠実に守ることを訴える人たちが多くいた。鉞子の周辺のメソジスト派の信者たちの多くもそうだった。酒は人間を堕落させ神の教えに反するもの、となれば法的に禁止すべきだと考える人たちは結束する。「禁酒法」はピューリタンの流れから生まれたアメリカ的理想主義の実験ともいえよう。

翌一九一七年四月、アメリカは第一次世界大戦に参戦するが、政府は国民に徹底した節約を呼びかけた。戦時下の節約ムードのなかで、「禁酒法」推進にはずみがついた。この年「憲法修正第十八条（禁酒法）」は、上院でわずか十三時間の審議で満場一致で承認され、下院でも一日の審議で圧倒的多数で通過、そして五十州の四分の三以上の州の賛成を経て、一九二〇年一月に成立・施行されるのである。鉞子はアメリカで起こっていた時代の変化の渦に直接ふれていたのである。

二度目のシンシナティ滞在で鉞子は、以前付き合っていた人たちとも旧交をあたため

た。

花野の高校卒業が近づいたころ、鉞子は娘の教育のためにニューヨークへ行くことを決意する。フローレンスも賛同した。それは花野がニューヨークのバーナード・カレッジに進学することを決めたことが最大の理由だった。バーナード・カレッジは、一八八九年に創立された女子大学である。コロンビア大学の併設校であった。当時アメリカ東部には、「七姉妹」（セヴン・シスターズ）と呼ばれる七つの名門女子大学があった。バーナード・カレッジもそのひとつであった。

ニューヨークの生活

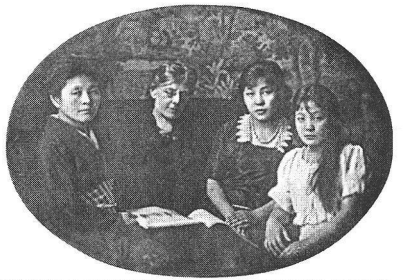
一九一八年（大正七年）初夏、ニューヨークへ移った鉞子は、コロンビア大学があるモーニングサイド・ハイツのアパートに居を定めた。花野が通うバーナード・カレッジはコロンビア大学正門の真ん前にある。二女の千代野はコロンビア大学教育学部付属のホレスマン校女子部へ通うことになった。

モーニングサイド・ハイツは、マンハッタン島北部の小高い丘にある。大学関係者たちが多く住む静かな住宅街である。東側のかなり急坂の丘の下に細長いモーニングサイド公

園がある。公園から道路ひとつを隔てて、その先は「ハーレム」と呼ばれる黒人が多く住む地域が広がる。

花野は、ジャーナリズム学科を専攻した。新聞王ジョーゼフ・ピューリッツァーの寄付金でコロンビア大学にジャーナリズム・スクールが開設されたのは一九一二年のことだったが、バーナード・カレッジにもジャーナリズム学科が設けられたのである。学生はコロンビア大学の授業も受けることができたので、花野は専門科目をジャーナリズム・スクールで学んだ。[註1]

鉞子やフローレンスがどう助言したのかわからないが、花野が新しい時代に挑戦しようとしていたことは確かである。ジ





ニューヨークのアパートにて。左から鉞子、フローレンス、花野、千代野（1920年ごろ）。アパートは現存する

ャーナリズム学科は、新聞・雑誌の記者やライターや編集者をめざす学生たちが対象であった。アメリカでは建国以来、ジャーナリズム（新聞）は、政府（権力）を国民の立場から監視する重要な民主主義の担い手と位置づけられてきた。

在学中に書いた花野のエッセーがニューヨークの著名な月刊文芸誌『ブックマン』（一九二〇年五月号）に載っている。「現代日本の一少女の読書遍歴」と題されている。江戸から明治へ、日本の外向きの様相はすべて西洋風に変わったが、変わらないことが一つある。それは女性にたいする社会のしきたりだ。花野は自分の読書遍歴を通してこのテーマを論じているのである。

日本の児童が読まされる本はまず「桃太郎」や「舌切り雀」などの童話である。アメリカの子どもが「シンデレラ」や「赤ずきん」を読むのと同じようなものだ。そのうち学校で倫理の授業があり、天皇と親への忠誠をたたき込まれる。ある年齢に達すると、古典文学である清少納言『枕草子』や紫式部『源氏物語』を講読し、日本のしきたりは伝統に基づいていることが強調される。日本では、若い女性が新旧の違いを言おうものなら徹底的に否定される。「新しい女」と呼ばれる進歩的な運動（明治から大正にかけて平塚らいてうを中心に雑誌『青鞜』に拠って主張された女性解放思想運動）が起きたが、現実の社会で「新

しい女」として生きることははなはだ難しい。私の古風な祖母はいう、「自己否定と自己犠牲こそ女の道です。雪のなかに咲く梅のごとく、苦難のなかにあってこそ女は美しくなければなりません」と。しかし、「読書をすることによって、静かな日本の少女は思考し、計をめぐらし、新しい社会の条件に適応しようとするでしょう」と花野はこの小文を結んでいる。

花野は当時二十歳。日本の若い女性がおかれている社会環境の厳しさを指摘したのである。その着想や論理の展開の仕方は、バーナード・カレッジでジャーナリズムを学んだ成果かもしれない。鉞子は自己主張する進歩的な娘を誇りに思った。

シンシナティに比べニューヨークは物価が高く、鉞子たちの生活は決して楽ではなかった。鉞子の回想によれば、シンシナティでの女中の給料は週四、五ドルだったが、ニューヨークでは洗濯婦を頼むだけで一日四ドルもしたので、とても女中を置くなど思いもよらなかった。そうこうしているうちに、手薄な貯えは次第に心細くなってきた。フローレンスもなにがしかの遺産の貯えがあっただろうが、日本の生活で相当な出費をしており、もはや余裕のある身分ではなかった。このころ、シンシナティの老ウイルソン夫人から毎月百五十ドルの仕送りがあったという。当時のお金としてはかなりの額である。恐らくその

あてがなかったら鉞子たちはニューヨークの生活はできなかったであろう。

鉞子は少しでも収入を得るために、シンシナティに住んでいたときから執筆をはじめ、新聞や雑誌に投稿した。日本の風習や昔話などのエッセーである。それはまさにフローレンスが十年前に構想し決意していたことであった。「今こそそのときが来た！」とフローレンスは決意をあらたにする。そして鉞子を全面的に支援し、勇気づけるのであった。

だが、いくら投稿しても採用されず、原稿はそのまま返送されてきた。

「毎朝エレヴェーター・ボーイの運んでくれます郵便物に大型の封筒を見るたびに、また返されてきたなと思い、子どもたちの目にふれぬよう手早く始末することさえ、習慣となるくらいでございました。幾度か、もう書くことはやめようと筆をなげうちかけたのでありましたけれども、そうと察せられるとミス・ウイルソンは、相も変わらず朗らかに笑いながら、『日本には、石の上にも三年、という言葉があると話してくれたのは誰ですか、あなたは駄目ね。ニューヨークには筆で生活しようという、しかも完全な英語を書く人が何千人いると思いますか。そういう中に名のり出ようというのだから、千の原稿を送ったうち、一度でも採ってもらったら大変な幸運と思わなくては』と力づけて下さいました」[註2]

運は偶然開けてきた。

クリストファー・モーレー

鉞子がペンシルヴェニア州フィラデルフィアの『イブニング・パブリック・レジャー』紙に投稿したものが、一九一八年五月から八月にかけて七回にわたって掲載されたのである。テーマは「洋装か着物か」「二つ足の民?」「ちぢれ髪」「接吻(せっぷん)」「牛肉」「犬」「チューインガム」、のちに『武士の娘』に取りいれられるエピソードである。このとき同紙のコラム・エッセー欄の編集長をしていたのが、「序章」でも述べた作家のクリストファー・モーレーだった。彼が、鉞子が投稿した一連の小文に心を動かされ、掲載したのである。

鉞子のエッセーにたいして、読者からは「日本の文化がよく理解できた」という投書が寄せられたが、一方では「日本人が文化的に洗練されているというのは間違いだ、日本人ほど残酷な国民はいない」という抗議の投書もあった。それは韓国系アメリカ人からの投書であった。一九一〇年(明治四十三年)日本は「韓国併合」を行い、朝鮮半島を支配下に置いた。それは朝鮮の人たちの激しい反発をひき起こした。本国では厳しい弾圧を受けたので、朝鮮の活動家たちはアメリカで反日運動を展開し、アメリカ世論の喚起をうながしていた。モーレーは、鉞子の立場を弁護している。

「最近、日本のことをこころよく思っていない人たちが、このフィラデルフィアで街頭デモを行った。日韓問題については、私には語る資格がない。世界は不正義と誤解に満ちあふれている。そのいくつかは年月をかけて解決されていくものだと、私は信じたい。（中略）朝鮮の人たちは、日本人は残酷な国民だと言っている。そうかも知れないが、この際、日本の童話やスギモト夫人が再三語る古風な愛すべき物語を是非思い出してほしい。一国の心や魂というものは、その政府の行為よりも、その国の童話のなかにこそ宿っているものなのである」（『イブニング・パブリック・レジャー』紙、一九一九年四月二十四日付）

モーレーはのちに、「ランチのための三時間クラブ」を組織するなど、人々の交流の場をつくることに熱心な人物としても知られるようになるが、そのころは、コラム欄の題名をとって「電気椅子（いす）クラブ」なるものをつくっていた。鉞子は、モーレーがニューヨークの自宅に訪ね来て以来、会員になり親交を深めていた。

「電気椅子クラブの公式会員のなかで、エツ・イナガキ・スギモト夫人ほどわれわれを楽しませてくれる会員はいない。スギモト夫人の最新の手紙を一部紹介したい――」（同前）

以下は、引用されている鉞子の手紙の一節である。

「世界の友好、とくに米日友好のために貢献することは、わたくしの趣味のようなもの



クリストファー・モーレー（1921年）
©Haverford College Library Special Manuscripts Collection, Morley family papers., coll. no. 807, box9

で、微力ながら最善をつくしたいと思っています。このたび十日間ほどデラウェア州を旅してきました。古き佳き伝統がのこる田舎の人たちとの出会いは、とても楽しいものでした。わたくしが小さな教会で話をいたしますと、ひとりの粗野な顔をした農夫（こんな表現をお許し下さい）が立ち上がって、わたくしに言いました。『エツさん、あなたのお国ではキスをする習慣がないそうですが、まことにお気の毒です』。わたくしはどこの国でもそれぞれ異なった表現方法があります、と言ったつもりなのですが、ちょっとまどってしまいました。農夫はさらにこう申しました。『エツさん、あなたは牛乳がお好きですか?』。わたくしはすぐに『勿論です!』とお答えしました（筆者註＝鉞子は日本人は明治になって初めて牛肉や牛乳を味わうようになったという話をした）。そうしますと彼は『朝とれたての最良の牛乳をお届けしましょう』と言いました。彼が言ったことは本当で、翌朝早く（ホテルの）わたくしの元へ新鮮な牛乳を届けてくれました。こうした出来事は、わたくしに言い

知れない喜びを与えてくれるのです」

この手紙を紹介したあと、モーレーは書いている――

「スギモト夫人の手紙は、われわれにも言い知れぬ喜びを与えてくれる」

その後、モーレーは、『ニューヨーク・イブニング・ポスト』紙のコラム責任者になり、フィラデルフィアからニューヨークへ引っ越してきた。

二人はますます親しくなり、鉞子はロングアイランドのナッソー郡ロズリンに家をかまえたモーレーのパーティーにしばしば招待されるようになった。広々した緑のなかに田舎風の屋敷があり、「緑庵（りょくあん）」と呼ばれていた。そこで鉞子は当時アメリカ有数の作家、詩人、芸術家、ジャーナリスト、弁護士、資産家たちと知り合うという幸運に恵まれた。

モーレーは鉞子に、日本とアメリカという異質の文化と歴史をもつ二つの国に暮らした半生記を書くよう、しきりにすすめた。

コロンビア大学非常勤講師

鉞子は、新聞ばかりでなく、月刊文芸誌『ブックマン』やメソジスト監督教会伝道会の機関誌『ワールド・アウトルック』などにも、数々のエッセーを寄稿している。当時の新

聞や雑誌に掲載された鉞子のエッセーを読むと、鉞子が少しずつ『武士の娘』の素材を集めて準備していたことをうかがい知ることができる。そして次第に在留邦人のあいだで、鉞子は文筆家として知られるようになっていた。

ニューヨークの邦字新聞『紐育新報』の創刊十周年記念号に鉞子の小文（日本語）が載っている。テーマは「十年前と今の米国について」というものであった。

「私の米国感想を一口に申さば、丁度永年交際を続けておる友に対する感情に似ております。私の最初の印象は無暗にありがたく、米国の何物も何事も結構見事と感じました。かかる楽しき最初の印象は再度私が米国居住を致しました折に淡く砕けました。櫻花の如くに艶々と元気で羨ましく思われた米国婦人に梅の花のゆかしさがないと不満も出ました。（中略）こうして自然この国の弱点や暗黒面も知るようになりましたが、さて人情は不思議なもので友に短所があればとて愛想をつかすということになりません。私の米国気質に対しての感想は、第一期の米国崇拝でもなく第二期の片意地な米国嫌悪でもありません。（中略）米国人でも日本人でも人情に変わりはなく、ただ皮想が異なっておるばかりで、紳士はどこでも紳士、淑女はどこでも淑女、であるということに帰着いたしました」[註3]

鉞子がすでに日米比較論のエッセンスを語っていることに気づく。

一九二〇年（大正九年）は、鉞子にとって大きな転機だった。鉞子は四十八歳になっていた。

ひとつには、長女花野の結婚である。花野は、インディアナ大学を卒業しコロンビア大学で政治経済学を専攻していた小寺敬一（こでらたかかず）と知り合い、敬一が帰国する際に結婚を申し込まれた。敬一は神戸の資産家の長男であった。花野は結婚のため大学を中退し、この年の十二月、結婚式に参列する母鉞子と共に帰国した。

アメリカ育ちの嫁に懸念をもらす小寺家の姑に、鉞子は「目に見える財産はなにもありませんが、日本人として恥ずかしくないよう花野の体のなかに、すべて入っておりますのでご心配なく」と言ったという。鉞子は二度目の渡米のときに、花野と千代野のために二面の琴をもって行った。千代野はなじめなかったが、花野は琴が大好きで家元の免許を取得した。

敬一の母は鼓（つづみ）と謡（うたい）の名手だったが、花野の琴の腕をためすために一緒に演奏した。最初はやさしい曲で、次に最も難しい曲を選んだ。花野はどちらもうまく共演した。花野は茶道や活け花にも通じていた。鉞子は結婚式に参列したあと、一ヵ月ほどでアメリカへ戻った。

鉞子の転機となったもうひとつは、コロンビア大学から講師の声がかかったことだった。大学の公開講座（Extension Teaching）で日本語と日本史の講座担当のオファーがあった。日本人の女性講師は初めてのことであった。

「コロンビア大学講座年報」によると、鉞子の講義は、一九二〇〜二一年度の前期（十〜一月）及び後期（二〜六月）の毎週火曜・金曜の午後八〜九時の「日本語初級、文法、読み、書き、そして会話」から始まった。公開講座なので社会人の受講時間を考えて夜間の講義となった。

後期では、「日本の歴史と文化」の講義もはじまっている。鉞子が書いた講義概要によれば、「神話の時代から現代まで、二千五百年にわたる日本の歴史、宗教、風習の概説。日本人の起源をめぐる諸説。古代祭礼者の役割及び統一国家への道のり。仏教伝来と国民思想への影響。封建制度の興隆。二元政治（皇室と幕府）。長い鎖国と突然の開国。そして失敗の連続から今日の諸問題に至る日本の急激な近代化。上記の講義は、西洋と東洋の間の相互理解の促進に関心のある人たちのために設計されている。（中略）日本では、日常の慣習が、伝統や理想とする考え方と極めて独特なかたちで見事に織りまざっているので、外国人はその理解なくしては日本人の本当の心を見抜くことはできない。その日の講

義の終わりには、質問の時間を設ける[註4]」とある。

鉞子の講義は評判がよく、毎週二回「日本の生活と習慣」という講座も加わり、「日本の農村と都会の生活、日本文化、芸術、教育の今昔」などを講義している。

いつの間にか杉本鉞子の講座は、週に三講座、授業数が六回に増え、かなり忙しくなった。鉞子の授業に出てきた受講生たちの多くはビジネスマンや教師たちで、たいてい六、七人から二十人くらいの少人数だった。鉞子はいつも着物姿で登壇し、日本の文化の講義では日本の美術品や扇子や風呂敷などを持ち込んで、具体的な説明を行った。質問が多いと、授業のあと受講生たちを自分のアパートに招き、フローレンスも加わって、夜遅くまで話し合いを続けた。先生と生徒の関係というより、友だち同士の付き合いのようであった[註5]。



コロンビア大学を訪れた日本の使節団。２列目中央に鉞子がいる（1925年ごろ）

こうして鉞子の講義は、『武士の娘』執筆・出版をはさんで、一九二〇年秋から二七年春までの八年間続くのである。

鉞子の講義がはじまった翌一九二一年、ルース・ベネディクトという女性がコロンビア大学大学院の文化人類学教室に入学してきた。ベネディクトはのちに著名な日本文化論『菊と刀』を著し、日本でも広く知られるようになる文化人類学者である。ニューヨークに生まれ、当時三十三歳。名門女子大学ヴァッサー・カレッジを首席で卒業し、教職につき結婚するが、家庭生活にあきたらず文化人類学者のフランツ・ボアズ教授のもとへやってきたのであった。教授の研究室や教室は、ジャーナリズム・スクールの校舎七階の三部屋を間借りしていた。鉞子の講義はジャーナリズム・スクールの教室もよく使われていたので、ベネディクトは着物姿の鉞子と出会い挨拶をかわした可能性が高い。

『武士の娘』が出版されて評判になるのは四年後のことであるが、文化人類学の道を歩むベネディクトは、杉本鉞子の本を読み、大きな影響を受けることになるのである。

ベストセラーとなった『武士の娘』

コロンビア大学で日本語と日本の歴史を教えながら鉞子は、のちに『武士の娘』の骨格



ニューヨークにて千代野と鉞子

となる長文のエッセーを執筆する。それは月刊誌『アジア』で、一九二三年十二月号から翌一九二四年十二月号まで（二ヵ月の休載をはさんで）十回にわたり連載された。

この連載は、多くの読者に注目され高い評価を受けたが、クリストファー・モーレーの紹介を得て、出版社のダブルディ・ドラン社に出版を打診したとき、そのまま出版というわけにはいかないといわれ、かなりの手直しを要求された。鉞子は、ほぼ十ヵ月をかけて、連載したエッセーの再構成と加筆にとりくんだ。雑誌『アジア』の連載と、出来上がった『武士の娘』を比較すればわかるように、それはかなり困難な作業だった。

ようやく出版のゴーサインが出て、印刷にまわされ、初稿の本が鉞子の元へ届いた。本のおもてのカバーの絵を見た鉞子は言葉を失った。カバーの絵は、武士の心を象徴する桜の木から散った花びらを拾って糸にゆわえている少女（武士の娘）の姿を描いたものであったが、その少女はなんと支那服を着ていたのである。アメリカ有数の出版社といって

も、日本への認識はその程度だったのである。絵心のあった二女千代野が徹夜して、支那服の少女を日本の着物姿の少女に描き直して、出版社へ送り変更を求めた（四ページのカバー写真参照）。

本の内容は、出版社の創業者の息子で編集局長のラッセル・ダブルディが高く評価していた。彼は鉞子の言うことならなんでも聞いた。鉞子が稲垣家の家紋を本の表紙の一角にデザインとして浮き彫りにしてほしいと頼むと、すぐに応じてくれた。そのために本の表紙は布製となり、布の上に稲垣家の家紋である「抱茗荷（だきみょうが）」が小さく浮き彫りにされた。茗荷は、物忘れを直す妙薬といわれ、ミョウガが「冥加」に通じ、神の加護を受けると考えられてきた。鉞子が稲垣家の家紋を本の表紙に刻もうと考えたのは、幕末から明治への激動の時代に幾多の無念を耐え忍んだ父への思いからであった。鉞子はあくまでも稲垣家の娘であり、武士の娘なのであった。

『武士の娘』（*A DAUGHTER of the SAMURAI*）は、一九二五年（大正十四年）十二月に出版された。巻頭のページを開けると、まず太い文字で謝辞がかかげられている。

「私の二人の母上に。尊敬と愛とたとえようもない感謝をこめて、神聖なる数々の想い出を捧げる。二人の母上は、暮らした場所や国こそ遠く離れていたが、二人の心はいつも、

私のなかで一つであった」

「私の二人の母上」とは、いうまでもなく、生まれ故郷長岡の実母稲垣金と、シンシナティで一緒に暮らし世話になったセーラ・ウイルソン（フローレンスの母）である。ただし、この「アメリカの母上」に、「姉であり母でもあった」フローレンス・ウイルソンが色濃く投影されていることは、再三指摘してきたとおりである。

だれも予想していなかったことが起きた。無名の一日本女性の半生記をつづったこの本が一時ベストセラーになり、通算八万部売れたという。そしてなによりも、この本によせられた手ばなしの讃辞である。なぜだったのであろうか。

なぜ賞賛されたのか

杉本鉞子の『武士の娘』が世に出たとき、アメリカはそれまで経験したことのない時代を迎えていた。「繁栄そして幻滅」である。[註6]

人類史上初めて勃発した世界大戦（一九一四〜一九一八）で、大量の人間が殺戮（さつりく）兵器の犠牲になった。ヨーロッパ戦線の殺戮と破壊のすさまじさは、進歩やヒューマニズムを基調とする十九世紀的な啓蒙思想に深刻な疑問を投げかけた。一九一七年四月に参戦したア

メリカは二百万人の若者をヨーロッパ戦線に送り、一年半の戦闘で十一万六千人が戦死した。

しかし、この戦争は同時に、アメリカに好景気をもたらしたのだ。

一九二〇年代、アメリカは戦争景気のおかげで未曾有の繁栄を享受する。アメリカで発達した機械文明は、便利で豊かな生活スタイルを生み出し、大衆消費社会をもたらした。自動車、電話、冷蔵庫、映画、ラジオ、野球などは、この時代に普及したものである。豊かで便利な生活を享受する幅広い中産階級が生まれ、所謂「アメリカ的生活様式」が定着する。そして「マネー・ゲーム」の源流ともいえる価値以上の株価の売り買いで大金を手にする熱狂に、多くの人たちがのめりこんでいった。

しかし、生活は豊かになったが、他方では、それまで意味をもっていた宗教やモラル（道徳）に疑問が投げかけられ、批判され、あるいは否定された。若い世代は新しい文化と性の自由を謳歌し、口紅を派手にぬり短いスカートをはいた若い女性が街を闊歩し、煙草を吸い禁じられた酒を飲んだ。堅実な家庭に「家庭崩壊」という深刻な変化が生まれ、社会のルールを維持してきたコミュニティ（地域社会）が機能しなくなりはじめた。

アメリカ的理想主義への幻滅ということでは、前述した「禁酒法」の顚末ほど象徴的な

出来事はないだろう。「禁酒法」は一九二〇年一月に施行されたが、FBI（連邦捜査局）や警察がいくら取り締まっても、酒の密造やもぐり酒場はなくならず、カナダなど外国からの密輸入も止まらなかった。むしろシカゴのアル・カポネのようなギャングが各地に横行し、社会に新たなる恐怖と混乱をもたらしたのである。こうして一時会員数三十七万人を超えた禁酒運動は、人々に虚しい幻滅を与えて終わった（「禁酒法」は一九三三年廃止される）。

国際政治のうえでもアメリカ的理想主義は人々に幻滅を与えた。世界大戦を二度と繰り返すまいとして、ウイルソン大統領が提唱し設立された国際連盟は、そのアメリカ自身が議会の反対で加盟できず、次第に機能不全に陥っていった。

『武士の娘』が出版された当時、アメリカでベストセラーになった有名な本がある。スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』（*The Great Gatsby,* 1925）、セオドア・ドライザーの『アメリカの悲劇』（*An American Tragedy,* 1925）、アーネスト・ヘミングウェイの『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises,* 1926）等である。これらの作品に共通しているのは、第一次世界大戦のときに青春を送った若者たちが、戦後の繁栄にも自由の享受にもなじめず、生きる意味を失って人生に挫折していく姿を描いていることであ

る。彼らは「失われた世代」（ロスト・ジェネレーション）と呼ばれていた。

そのなかで『武士の娘』は、ある意味で異彩をはなっていた。

アメリカの読者の多くは、ミステリアスな日本の「武士の娘」への興味から読み始めるが、読みすすむにつれて、このけなげな少女が、内戦（戊辰戦争）に敗れても武士の誇りを失わなかった父母のもとで、厳しい教育としつけをうけて育ったことを知る。そして、さまざまな試練にたえながら、二つの異質な国で果敢に人生にたちむかう、ゆるぎない信念と不屈の精神をもつ女性の半生記に感動するのである。ちなみに、内戦に敗れても希望を失わないアメリカ南部魂を描き、超ベストセラーとなったマーガレット・ミッチェル作『風と共に去りぬ』は、『武士の娘』の背景と類似することから時として対比されることがあるが、出版は一九三六年、『武士の娘』出版の十一年後のことである。

この本は、信念がゆらぎなんとなく不安を感じていた人々の心に、どことなくやさしく響くものがあった。そして、人生には生きる意味があることを思い出させてくれるのであった。鉞子が渡米して初めて暮らしたオハイオ州シンシナティの新聞『シンシナティ・エンクァイラー』紙は、「読む人に喜びを与える自伝だ」と手ばなしで賞賛した。

「この本全体が、あふれるような優雅な美しさに満ちていて、勇気や劇的事件や悲劇や愛

情の物語がたっぷり語られている。そしてなんといっても、どんな目的で読んでも心から喜びがわいてくるような満足感を与えてくれるのである。（中略）どのページも読む価値がある」[註7]

アメリカの良識を代表するといわれる『ニューヨーク・タイムズ』紙は「現代に生きる武士道」と題してほめたたえた。

「あらゆる意味で、『武士の娘』は、アメリカ人に武士の生き方を説明しようと試みた本である。『赤ら顔の野蛮人たち（アメリカ人）と神々の子孫たち（日本人）が、お互いの心を学び合わなければ、船はただ行ったり来たりするばかりで、二つの国は決して近づくことはないだろう』と、著者は書いている。日本という誇り高く傷つきやすい国民を不当に扱うことで、アメリカの法治主義の健全な部分が台無しにされている。[註8] しかもアメリカの盲目的な愛国主義が、日本における『白人脅威論』に呼応するかのように、『黄禍論』[註9]をあおるような時代だからこそ、この本は読む価値があり賞賛にあたいするのである」

そのなかで『武士の娘』を誰よりも賞賛したのは、クリストファー・モーレーであろう。

「多くの点で古いサムライの規範から遥かにかけ離れた偉大なアメリカの作家ウォルト・

ホイットマンがいっている。『歴史が正しく語られさえすれば、つくり話の小説などなんの役にもたたなくなる』と。この本はまさに歴史が正しく語られた本である」[註10]

『武士の娘』は、彼女が生きてきた時代の歴史が正しく語られた本である、とモーレーは指摘したのである。モーレーが引用した言葉は、ホイットマンの詩集『草の葉』初版（一八五五年）の有名な序文のなかに出てくる。一つの作品を――それも無名の著者の本を――アメリカの国民的詩人ホイットマンの言葉をもって賞賛するというのは、破格のことであった。

『草の葉』（*LEAVES OF GRASS*, 1855-92）は、これを読まなくしてはアメリカを理解できないアメリカの根源的作品といわれている。ホイットマンが生涯をかけて書いた詩が集大成されているのだが、そのなかに日本人にもなじみの詩がある。移民の国アメリカの玄関口ニューヨークのマンハッタンを称える長詩「ブロードウェー・ページェント（ブロードウェーの華麗な行列）」の冒頭の一節である。[註11]

西の海を越えて遥か日本から渡来した、
頬が日焼けし、刀を二本手挟（たばさ）んだ礼儀正しい使節たち、

無蓋の馬車に身をゆだね、無帽のまま、動ずることなく、
きょうマンハッタンの街頭をゆく。

一八六〇年（万延元年）六月十六日、日米修好通商条約の批准書交換のため幕府が派遣した遣米使節団が、ニューヨークのブロードウェーを行進する姿を街頭から見ていたホイットマンは、心から感動し、詠ったのである。

『草の葉』を読んだことのある人なら、この有名な詩の冒頭の句を思い出しながら『武士の娘』を読んだのかもしれない。サムライ（武士）というと、アメリカ人には、道徳心が篤く、質素で禁欲的、清貧に甘んじ、死をも恐れない勇気ある人間というイメージがある。そこには、アメリカのピューリタン（清教徒）やクエーカー（フレンド派）のように、信仰するキリスト教の厳格な規律を守り理想を求めた人たちのイメージとどこか共通するものがあったのである。

「期待される日本人」像

『武士の娘』が世界で多くの読者をえて賞賛された背景の一つに、この時代、国際社会で

高まった日本及び日本人への期待感があった。『ニューヨーク・サン』紙が書いている。

「この本は、お互いに必ずしも理解してこなかった二つの国を仲裁する力をもっている。イギリスの皇太子が英国最良の大使だとすれば、杉本夫人は日本最良の大使である」

『武士の娘』が世に出る二十数年前に、世界融和に貢献する日本人の民族性に注目した人がいる。エリザ・シドモア。アメリカのジャーナリスト、紀行作家である。[註12]

シドモアの日本旅行記（『シドモア日本紀行』）は、日本独特の人力車で旅をして出会った日本各地の風土や文化や庶民の生活をわかり易く生き生きと描写している。そしてシドモアは、結論として次のように予言している。

「もしも、日本国民が自らの芸術、熟成した礼法、質素な暮らし、こまやかな家庭の魅力を失っていくならば、門戸開放のペリー提督は最悪の敵となるでしょう。もしも、かつて日本が中国からの渡来品を改良し工夫したように、西洋からの輸入品を洗練し変えていくならば、次の世紀（二十世紀）、世界を凌駕（りょうが）することは不可能でしょうか？

海外旅行が、あらゆる地域を互いに親密にさせている今日、（中略）世界の国々の遊び場やリゾートにふさわしいスイスは、立派な天職を持っています。しかし、すでに地球の美術工房となっている日本は、このスイス以上に世界融和の天職を持っているのではない

でしょうか？」

シドモアは、「日本人は世界融和の天職を持っているのではないか」と直観し、日本に大きな期待を寄せたのである。そして、日露戦争を経て、シドモアの期待は「確信」に変わった。それは捕虜にたいする日本人の「謙虚で慈悲深い温情あふれる扱い」を目にしたからであった。シドモアはその著書[註13]のなかで、帝政ロシアの公爵夫人という架空の人物の目を通して、自ら取材した当時の日本の情況を克明に伝えている。日本人は国をあげてロシア人捕虜を優遇し、手厚くもてなした。それが海外に伝えられ、賞賛の的になった。

杉本鉞子の『武士の娘』は、シドモアのいう「謙虚で慈悲深く優しい日本人」はいかにして生まれるか、その原点を具体的に描いていたのである。

一九二〇年代、日本は「国際紛争を解決する新しい大国」とみなされていた。

日本は第一次世界大戦で、英仏米の連合国に属し、戦勝国として英仏と並ぶ国際連盟の常任理事国となった。『武士道』の著者として国際的に知られた法学者・農学者の新渡戸稲造が国際連盟事務次長に就任した。ベルギー大使、フランス大使を歴任した外交官で国際法学者としても著名な安達峰一郎（あだちみねいちろう）が国際連盟総会日本代表に任命された。のちに安達は、自ら設立に尽力したオランダ・ハーグの常設国際司法裁判所判事そして所長に就任し

て、国際紛争の調停にあたり、各国代表から「世界の良心」と呼ばれていた。[註14]

だが、新渡戸や安達が国際紛争の平和的解決という国際連盟の理念に力を注いでいたとき、本国日本は、満州事変から国際連盟脱退へと軍国主義の道を突き進んでいた。日本及び日本人への世界の期待は「失望」に変わっていった。

シドモアは、日本人の矛盾に満ちた性格について、こうも指摘していた。

「日本人は今世紀最大の謎であり、最も不可解で最も矛盾に満ちた民族です。（中略）西洋の歴史書は、日本人を侵略的で残酷で復讐（ふくしゅう）的な民族であると断定する一方で、経験に学んだ日本人は、謙虚で慈悲深く優しい民族であると検証しています。茶の湯の念入りな改良と工夫を行ってきた同じ世紀に、拷問、迫害を黙認し、戦場では前代未聞の殺戮（さつりく）に手を染めました。高潔なる黙想、俳諧に浸り、芸術を育成しながら人生の半分を過ごしてきた同じ人間が、人生の別な半分を快楽にうつつを抜かし、敵をばらばらに叩き切ったり、楽しそうにハラキリを見物したりします。日本人は夢想し、遅滞させ、万事当てにならないミョウニチ（明日）へ先送りしながら、突然嵐のごとく果敢に行動し達成することで外国人を驚かせます」（同前）

新渡戸稲造、安達峰一郎、そして杉本鉞子など、心ある日本人たちの国際社会への貢献

は、この時代に実を結ばなかった。シドモアが指摘した「相反する性格をもつ日本人」の本質は、結局、あまり変わっていなかったのだ。明治の日露戦争では、「国際法」遵守が国策だった。日本人は忠実に国策に従ったのである。昭和の日本は軍国主義へ道が傾斜し、「国際法」軽視が国策となる。日本人は同じように国策に従った。すべてではないにしても、今度は逆に「国際法」無視、捕虜虐待、人命軽視に転じることになるのである。

［註1］ 今日、コロンビア大学のジャーナリズム・スクールは大学院に特化されている。大学を卒業して新聞社、雑誌社、放送局などに数年間勤務したあと、さらにジャーナリズムの実践的な専門ノウハウにみがきをかけるために入学する。国際色豊かでアジア人留学生も多い。スクール創設の功労者の名をとった「ピューリッツァー賞」は、ジャーナリスト（報道写真家を含む）に与えられる最も権威ある賞とされている。

［註2］ 杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（2）」（『婦人之友』昭和十五年二月号）

［註3］ 『紐育新報』一九二〇年七月三日付（コロンビア大学東亜図書館所蔵）

［註4］ Columbia University Bulletin of Information（コロンビア大学図書館所蔵）

［註5］ 杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（2）」（『婦人之友』昭和十五年二月号）

［註6］ Walter Lippmann, *A Preface to Morals*, 1929 Frederick Allen, *Only Yesterday*,

1931（F. アレン『オンリー・イエスタディ』藤久ミネ訳、筑摩叢書、昭和六十一年）、有賀夏紀『アメリカの二〇世紀』中公新書、平成十四年等を参考にした。

［註7］ Cincinnati Enquirer, Jan. 16. 1926

［註8］ 日露戦争後、カリフォルニア州で行われた「日本人学童の公立学校からの排斥」から、一九二四年米国議会の「排日移民法の制定」まで、アメリカにおける日本人差別の動きを指している。

［註9］ New York Times, Jan. 10. 1926

［註10］ Christopher Morley, Introduction to A Daughter of the Samurai, 1925

［註11］ ウォルト・ホイットマン『草の葉』酒本雅之訳、岩波文庫、平成元年

［註12］ エリザ・ルーアマー・シドモア（一八五六～一九二八）は、アイオワ州クリントンに生まれ、オハイオ州のプロテスタント長老派系のオーバリン大学に在籍。首都ワシントンDCで新聞記者の見習いをしながら『ニューヨーク・タイムズ』紙などに記事を書いた。アラスカ紀行で注目され、米国地理学協会初の女性理事に選ばれている。明治十四年（一八八一年）兄ジョージが横浜領事館に勤務し、母キャサリンも日本で暮らすようになると、しばしば日本を訪れ各地を旅行し本を書いた。シドモアは『武士道』を書いた新渡戸稲造と懇意で終生付き合いを続けた。ワシントン・ポトマック河畔への日本の桜の植樹運動ではタフト大統領夫人に協力し、一九一二年、記念式典にも参列した。一九二四年、米議会で「排日移民法」が制定されると、それに抗議してアメリカを去り、スイスのジュネーブに居を定めて

いる。一九二八年死亡。本人の遺志で横浜の外国人墓地に葬られている。

［註13］ AS THE HAGUE ORDAINS, Journal of A Russian Prisoner's Wife in Japan, 1907（『日露戦争下の日本―ハーグ条約の命ずるままに　ロシア軍人捕虜の妻の日記』小木曽龍、美代子訳、新人物往来社、平成十七年）

［註14］ 安達峰一郎（一八六九～一九三四）、山形県東村山郡山辺町生まれ。明治十七年十五歳のとき司法省法学校の官費生試験に合格。法律とフランス語を学び、東京帝国大学法科大学進学。フランス語が抜群に優れ、政府が法律顧問として招いたイタリアのアレッサンドロ・パテルノストロ（パレルモ大学国際法教授）の通訳を務め、氏の篤い薫陶をうけ国際法への関心を深めた。大学卒業後、外務省に入省。明治三十八年、日露講和条約交渉で、小村寿太郎全権大使のもと公式語のフランス語通訳と条約作成に従事。メキシコ公使、ベルギー公使（のち大使）、フランス大使を歴任後、国際連盟で活躍。ハーグの常設国際司法裁判所在任中急死した安達に対してオランダは国葬をもって敬意を表した。歌人でもあった妻鏡子は天童藩（山形県）の家老の娘。夫と長く暮らしたベルギーに残り、第二次世界大戦中も帰国しなかった。

第九章　協力者の死と戦争への道

第二作『成金の娘』

昭和二年（一九二七年）九月、五十五歳になった杉本鉞子は、二十三歳の二女の千代野と七十一歳のフローレンス・ウイルソンを伴って帰国する。その動静が『横浜貿易新聞』（のちの『神奈川新聞』）や『都新聞』（のちの『東京新聞』）で報じられている。いずれも「コロンビア大学教授杉本鉞子女史帰朝」と報じている。『武士の娘』の著者というよりも、日本女性初の「コロンビア大学教授」（実際は非常勤講師）として注目されていたことがわかる。『武士の娘』の邦訳はまだ行われていなかった。記者のインタビューに鉞子は、「大学から約一年間の休みをいただいてきました」と答えている。またアメリカへ戻るつもりだったので、ニューヨークのアパートはそのままであった。しかし、鉞子はその後健康上の理由などから、二度とアメリカへ戻ることはなかった。

鉞子たちは、神戸の長女花野の家にしばらく滞在した。花野の夫小寺敬一は、親族が経営する紡績業には従事せず、母校の関西学院で教鞭をとり、経営学や貿易論を講じていた。

翌昭和三年春、鉞子たちは東京市芝区（現港区）に家を借りて移り住んだ。

その年、二女の千代野が結婚している。相手は福澤諭吉の孫にあたる清岡暎一である。暎一の父清岡邦之助は四国土佐の出身で福澤諭吉の門下生、母は福澤の三女お俊。暎一は慶応義塾普通部を卒業後、ニューヨーク州イサカのコーネル大学に留学し、帰国後慶応義塾大学予科の英語教師をしていた。暎一は、姉の萬代が主宰していた「外国帰りの婦人の会」で杉本鉞子・千代野の母娘を紹介され、千代野の母国語同然の英語に感心し、その明るい性格にひかれた。母お俊も千代野を気に入り、二人は結婚した。

結婚後暎一は、父から結婚祝いとして資金を提供されてアメリカへ行き、昭和五年（一九三〇年）の秋から二年間、コロンビア大学非常勤講師として、「日本語基礎講座」「日本の生活と習慣」「日本の歴史と文化」を教えている。鉞子の帰国で休止になっていた講座を引き継いだことになる。夫妻はモーニングサイド・ハイツの鉞子のアパートに住んだ。

鉞子が帰国した昭和初期の日本は、昭和恐慌で疲弊し、やがて満州事変（昭和六年）をひき起こし、満州国建国、そして泥沼の中国侵略戦争へと突き進んでいく時代にあった。

十一年ぶりに日本へ帰国して鉞子が驚いたのは、日本の変わりようであった。特に懸念したのは、日本人の拝金主義や無知からくる外国かぶれだった。日本はまさに「成金の国」のようだった。「成金」と呼ばれる「新・金持ち貴族」への言及は、すでに『武士の

娘』の終わりに近い章「二十九．姉の家で」に出てくる。

姉が嫁いだ長岡郊外の農村から東京へ出た中山という青年が、石油業で成功して大金持ちになる。その夫人が東京の鉞子の家へ訪ねてきたときの挿話である。美しく着飾ったハイカラな中山夫人は、長たらしい挨拶のあと、おもむろに上等な風呂敷包みから舶来の紙箱をとりだす。その箱の上には英語で「欧米の上流社会の紳士淑女が愛用する、花の香もかぐわしい舶来の珍菓」と書かれている。だが美しい紙箱の中身は、なんとチューインガムだったというのである。

鉞子は、第二作となる『成金の娘』の執筆に取り組んでいた。鉞子が『武士の娘』の出版で世話になったラッセル・ダブルディに宛てた昭和六年八月七日付の手紙がある。

「親愛なるダブルディ様。『成金の娘』はほぼ完成し、この九月には原稿をお届けしたいと思います。この小説の女主人公やその他の登場人物、召し使いや近所の人たちは皆、私が親しく知っている人たちをモデルにしています。きっと貴方の気に入っていただけると思います。『武士の娘』は今も売れています。ひとえに貴方の出版社のご指導のお蔭です。『成金の娘』も同じような幸運に恵まれることを願っています。（中略）

私は来年、ニューヨークに戻りたいと考えています。ただ一年前に重い病気にかかり、

まだ回復していませんので無理かもしれません」[註1]

『成金の娘』（*A DAUGHTER of the NARIKIN*）は、一九三二年、ダブルディ・ドラン社から出版された。足軽から身をおこして事業に成功した成金の父の娘ユキコは、何不自由なく成長するが、華族の子息と結婚して運命が変わる。夫は事業に失敗し結婚生活も破綻して、ユキコは生きる意味と希望を失い、剃髪（ていはつ）して尼になるという悲劇が描かれている。

しかし二作目の『成金の娘』は、『武士の娘』のようには評判にならず、あまり売れなかったようである。

蔭の人であり続けて

『成金の娘』は、ミス・フローレンス・ウイルソンが手伝った最後の作品となった。

昭和七年（一九三二年）秋、フローレンスは心臓発作を起こし、聖路加（せいろか）病院に入院した。彼女は一年前にも心臓発作を起こしたことがあったが、そのときは大事にいたらなかった。今回も快方に向かいそうだとの医師の診断だったが、入院三日後の十一月十九日、突然容態が急変し静かに息をひきとった。七十六歳であった。

フローレンス・ウイルソンの葬儀は青山の教会で行われた。フローレンスの友人だった

牧師の主宰のもと、鉞子、小寺敬一・花野夫妻、清岡暎一・千代野夫妻のほか、日米の友人たちが参列し、極めて簡素にとりおこなわれた。簡素にすることは、フローレンスの希望であった。

牧師はテニスンの「彼方（かなた）の岸へ」（Crossing the Bar）の一節を朗読した。生前フローレンスが鉞子に頼んでいたことだった。[註2]

たそがれはほの暗く、
やがて夕（ゆうべ）の鐘ひびきて、
遂には闇ぞ。しかれども
わが船出には願わくば
別れのなげき、なかれかし——。

「時」と「所」の境より、
高潮のわが身をのせて、
遠くはこび行く日、来（くる）とも

彼方に着かばしるべの主に
見えまつるぞ、わが願い――。

「彼方の岸へ」は、テニスンが晩年に書いた辞世の詩である。

フローレンス・ウイルソンの墓は、本人の遺言で、青山墓地の杉本松雄の墓の隣におかれた。将来は鉞子が眠るところでもあった。

フローレンスは生前鉞子に「人間到る所青山あり、とはよい言葉ね。私も太平洋で死んだら、太平洋に還りたい、日本とアメリカとのあいだに横たわる太平の洋に」と言っていたという。この言葉は、「太平洋に架かる虹の橋になりたい」と言っていた新渡戸稲造の言葉を連想させる。一八九八年シンシナティで鉞子に出会ってから三十四年間、フローレンスの生涯は鉞子とその家族のために捧げられたといっていい。フローレンスを失った鉞子のショックは大きく、しばらく病床に臥していた。

一年後、故フローレンス・ウイルソン一周忌にあたり、鉞子は日米の友人たちに長文の手紙を出している。フローレンスに捧げる格調高い追悼の辞であった。

そのなかで、『武士の娘』を執筆したニューヨークについてこう書いている。

「私たちのニューヨークでの生活は、経済的にかなり苦労いたしましたが、興味あふれるものでございました。この街で私たち――ミス・ウイルソンと私自身は、共に文筆生活を始めたのでございます。彼女は私に支援と激励を与えて下さいました。文筆という不思議な世界では、わずかに光が見える道に達する前でさえも、あきあきするような長い道のりが続くのです。私たちは気も心もひとつにして頑張りました。彼女こそ、愛と勇気と力と知恵をもって私を助けて下さり、丘の上に導いて下さった恩人なのでございます。ところが、私たちが図らずも成功したとき、彼女は当然受けるべき敬意（クレジット）を一切受け入れようとしなかったのでございます[註3]」

フローレンスの功績がいかに大きかったか、一周忌の追悼の辞のなかで鉞子は友人たちに何としても伝えておきたかった。それでもフローレンスとの約束でこの程度の言いまわしにするしかなかった。

その七年後、鉞子は、フローレンスがどのように協力したのかを初めて明かした。

「ミス・ウイルソンは私の書きますものを一々お読み下さり、ご自身の日本におけるご経験から、そこここに独特のセンチメント（感傷）とメローネス（芳香）を加えて、日本の情緒をアメリカ人にわかり易く説く助けをして下さいました。殊に急所急所は、ご満足の

行くまで根ほり葉ほりただされては、私の頭にさえぼんやりしていることを、はっきりするまで考えさせて下さいました。例の日本式の考えで、私があまり自身の経験などには触れたくないと申しますと、大変なお叱りで、『面白い話をなさらないなんて、そんな意地の悪いことがあるでしょうか。いくらご自分のことだからとて、それは謙遜ではない、かえって自惚れというものでしょう。読む人はあなたのことだからと思うて読むのではなく、話が面白いから読みますのに』と、きつくおっしゃるのです」[註4]

鉞子とフローレンスの関係は、この文章が実によく伝えている。鉞子が、フローレンスから言葉一つ一つに至るまで細かい指摘を受けながら、『武士の娘』の原稿の推敲を重ねている様子が手にとるように伝わってくるのである。鉞子はさらにこうも書いている。

「こうして出来ました『武士の娘』でありましたから、ぜひ共著者としてミス・ウイルソンのお名がほしいと存じましたが、表立つことを極端に嫌われましたのでそれも叶わず、今になってこうしてお話していますが、それさえ黙っていた方がお喜びになるだろうかなどとも考えられ、ともすると気後れがするのでございます」（同前）

フローレンスは、共著者として自分の名前を出すことさえかたく禁じていた。彼女はあくまでも鉞子の蔭の人であり続けた。今では「フローレンス・ウイルソン」の名前は忘れ

られているが、フローレンスなくして『武士の娘』という本は生まれなかった。

鉞子がフローレンスとの交友の裏話を初めて明かすことになった経緯については、アメリカ人との交友を記した「〝武士の娘〟の見たアメリカ」（『婦人之友』昭和十五年一～三月号）のなかで語られている。『婦人之友』は、自由学園の創立者として知られる羽仁もと子が発刊した雑誌である。担当者の山室善子はこう書いている。

「柔らかな陽の射す静かな二階のお仕事部屋で、夫人はミス・ウイルソンについて語られながら、はらはらと涙を落とされました。『ごめん下さいませ。実は私はもう年寄でございますし、書くことは一切お断りしておりましたが、ただ一つ、日本の真実な、隠れた友であられたミス・ウイルソンのことだけは、どうしても書き残しておきたいものと、ひそかに希っておりました。するとほんとうに不思議なことに、あなたがこの仕事について初めて話にいらしたのが、ちょうどあの方の御命日でございました。それでね、とうとうお引き受けすることにきめましたの』こうしてお会いする毎に、人と人と、国と国との温かい友情を、どうか深めようとの優しいお心にいつも触れさせられております」[註5]

鉞子にたいするフローレンスの行為は、日本人の言葉でいえば「無私の行為」あるいは「無償の行為」ということであろう。だが、アメリカの何人かの知的な女性に聞くと、即

座に「鉞子を愛していたからだ」（“She loved Etsu.”）と答えている。愛のかたちにはいくらもある。

よく引用される「聖書」の言葉がある。「コリントの信徒への手紙」十三章の一節である。

「たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。（中略）それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。そのなかで最も大いなるものは、愛である」（『聖書　新共同訳』）

フローレンス・ウイルソンの鉞子への愛とは、こういうものだったのであろう。

もうひとりのフローレンス

『成金の娘』はフローレンス・ウイルソンが鉞子の執筆に協力した最後の作品になった

が、本の冒頭に掲げられた謝辞にフローレンス・ウエルズという新しい名前が出ている。「私の友人ミス・フローレンス・ウエルズに大いなる感謝をこめて。彼女の忍耐強い協力と、今日の日本の若い女性たちへの心憎いばかりの理解というものがなければ、この本はもつれた絹のけばに過ぎなかったでしょう」（筆者訳、以下同）

フローレンス・ウエルズは伝道会の仕事で日本へ来たといわれるが、詳しい経歴はわからない。たまたま女子英学塾（のちの津田塾大学）の創立者津田梅子の後継者となる星野あいの『小伝』（中央公論事業出版、昭和三十五年）に一ヵ所だけふれられている。

大正七年（一九一八年）星野がコロンビア大学教育学部に留学した際、住居探しで苦労したが、大学近くのアパートに住んでいた旧知のピアニスト吉田信子に会い、その一室を借りて住んだ。そこにミス・ウエルズが同居していた。ミス・ウエルズは伝道会から離れ、勉強のためニューヨークに来ていたという。このときの縁で、星野が帰国し女子英学塾の塾長に就任すると、ウエルズは英語講師として採用された。

その後鉞子は南青山の借家に居を定めたが、たまたま近所に、吉田信子とミス・ウエルズが住んでいた。体調をくずしていたフローレンス・ウイルソンはミス・ウエルズに鉞子の執筆に協力してその英文をみてやってほしいと頼んだと考えられる。

鉞子の英語力そのものはかなりのものだった。千代野の夫で英語教師の清岡暎一は「杉本鉞子の英語のすばらしさに（心が）打たれた」[註6]と言っている。しかしそれでも細かい英語表現のチェックは英語が母国語の人にしてもらう必要があった。『成金の娘』はその試金石で、鉞子もミス・ウイルソンも、ミス・ウエルズの能力に満足したのであろう。ミス・ウイルソンの死後、鉞子は英文の執筆で全面的にミス・ウエルズに頼るようになった。

満州事変（昭和六年）以来、日本は国際的に孤立しつつあった。鉞子と出版社のラッセル・ダブルディとの手紙のやりとりでも、満州問題が話題になっていた。

「親愛なるダブルディ様。三月二十四日付の丁重なお手紙をありがとうございました。満州問題に関する貴方のご心配はもっともだと思います。十五世紀にもわたる日本と中国との不変の関係が友好を保てなくなっています。本当に悲しむべきことです。（中略）

私の本の成功はすべて貴方の賢明なご指示のお蔭です。三百七十二ドル二十二セントのチェックを受け取りました。私は今、次の本である『農夫の娘』にとりかかっています」

（鉞子からダブルディへ、一九三三年四月二十八日付）

鉞子はダブルディ宛の手紙で、著作権料の小切手を受け取ったことにしばしば言及して

いる。それは当時、鉞子の唯一といっていい収入源であった。

鉞子の手紙はすべて、日本橋の和紙の老舗・榛原（はいばら）で売られている草花の絵のすかしが入った和紙が使われていた。その長尺の和紙にペン書きで英語の文章がしたためられている。その奥ゆかしい心遣いはダブルディを感動させた。この手紙にもあるように、ミス・ウイルソンの死後、鉞子は三作目の『農夫の娘』の執筆にとりかかっていた。しかし、当時鉞子は病気がちで執筆は思うように進んでいなかった。

顕示欲の強い人

ダブルディ出版社の編集局長ラッセル・ダブルディが杉本鉞子から受け取った手紙を集めた「エツ・イナガキ・スギモト・ペーパーズ、一九三一―一九四九」（ニューヨーク公共図書館所蔵）のなかには、ラッセル・ダブルディ宛のフローレンス・ウエルズの手紙も入っている。この文書では、ミス・ウエルズは「杉本の（英語）教師、翻訳者」と紹介されている。

ミス・ウエルズは、昭和九年（一九三四年）初頭、渡米してニューヨークのダブルディ本社を訪ね、ラッセル・ダブルディに会っている。無論鉞子の紹介によるものであった。

「親愛なるダブルディ様。私がそちらで過ごした楽しい思い出を貴方にいちいち書いていたら、紙くずかごがいくらあっても足りなかったでしょう。（中略）杉本夫人は体の調子があまりよくありません。糖尿病なのです。それでも彼女は『農夫の娘』の執筆に取り組んでいます。我々はなんとか第一章を書き終えました。本全体の構成が固まりましたら、私から草案をお送りします。しかし夏の初めまでに本を完成するのは物理的に無理だと思います」（ミス・ウエルズからダブルディへ、一九三四年四月二日付）

ミス・ウエルズは、この手紙で、「杉本夫人は糖尿病です」と書いている。病名はプライバシーにかかわることであるが、鉞子はミス・ウエルズのダブルディ宛の手紙は一切みていないので知らなかったと思われる。さらにミス・ウエルズは、『農夫の娘』は「我々」即ち鉞子とミス・ウエルズの二人で執筆している、とはっきり書いている。ミス・ウエルズは、フローレンス・ウイルソンとは違って、顕示欲の強い人だったようである。

鉞子は病気がちで、『農夫の娘』の執筆は大幅に遅れていた。予定より半年近くも遅れ、翌年ようやく完成に近づいたころ、ミス・ウエルズが出した手紙がある。

「私としては、この本は前作の『成金の娘』よりいいものになると思います。恐らくこの本の主人公たちが皆ハッピーエンドに終わるからです」（ミス・ウエルズからダブルディへ、



鉞子宅での雛祭り。鉞子の右隣がミス・ウエルズ（昭和11年3月）

一九三五年二月七日付）

この手紙は鉞子が書いたものではない。ミス・ウエルズが書いた手紙である。

鉞子はかなり気持ちが落ち込んでいた。それだけになにかとミス・ウエルズに頼らざるを得なかった。ウエルズからみれば、鉞子は、あの気丈な「武士の娘」ではなく、他人に頼る弱気な初老の女性であった。しかもミス・ウエルズは自分の仕事があり自分の収入で生計を立てている人である。当然、鉞子の執筆を手伝う見返りを期待していたはずである。だが鉞子とミス・ウエルズの間には、金銭上などなんらかの約束をしていた気配が全くない。

この関係は、二人のあいだに固い信頼関係がなければうまくいくものではない。鉞子は、本が完成したあと、著作権料のなかからミス・ウエルズになんらかのお礼をするつもりではあったろうが、ミス・ウエルズにしてみれば大した額は期待できない。それにウエルズにも弱みがあった。ミス・ウイルソンに頼まれたときは、「高名な作家」に協力する

ボランティアのつもりで気軽に引き受けたのである。ところが鉞子につきあってみると相当に骨の折れる仕事になった。金銭上の見返りがあまり期待できないとなれば、それならむしろ『農夫の娘』の執筆に積極的に協力し、鉞子との「共同執筆者」として認めてもらいたいと考えるようになったとしても不思議ではない。

ミス・ウエルズは、無私に徹したミス・ウイルソンではなかった。鉞子をたてる義理もなかった。ダブルディ宛の同じ手紙のなかでミス・ウエルズは書いている――。

「私が勤めている実践女学校（ウエルズは女子英学塾のほかここでも英語を教えていた）の機関誌に二年前『九条夫人伝』を書きました。京都西本願寺の高僧の第二夫人の娘ですが、いま日本で最も愛されている女流詩人です。『農夫の娘』が終わりましたら、私はこの『九条夫人伝』にとりくみ、本物の英語に訳したいと考えています。この本はアメリカの読者にうけると思います。[註7]（中略）

私はこのたびアメリカ婦人ペンクラブ日本支部の会長に就任しました。日本にはいま日本語を正確な英語に訳すことが出来る人がおりません。それは誇張ではなく、大事な英訳が必要になりますと、みんな私のところに頼んでくるのです。これから私がやることに興味がおありでしたら、ダブルディ・ドラン社に優先権（ファースト・リフューザル）をさし

あげてもよろしいですよ！」

この手紙を受けとったダブルディはどう思っただろうか。以後ダブルディはミス・ウエルズの手紙に返事を出さなくなった。

『農夫の娘』

それにしてもミス・ウエルズが鉞子について十分理解していなかったといわざるを得ないことがある。『武士の娘』を書いた鉞子はアメリカでは別格扱いの作家だったということである。

ダブルディは鉞子にそれとなくウエルズとの関係を問いただしたようである。鉞子は、ダブルディへの返事のなかで、ミス・ウエルズについてこう書いている。

「『農夫の娘』については、ミス・ウエルズがすべて貴方に書いておりますので私からはくり返しませんが、次の事実だけはお伝えしておきます。彼女と私は、お互いに熱意とやる気をもって仕事をしております」（鉞子からダブルディへ、一九三五年四月二十八日付）

『農夫の娘』（*A DAUGHTER of the NOHFU*）は、一九三五年に出版された。ミス・ウエルズからそれとなく「杉本夫人とウエルズの共著」とするよう示唆されていたが、ダブル

ディは無視した。

鉞子は、『成金の娘』と同じく、巻頭にフローレンス・ウエルズへの謝辞を掲げている。

「友人フローレンス・ウエルズに感謝をこめて。彼女の協力のお蔭で、農夫の娘オハルの人生物語が完成したのです」

『農夫の娘』の舞台は、鉞子の故郷長岡郊外の農村である。大正から昭和にかけて、近代化・商業化の波が農村におしよせていた。ある自作農の農家では、長男は東京に出て働きながら法律学校へ行くことを夢見ているし、長女も恋愛問題のこじれから家出して東京でカフェの女給をして暮らしている。家に残った二女オハルが両親を助けてなんとか農業を続けている。このオハルという二十歳の農夫の娘を中心に、雪深い越後の新年の行事から秋の収穫までの一年間の農家の暮らしを縦軸に、農村の変化や都会に出た兄と姉の生き様をまじえながら、物語が展開する。



娘３部作の完成祝賀会。鉞子の手元にあるのはフローレンス・ウイルソンの写真
（昭和11年、青山女学院同友会）

『武士の娘』『成金の娘』そして『農夫の娘』は、娘シリーズ三部作と呼ばれている。だが『農夫の娘』は、『成金の娘』と同じように、アメリカであまり評判にならなかった。

だがダブルディの鉞子への気遣いは変わらなかった。千九十二ドル四十セント（一九三四年十一月）、七百九十四ドル三十八セント（一九三六年五月）等、普段より多額の小切手を送ってきている。『武士の娘』のヨーロッパ七ヵ国版や『農夫の娘』の著作権料としてだったと考えられる。

『お鏡お祖母さま』執筆の背景

フローレンス・ウイルソンの死後、鉞子は南青山の小さな借家で女中と暮らしていた。鉞子の収入はダブルディ・ドラン社からときどき送られてくる著作権料とたまに頼まれる講演の謝礼ぐらいだった。

つつましい生活だったが、外出するときは、品のいい着物を着て出かけた。

豊住秀堅（元海軍軍医総監）の孫にあたる大久保（旧姓豊住）きぬよ（八十五歳）は、子どものころ南青山に住んでいたが、七十年以上も昔の鉞子との出会いを今でも鮮明に覚えている。彼女は筆者にこう語った。

「私が十二、三歳のころですが、外出すると、ときどき鉞子様にお目にかかるようになりました。絹の和服をめした鉞子様があちらから歩いていらっしゃると、人間の魅力というのか、なにかオーラのようなものを感じまして、その日は特別の日のように思いました。足取りも軽やかに楽しそうに歩いておられました。外人さんとご一緒の事も多かったように思います」

数少ない杉本鉞子の遺品のなかに半円形のサイン帳がある。開くと満月形の真っ白い和紙に訪問者の署名がなされているしゃれたサイン帳である。おもに昭和十一年（一九三六年）から昭和十二年にかけて南青山の鉞子宅を訪れた人たちの署名が記されている。大半が外国人の名前であるが、たまたまサイン帳を開いた最初のページに余白が残っていたからだろうか、二人の日本兵の名前が目にとびこんできた。

麻布第三連隊気付　辻ヨセト部隊　衛生上等兵　加藤清二
特務兵　綾川長十郎
昭和十二年九月十二日夜

昭和十一年に二・二六事件が起こり、日本は軍部独走、軍国体制へと舵がきられていくが、昭和十二年七月七日の盧溝橋事件をきっかけに日本軍の中国侵攻（当時「支那事変」と呼ばれた）が拡大していった。マスコミが戦意高揚をあおり、国民の大半が軍部の戦争遂行を支持していた。

軍は事変に投入する兵士を全国から急遽徴集したが、兵舎の準備が間に合わず、収容する場所が足りなかった。そこで「愛国婦人会」や「国防婦人会」に呼びかけて、地方から上京した召集兵を各家庭で面倒をみてくれるよう要請した。東京の各町内の有志たちは、出征する地方出身の兵士たちを十日間ほど家にあずかり、世話をしたのである。兵士たちは毎日そこから練兵場に通って訓練をうけ、あたふたと中国の最前線へ送られていった。鉞子も昭和十二年九月十二日にこの二人の兵士を家に迎えたのである。

鉞子はすでに六十五歳。純朴な若い兵士は、まるで自分の孫のようだった。彼女は女中と一緒に二人の兵士の食事や風呂、洗濯の世話をした。わずか十日間だったが、彼らにとってはこれが日本で味わう最後の家庭的な温かさになるかもしれないのであった。鉞子は戦争というものを初めて身近に感じ、出征する孫のような兵士に心がゆれ動いた。祖母や母や姉から戊辰戦争の遠い昔話を聞かされた少女時代とは全く異なる体験だった。武士

の娘は、今や自ら祖母の立場になっていたのである。

このときの体験が大きな契機となり、鉞子は『お鏡お祖母さま』を執筆した。老境を迎えた「武士の娘」の目からみた戦時下の日本の庶民の生活と家族の姿を描いたのである。まさにデビュー作『武士の娘』その後（続編）ともいえるようなものとなった。

支那事変以後日本はますます国際的に孤立し、昭和十四年（一九三九年）七月、アメリカは「日米通商航海条約の破棄」を通告。九月一日にヒトラー・ドイツがポーランドへ侵攻すると、三日に英仏が宣戦布告して、第二次世界大戦がはじまった。いつの間にか日本は〝ノーリターン〟の道をたどっていたのだが、それでも鉞子は海外の友人たちに、そしてかつての『武士の娘』の読者たちに、日本の庶民の心を少しでも伝えておきたかったのだ。

『お鏡お祖母さま』（*GRANDMOTHER O KYO*）は、昭和十五年春、ダブルディ・ドラン社から出版された。その夏、ドイツ空軍の空襲下にあったイギリスのロンドンでも出版されている。巻頭に「世界の祖母たちに捧ぐ」という献辞が掲げられているが、英文の推敲を手伝ってくれたフローレンス・ウエルズへの謝辞はない。

『武士の娘』の翻訳本は、このときまだ日本で出版されていなかったが、『お鏡お祖母さ

ま』は、アメリカで出版された同じ年、『婦人之友』の五月号から十月号まで六回にわたって、大岩美代の訳で連載された。以下はその梗概である。

山の井家のお鏡は、昭和十二年（一九三七年）夏、支那事変に出征する最愛の孫息子義隆を見送ったばかりである。お鏡は嘉永三年（一八五〇年）の生まれで八十七歳。武士の娘として厳しく育てられ、幕末、明治、大正、昭和を生きぬいて、来年は米寿を迎えようとしている。夫は幕末維新、勤皇派として戦い、長男は海軍士官として日露戦争に従軍し戦死した。

お鏡は元武家出身の男は先ずなにをおいても軍人として国家に奉仕すべきだと考えてきたが、古美術に関心があった二男の頼母は軍人を嫌い、二十歳のときに家出して中国大陸に渡ったきり音信が絶えている。日露戦争で戦死した長男は二男二女を残したが、彼らの母が早死にしたため長女の町子が祖母のお鏡と一緒に暮らし、自ら働きに出て弟や妹の面倒をみてきた。長兄の次郎は、叔父の頼母に似て古美術が好きで骨董屋に勤めている。祖母の期待に応えたのは末孫の義隆で、陸軍士官学校を卒業、陸軍大尉として支那事変に出征した。義隆が無事帰国したら花嫁を迎えてやりたい、とお鏡は考えている。

義隆の無事を祈りに明治神宮に参拝した帰り、お鏡は国防婦人会の町内の部長に出会い、田舎から出てくる兵士の世話を頼まれる。お鏡は「可愛い義隆にしてやりたいことを他人様にもして差し上げればいい」と快く承知する。やってきたのは三十歳過ぎの川田と二十歳の保田（やすだ）の二人だった。川田は農夫ですでに五人の子どもがいる。保田も農家出身だが機械工場で働いていた。二人は日中は練兵場で訓練をうけ、夕方になると汗と埃（ほこり）にまみれてお鏡の家へ帰ってくる。お鏡と町子は、女中のおさわと一緒に、「支那では水が足りずお風呂がないらしい」と聞き毎日お風呂をわかし、出来るだけのご馳走を用意して待っている。女中のおさわは、明るい独身の保田に心を寄せる。

十日間はあっという間に過ぎ、最終日の深夜、川田と保田は各町内の家々に滞在していた同僚たちと落ち合い、集合地点に向かって行進していった。深夜なのに街角には大勢の人たちが日の丸の小旗を振って見送った。

そんななか、義隆から軍事郵便が届く。「孫はまだ生きている！」と、お鏡はほっとするが、手がふるえて読むことができない。町子に読んでもらうが、軍事上の理由で内容は中国の景色や古寺のことばかり。ただ義隆の部隊がある村に入っていくと、村の文化財の保護を日本語で訴える支那服の人がいた。その人の名前は「山の井頼母」。行方知れずの

叔父だったというのだ。お鏡は勘当同然の息子が生きていたことを知り複雑な思いだった。

年が明け、初雪が降る。三ヵ月後にお鏡の米寿のお祝いの日を迎える。家で世話した二人の兵士のうち、川田は戦死し、保田は戦闘で両足切断の重傷を負ったことを知らされる。

ある日、頼母が突然帰国し、自分と同じく古美術に関心の深い甥の次郎のもとにやって来る。重傷を負った義隆の最期をみとりその報告にきたのだが、直接お鏡に伝えるのをはばかり次郎に相談しに来たのだった。頼母はもう六十歳を過ぎていた。

頼母は次郎に「支那の女をめとり、骨董をいじりながら、貧乏だが気楽な生活をしてきたが、古代中国の研究に身を捧げてきたことに悔いはない」と話す。義隆の死については、おいおい戦死公報が届くので、それまではお鏡祖母さまには伏せておくことになった。

米寿のお祝いはお鏡の家で行われた。頼母がやってきて、「母上、申し訳ございません」と白髪まじりの頭を下げると、お鏡は「義隆が自分の代わりにお前を寄こしてくれたのですね」と答える。孫や曾孫たちに囲まれて米寿の祝いは賑やかに滞りなくすむが、

お鏡には最愛の孫義隆がもうこの世にいないことがわかっていた。その夜遅く、「義隆戦死」の電報が届く。

非戦への思い

『お鏡お祖母さま』は、支那事変下の銃後の女性たちの赤裸々な気持ちや日々の暮らしをたんたんと描いたものだが、アメリカやイギリスで好評を博した。そこには戦争で苦しむのはいつも女性であり、それは世界共通だという認識があった。

翌昭和十六年（一九四一年）四月、『お鏡お祖母さま』は実業之日本社から単行本として出版された[註8]。日米戦争勃発の八ヵ月前である。

翻訳者の大岩美代は、「訳者序」でこう書いている。

「この本は、御維新（ごいっしん）前に成人し、昭和の日支事変下に米寿を迎える一人のお祖母さまの心の世界、即ち、昔ながらの日本的なものを固く身内に保持し、目まぐるしい世の変転に目をみはりながらも、事変下の非常時局を認識し、国策に順応する一人のお祖母さまの心の動きを描いた小説である。（中略）普通には『武士の娘』が夫人の半自伝的小説と云われているが、この『お鏡お祖母さま』こそ、ようやくお年も老境に向われた夫人の気持ちを

表現したもので、夫人の精神的自伝と云えないであろうか」

またこの本の海外の反響について、こう伝えている。

「この小説を特徴づけているものは、事変下の東京の有様がよく描けている点である。日本人の一般からみればまことにありふれた針仕事、座敷、玄関、台所、東京市内の風景、儀礼の数々がことこまかに記されているが、これ等もまた、わが国の姿を外人に伝えるよき方便であろう。非常に沢山の事実が織り込まれていながら、何の混乱もなく面白く読み続けられ、ニューヨーク・タイムズが『支那事変を扱った作家はパール・バック、ヴィッキイ・バウム等かなりあるが、彼らは皆、中国側の観点に立って書いている。従って、全く日本の観点に立って書かれたこの本は親しみがある作品である。これは戦時日本を扱った作品として米国で出版された最初の小説である』となし『心を惹く作品』として推奨したのも、うなずけるのである」[註9]

大岩はさらにこう書いている。「ニューヨーク・タイムズ、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューンのごとき大新聞のほか、多くの地方新聞がこの小説を紹介し、遂に一九四〇年夏季のベスト・セラーズの一つとなったことは、われわれ日本人の誇りであろう」

ちなみに米国の一九四〇年の「年間ベストテン」に入った本は、鉞子の親友であるクリ

ストファー・モーレー『キティ・フォイル』、アーネスト・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』、ジョン・スタインベック『怒りの葡萄』等がある。『お鏡お祖母さま』が夏季だけとはいえベストセラーになったことは、鉞子にとって『武士の娘』出版以来の大きな喜びだったであろう。

またドイツ空軍の空襲下にあった英国の『ロンドン・タイムズ』紙（一九四〇年十月十二日付）は、「この本は支那事変下の日本の家庭を描いたものだが、すべての挿話を通してお鏡お祖母さまの聡明で真っすぐなそして頑固な性格が家宝の日本刀の刃のように輝いている」と賞賛している。

日本人の大半は国策に順応する。それは昔も今も変わらない。主人公のお鏡お祖母さまは、お国を信じ国策に順応する大半の普通の日本人の一人である。その代償は最愛の孫義隆の戦死である。お鏡は涙も見せない。弁解もしない。運命を受容するだけである。

だが、この本のなかにこんなくだりがある。「彼女」とはお鏡の孫娘の一人である。

「この戦争！　と彼女は心の中で云った。両国（日本と中国）とも、宣戦布告はしていないけれども、この事変は確かに戦争であったので、彼女はこう云った。二、三日前、彼女が家路を急いでいた時、厳かな兵士の行列に出会った。兵の顔には悲しみの色濃く、各

自戦友の骨を納めた白木の箱を携えていた。思い出しても胸の迫る光景であった。文化の高い国民同士がどうして戦わなければならないのであろうか？戦争は決して両国の仲を温めるものではないのではないだろうか？何故？　何故？　何故？　彼女の理解出来ないことであった！　彼女の下駄の音までが、この何故何故何故を云い返しているようにコツコツと歩道に響いた」（杉本鉞子『お鏡お祖母さま』大岩美代訳、「八、結納の日」）

杉本鉞子は、戊辰戦争のさい長岡藩で非戦の立場に殉じた父稲垣平助の思いを受け継いでいた。鉞子は「非戦」という言葉を発したことは一度もないが、『お鏡お祖母さま』を虚心坦懐に読んでいると、底に流れる鉞子の非戦の思いが伝わってくる。

鉞子は「文化の力」も信じていた。その思いは、文化関係の仕事を選んだお鏡の二男頼母や孫の次郎に託されている。お鏡は四十年ぶりに帰って来た息子の頼母に会って、軍人でなくとも、どんな職業についた人間にも「さむらい」の精神があることを知るのである。鉞子は作品のなかですべてを問うた。『お鏡お祖母さま』の底流には、人間愛、家族愛、日々の生活の大切さ、そして人間の絆の大切さ、という世界共通の価値観がつらぬかれている。『武士の娘』の底流にある基本的な考え方と変わらないのである。

中国との泥沼の戦争のさなか、そして第二次世界大戦が始まり日米戦争勃発の危機が迫りつつあったときに、国内ばかりでなく海外で（それも敵国にならんとする米英で）賞賛をうけた日本人の書がほかにあっただろうか？

［註1］　Etsu Inagaki Sugimoto Papers 1931-1949（ニューヨーク公共図書館所蔵）

［註2］　杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（3）」（『婦人之友』昭和十五年三月号）より。なおテニスンの〝Crossing the Bar〟は、一般に「砂州を越えて」と訳されている。

［註3］　故フローレンス・ウイルソン一周忌にあたり鉞子が友人たちに送った小冊子（昭和八年十月）

［註4］　杉本鉞子「〝武士の娘〟の見たアメリカ（3）」（『婦人之友』昭和十五年三月号）

［註5］　「編集室日記」（『婦人之友』昭和十五年一月号）。山室（のちに渡）善子は日本救世軍の創立者山室軍平の娘。

［註6］　『回想八十年　清岡暎一君聴き書』社団法人福澤諭吉協会、平成元年

［註7］　九条武子は西本願寺法王大谷光尊の娘。大正時代の歌人、社会事業家。明治四十二年九条良致と結婚して渡英、慈善病院や孤児院などを視察して帰国。佐佐木信綱に和歌を学ぶ。関東大震災（大正十二年）では築地本願寺の救護施設、上野公園の託児所の設置など負傷者や孤児の救援活動に尽力した。

［註8］　日本版の方は、「杉本鉞子、F．ウエルズ共著」となっている。その真意は計りかねるが、恐らく原著に自分の名を一切出してもらえなかったウエルズの強い不満に対して、鉞子が応えたものであろう。鉞子が亡くなってからであるが、ウエルズは「私の名前は画面に表示されなかった」「私は杉本夫人のゴースト・ライターである」「私が彼女の本を書いた、書くのは喜びだった」といったメモを残しているという（平川節子「アメリカと日本における杉本鉞子の『武士の娘』」『比較文学研究』63号、恒文社、一九九三年）。

［註9］　大岩美代が引用した『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事は、一九四〇年五月十二日のブック・レビューに掲載されたもので、訳者序では日付が間違っている。引用部分は筆者が一部加筆・補足した。

第十章　鉞子が遺したこと

『武士の娘』日本語版出版

昭和十六年（一九四一年）十二月八日未明、日本軍は真珠湾を奇襲攻撃し、アメリカとの戦争に突入した。花野は、その日、鉞子が東京から神戸に電話してきて、「花野、これは破滅のはじまりだよ」と言ったことを鮮烈に覚えている。また、千代野によれば、戦争がはじまったとき、「非国民」を摘発する特高（特別高等警察）[註1]が鉞子の身辺を洗っていたという。アメリカ人との幅広い交友関係が疑われたのである。

そのころ鉞子は、大岩美代がすすめる『武士の娘』の翻訳に協力している最中だった。鉞子はもともと『武士の娘』の日本語版にはあまり乗り気ではなかったのだが、『お鏡お祖母さま』で実証された大岩美代の翻訳の素晴らしさに感心して同意したのである。それに日本とアメリカの急速な関係悪化の事態を目の前にして、日本人のアメリカ理解の一助になればとも考えていた。戦争がはじまり、それはすでに遅きに失したのだが、『武士の娘』の翻訳は続けられていた。

大岩美代は、あらかじめ翻訳原稿を鉞子の元に送り、毎週月曜日に鉞子の家を訪れて、内容や言葉の表現について検討しあったという。杉本鉞子から大岩美代宛の「昭和十六年

十二月二十二日（月曜日）夕」付のハガキが残っている。

「今日いつくるかと心待ちにすぎました。もしお風邪でも召されたかと御案じ申し上げております」という内容であるが、毎週月曜日にやってくる大岩美代が、この日やってこなかったことを心配して出したものである。のちに大岩美代はこう書いている。

「訳出にあたりましては、杉本夫人が手をとらんばかりに導いて下さいました。御高齢をもおいといなく、前以て送り届けておきました原稿を毎月曜日私と交互に音読して下さり、細々と御教え下さいました。朝早くからお掃きよめられたお部屋で夫人とこうして勉強しましたことは、私には生涯忘れられない思い出となりましょう」[註2]

こうしてあの独特の美しい日本語訳が完成した。ただし鉞子はクリストファー・モーレーの序文は最初から除いておいた。いくらなんでも敵国のアメリカ人がほめている内容を訳すわけにはいかなかったからである。だが、『武士の娘』の出版は引き受け手がいなかった。

大岩美代は、夫の親友であり、英文学者で作家の阿部知二（ともじ）に相談した。以前から『武士の娘』を高く評価していた阿部知二は、旧知の長崎次郎に相談し、出版を承諾してもらった。長崎次郎が、検閲官の許可をとって当時統制下にあった印刷用紙の配給をうけ、出版

にこぎつけたのは、昭和十八年二月のことだった。まさに日米戦争の真っ最中である。阿部知二は、南方へ出征する直前に、兵舎で序文を書いた。出版物に目を光らせていた検閲官の心証を良くするために考え抜かれた実に巧妙な序文であった。

「この『武士の娘』は文字通りアメリカと欧州との読書界に喧伝された名作である。昨年、同じ訳者によって紹介された小説『お鏡お祖母さま』は、日本婦人の精神の姿を伝えるものとして、多くの心ある愛読者を得た。さてこの『武士の娘』は『お鏡お祖母さま』よりも遥かに前に書かれたところの自伝的物語であり、女史の名を欧米にひろく伝えた主作品である」

と書き出しているが、次にこうも書いている。

「(『武士の娘』という)一つの美しい真摯な魂は荒波の中を泳ぎ進みながら、アメリカ文明の真只中に飛び込んで行った。もとよりその時代の人として、この太平洋をへだてた二つの文明が、いかに結びつき融け合い得るかということを、その魂に課せられた至難な課題として受取った。これは、過去に於いて我々がいかに正しかったか、ということを示す大きな歴史的証左である。(中略)(だが)このような心の持主の努力も空しく、戦はいま始まった[註3]」

空襲下の神戸

『武士の娘』の翻訳が完成したあと、鉞子は病に倒れた。悪性の気管支炎だった。だが、千代野は、母が病気になったのは、「母が最も愛していた二つの国が相戦うという悲しみに打ちひしがれたからだ」と思った。大岩美代と『武士の娘』の翻訳にかかわっていたときはまだ気がはりつめていたのだが、日本とアメリカが戦っているという現実は、ひしひしと鉞子の心を引き裂いていたのだった。鉞子は、慶応病院に入院した。

三ヵ月以上入院していたが、退院して青山の自宅に帰っても一人暮らしになるので、神戸に住む花野がひきとることになった（千代野は清岡の両親と同居していた）。

鉞子は病院が世話した救急車に乗って、東京駅へ向かった。途中、鉞子は皇居の前を通るように頼み、窓から手を合わせて祈っていたという。彼女は二度と東京には戻れぬことを覚悟していたのである。花野には三人の息子と一人の娘がおり、戦争中鉞子はこの四人の孫たちと一緒に、ずっと神戸で暮らすことになるのである。

昭和十九年（一九四四年）、マリアナ諸島（サイパン、グアム、テニアン島）を占領したアメリカ軍は、日本本土への爆撃を計画し、秋になるとB29による偵察飛行を開始した。翌

昭和二十年が明けると、東京、名古屋、神戸の軍需工場や工業地域への爆撃がはじまった。そして都市の市街地にも焼夷弾が投下されるようになった。

神戸への空襲がはじまると、鉞子は六甲山の小寺家の別荘に移り住んだ。六甲山からは神戸爆撃の様子が手にとるように見えた。そのころ鉞子が千代野にあてた手紙がある（「千代野回想記」より）。

「この手紙をいま懐中電灯の明かりで書いております。一部は真っ暗闇のなかで書くことになるのでしょう。ここでは夜間は完全に灯火禁止です。この手紙があなたのところへ届けばいいのですが。たったいま神戸上空に、五百機あまりの爆撃機の編隊が飛来してきており、爆弾投下の音が響いてきております。私は、アメリカと日本が再び友人同士になる日が来るように祈っております。私のこの願いは、恐らく私が死んだあと、いまから百年もしてから、かなえられることかもしれませんが、生きている限り私はその日がくることを祈り続けたいと思います」

東京では昭和二十年五月二十五日夜の山の手方面（渋谷、青山など）への空襲で、南青山の鉞子の借家は全焼し、白金の清岡家の屋敷も、玄関口の門とおかかえの運転手が宿泊するのに使っていた小さな家屋を除き、すべて焼失した。清岡暎一・千代野夫妻は熱海の

別荘に避難していたので無事だった。鉞子が南青山の家に残してきた資料やメモなどは全て焼失した。

『菊と刀』への影響

そのころ、対戦国アメリカでは、すでに日本の敗北を確信し、想定される日本の占領統治に関する研究が進められていた。コロンビア大学教授の文化人類学者ルース・ベネディクトは軍の要請をうけて、戦時情報局の海外情報部基礎分析班主任として、日本研究に従事していた。

その研究成果をもとに、ベネディクトは、エリザ・シドモアの著書からほぼ五十年後、シドモアとほぼ同じ問題意識をかかげて、『菊と刀』を書く[註4]。ルース・ベネディクトは、『菊と刀』の冒頭で、

「アメリカ合衆国が全面戦争で戦った敵のなかで、日本人ほど異質な民族（エイリアン）はいない。行動や思考においてこれほど著しく異なった習慣をもっているような民族とは、これまで戦ったことはなかったのである」（筆者訳）

と書きはじめているが、次に展開する「相矛盾する日本人の性格」論は、五十年前のエ

リザ・シドモアの本に書かれていることにそっくりである。

「我々が直面した困難は、並大抵ではなかった。日本が鎖国から開国に踏み切ってから七十五年間、日本人を語る際に、『しかしながらまた（but also）』という異様な言い回しが、世界中どこの国民について語るときよりも頻繁に使われてきたのである。例えば、『日本人ほど礼儀正しい国民はいない』と述べながら、『しかしながらまた、日本人は横柄で威張りたがる国民でもある』と付け加える。『日本人は忠実で寛大な国民である』といいながら、『しかしながらまた、彼らは平気で裏切るし意地悪でもある』という。（中略）これらの矛盾はすべて日本に関する書物の縦糸と横糸であり、どちらも真実なのである。刀も菊も、同じ日本像の一部である。日本人は、最高のレベルにおいて、攻撃的でもあり非攻撃的でもある。軍国主義者でもあり耽美主義者でもある。横柄でありながら礼儀正しい。硬直的であるが融通もきく。柔順でありながら、押しつけられると怒り出す。忠実であるが裏切りもする。勇敢であり臆病でもある。保守的であるが、新しいやり方を快く受け入れる」（同前）

明治になって西欧人のあいだでほぼ常識となった「不可解で矛盾に満ちた日本人」という問題意識が、再び脚光をあびるのである。この問題意識から、エリザ・シドモアは、明

治時代後期に『シドモア日本紀行』（改訂一九〇二年）を書き、そして昭和の日米戦争終結時にルース・ベネディクトは、『菊と刀』（一九四六年）を書いた。そのちょうど中間に、杉本鉞子の『武士の娘』（一九二五年）が位置している。「日露戦争」と「日米戦争」という二つの戦争のはざまといってもいいかもしれない。そのはざまに、「不可解で矛盾に満ちた日本人」ではない「期待される日本人像」が描かれ、輝きをはなっていたのである。

ルース・ベネディクトと杉本鉞子の接点は、コロンビア大学にあったことは前述した。一九二〇年代半ば、二人ともコロンビア大学で非常勤講師をしている。一九二五年十二月『武士の娘』が出版され好評を博したとき、ベネディクトはこの本から貴重な示唆をうけた。

数年後、ベネディクトはコロンビア大学准教授となり、『文化の型』（*Patterns of Culture*, 1934）という名著を書き、あらゆる民族は固有個別の文化をもつという「文化の多様性」を論じた。「文化の多様性」理論は、今日では常識となっているが、西洋文明の優越性、あるいは、ピューリタン的な不寛容という考え方がまだ色濃く残っていた当時、大きな反響を呼んだ。

ベネディクトの『菊と刀』（及び前著の『日本人の行動パターン』）は、来たるべき日本占

領に際して、アメリカ当局者に、「これまで戦った敵のなかで最も不可解な国民」である日本人の考え方や行動のパターンについての基礎知識を与えるために書かれた。カリフォルニアにあった秘密のトレイシー捕虜収容所で日本軍兵士の捕虜から聞き出した厖大な証言記録も重要な参考資料となった（中田整一『トレイシー・日本兵捕虜秘密尋問所』講談社）。

ベネディクトは、捕虜になることを恥とする日本兵が、捕虜になると国家機密を平気で証言する不可解さについても分析している。

当時ベネディクトがユニークだったのは、それぞれの民族には独自の歴史、慣習、宗教などから生まれる独自の文化の型があり、それと異なる文化をおしつけても受け入れられないどころか、あらたな摩擦や対立が生じると指摘したところにあった。彼女は、各民族の文化の差異を尊重することによってこそ世界の安全が保たれる、と強調したのである。

ベネディクトは、『菊と刀』の結論ともいうべき第十二章「子どもは学ぶ」では、杉本鉞子の『武士の娘』を根拠にして論じており、数ヵ所にわたって『武士の娘』の文章を引用している。

そして、日本人が「刀」に託した「自己責任」という美徳に大きな期待を寄せた。

「日本人は自己責任を、『身から出た錆』に責任をもつという言い方で説明している。自

分の体と刀を同一視するのである。刀を身につける者には刀の輝きを保つ責任があるように、各人は自分の行動の結果に対して責任を負わなければならない。（中略）

刀は侵略の象徴ではなく、理想をいだき自己責任をわきまえる人間の比喩である。個人の自由を尊重する時代にあって、社会のバランス（平衡）を保つ役割を果たすのは、なによりもこの自己責任という美徳である。この美徳は、日本人の子どもの養育や行動哲学を通じて、日本精神の一部として日本人の心に植えつけられてきたものである」（筆者訳）

ベネディクトは、「武士の刀」になぞらえて、日本人の「錆におかされやすい内なる刀」「自己責任」の美徳に期待する、というのである。ベネディクトの指摘は、杉本鉞子が『武士の娘』で描いた「期待される日本人像」の本質にも通じるものがある。

焼け野原の東京

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、天皇の終戦の詔勅を神戸で聞いた鉞子はその半年後、東京へ戻ってきた。混雑する列車から降りてきた鉞子は、七十歳を過ぎているはずなのに、力にみちあふれていた。鉞子は目を輝かせて迎えにきた千代野をじっと見つめ、「驚いた？　戻ってきたわよ」と言った。千代野は思わず涙がこぼれて止まらなかった。

鉞子と千代野はバスに乗って焼け野原のなかを通り、芝白金の近くで降りた。清岡の家は、古い門と小さな木造家屋（元運転手用の家）だけが焼けないで残っていた。暎一と千代野はそこに住んでいた。門の前まで来ると、鉞子は空を見上げて「まあ、なんと美しい空なのでしょう！」と言った。

戦後、千代野は夫の暎一が病気がちだったこともあって仕事を探した。たまたま家に近い白金三光町（しろがねさんこうちょう）に米軍が接収した「ハットリ・ハウス」といわれる邸宅があり、そこへ行って仕事がないか尋ねた。応対した門番のGIは、千代野の英語のうまさに感心し、将校に連絡した。千代野は通訳として採用された。[註5]

「ハットリ・ハウス」は、A級戦犯を裁く極東国際軍事裁判の判事や弁護士が駐在する宿舎兼事務所だった。戦前は服部時計店の創業一族の建物だったが、戦争中日本軍が接収して使用していたもので、戦後米軍が引き継いだのである。千代野の英語はほぼ完璧だったので、「ハットリ・ハウス」の将校たち（判事や弁護士）はやっと日本人と意思が通じると喜んだ。あるとき、千代野は極東国際軍事法廷の通訳を、給与は倍払うからと依頼されたが、それだけはことわった。神戸から鉞子が戻ってきたのは、そのころのことだった。

ある日、千代野の上司であるトーマス・モロー大佐がやって来て言った。

「私は日本の家族を一つだけ知っている。その名はスギモトといい、私の故郷のシンシナティで知らないものはいない。スギモトはウイルソン家の人たちと住んでいた」

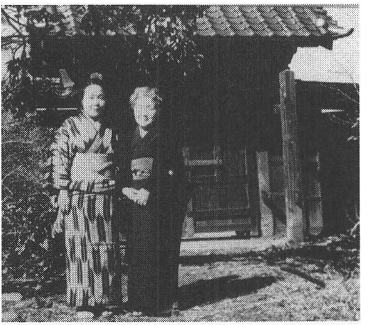
千代野の胸はたかなった。「それは私が結婚する前の名前です。私はシンシナティで生まれ、カレッジ・ヒルのウイルソン家の一族の家で暮らしていました」

モロー大佐はびっくりして、「何だって！　それは驚いた。お母さんは元気か？」と尋ねると、「はい、母はちょうど神戸から戻ってきたところです」と千代野は答えた。

モロー大佐は言った。「お母さんによろしく。今晩、仕事の帰りにおたずねしたい」

その晩、モロー大佐が家の前に来て、門前で鉞子と会い、しばらく話し合っていた。当時、米軍人は日本の個人住宅を訪問してはならないという規則があったので、門の外で会ったのである。鉞子はシンシナティの古い友人に会い、目が輝き本当に嬉しそうであった。その後、大佐の息子トーマス・モロー・ジュニア中尉も鉞子を訪ねて来た。

トーマス・モローは、一八八五年シンシナティで生まれ、シンシナティ大学法学部を卒業。弁護士、検事、判事に従事したのち、戦後来日し、極東国際軍事法廷の検事補を務めた。鉞子が通っていたカレッジ・ヒルのグレース教会（メソジスト監督教会）のメンバーで、若いころ、しばしば鉞子とその家族に会う機会があった。モロー大佐は帰国後、一九



焼け残った清岡邸の門前にて。千代野と鉞子

五〇年に死亡している。

その後、鉞子に面会を求めるアメリカ人がひきもきらなかった。ついこの前まで血を流して戦っていた敵国の人間が会いたがった日本人というのは、当時、恐らく杉本鉞子のほかにはあまりいなかったであろう。

ジョン・マギー牧師もその一人だった。彼は米国聖公会伝道団の宣教師として三十年近く中華民国の南京地区などで活動し、一九三七年（昭和十二年）十二月日本軍の南京占領の際、現場に居合わせた。戦後、彼は南京虐殺事件の証言者として極東国際軍事裁判（東京裁判）の証言台に立つ。だがマギー牧師は、宿舎で「埴生（はにゅう）の宿」や「なつかしのヴァージニア」など欧米の民謡を楽しそうに歌い、毎朝いつも机にきれいな花を飾ってくれる日本人従業員に接するなかで、「日本人を告発したことは果たして正しかったのか」と、心がゆらぐときがあった。牧師は杉本鉞子に会いに行った。若いころ日本人を知るために読んで感銘をうけた『武士の娘』の作者にその疑問を問いたかっ

たのである。

このとき鉞子はマギーにこう語ったという。「マギー牧師さん、おのれを疑い自問することほど大切なことはないでしょう。それがなくては世界を行き来することはできませんもの」その後マギー牧師は帰国前に鉞子をもう一度訪ね、「私と妻はあなたのような方と是非またお会いしたい」と言い残して去った。[註6]

アメリカの友人たちとの再会

杉本鉞子の文学上の恩師であり友人だったクリストファー・モーレーは、昭和二十二年（一九四七年）一月、秘書のエリザベス・ウインスペアーが赤十字の仕事で日本へ行くとき、鉞子の安否を調べるよう依頼した。ウインスペアーは東京で鉞子の住居を捜し出し、九月三日夜に訪ねてきた。ウインスペアーは鉞子の様子をモーレーにこう伝えている。

「杉本夫人は、空襲で全焼した娘夫婦の屋敷のなかで唯一焼け残った運転手用の小さな家に住んでいました。彼女の本が間もなく再版されるようだと伝えると、あのかわいらしい老婦人は、それはそれはとても喜んでいました。彼女のために、貴方の力添えで再版本と著作権料を送るようダブルディ出版社に交渉してあげてください」[註7]



清岡宅でのパーティー。左端が鉞子。右に暎一・千代野夫妻（『婦人之友』昭和23年6月号）

翌日、鉞子は大岩美代に『武士の娘』再版の喜びを伝えている。

「ようやく凌ぎ良き秋に入りまして御座います。さて昨日は親切なる友人がニューヨークの新聞切抜きをもってきてくれました。それによりますれば、かねて貴女より暖かい御同情をよせて下されました『武士の娘』は、ダブルディ会社創立記念（五十周年）出版として、今日（一九四七年九月四日）再出版されることに相成りました。私も老年の花咲き媼のよろこびを感じます」（杉本鉞子から大岩美代へ、昭和二十二年九月四日付）

敵国として戦ったアメリカで『武士の娘』の評価は変わっていなかったのである。数ヵ月後、クリストファー・モーレーの尽力で、鉞子のもとへダブルディ社から再版された『武士の娘』と著作権料が届いた。鉞子は仲介の労をとってくれたウインスペアーに感謝の手紙を出している。

「この二ヵ月あまり病床にふしておりました。アメリカでは病気らしい病気をすることも

ありませんでしたのに、日本に戻ってから気管支炎にかかり、今回で四度目です。日本の自暴自棄の所為ではないかと思いたくなります。（中略）ダブルディから『武士の娘』十二冊が送られてきました。これこそほんとうに貴女さまのお蔭です。この本に再び出合えて、とても嬉しくて仕方ありません。まるで私の心の世界に娘たちがよみがえってきたような気持ちです。モーレー御夫妻にはくれぐれもよろしくお伝えくださいませ」[註8]

鉞子の喜びようが手にとるように伝わってくる。

ある日、鉞子と千代野は、マッカーサー元帥の側近で第八軍司令官のロバート・アイケルバーガー将軍夫妻から午餐に招かれた。第八軍司令部は横浜にあり、将軍の専用車が鉞子たちを迎えにきた。「アイケルバーガー将軍は私の友人のなかでも本当に敬意と尊敬にあたいする方です」と、鉞子は書いている。[註9]

将軍はオハイオ州の出身で、アメリカで知り合ったとき、「勇気あるサムライの部隊を一度でもいいから指揮してみたい」と語っていたという。午餐では、シンシナティ時代の思い出話や『武士の娘』のことなど、話がつきなかった（将軍はその後、占領政策をめぐってマッカーサー総司令官と意見が対立し、昭和二十三年九月離日し、翌年一月退役している）。

午餐のあと、鉞子と千代野は将軍の専用車で家まで送ってもらった。その途中、車に弱い鉞子は吐き気をもよおしたので、車を停めてもらった。鉞子は我慢しきれず、付き添いのトムリンソン大尉が渡してくれた新聞紙に、午餐のご馳走をすべて吐いてしまった。大尉は厭な顔ひとつせず、その新聞紙をつつんで道路わきのゴミ箱に棄てに行った。大尉はしばらくゴミ箱の中を覗いていたが、その中から何かを拾ってハンカチにつつみ、戻ってきた。大尉はそれを丁重に鉞子に渡したが、それは鉞子の入れ歯だった。鉞子と千代野は、トムリンソン大尉の優しい紳士的な態度に感激した。

その後も、かつて『武士の娘』を読んで感銘を受けたという多くのアメリカ人やイギリス人が、鉞子を訪ねてきた。清岡暎一・千代野夫妻の家の狭い客間は、時にはまるでサロンのように賑わった。

なかでも、グレース・アレンとの再会ほど、鉞子にとって忘れがたいものはなかった。グレース・アレンは、鉞子がシンシナティで暮らしていたときからの知り合いだった。

シンシナティ・ベル電話会社の社長だった夫のアーチボルド・アレンが、戦後、占領軍の電信電話部門の幹部として日本へ派遣されたとき、グレースも一緒だった。グレースは鉞子の居所をさがして、早速訪ねてきた。鉞子とアレン夫妻の交友が再開した。

アレン夫妻は週に一度、黄色いオープンカーのルースターに乗ってやってきて、鉞子をドライブに誘った。駒込の六義園（りくぎえん）が彼らのお好みの場所だった。夫妻はいつも鉞子のために卵、ミルク、アイスクリーム、パン、バター、缶詰などをつめた大きなボックスをもってきた。食品が不足していた当時、何よりの贈り物であったが、鉞子は近所の人たちにおすそわけして大変喜ばれた。鉞子は、「これは困っている日本人へのアメリカ人の慈善のようなものだから、決して卑屈にならないように」と言っていたという。[註10]

アレン夫妻の滞日は三年近くに及んだが、別れ際グレースが鉞子に渡した書簡がある。

「一九四九年六月三日、親愛なる杉本夫人へ。

シンシナティのハーバート・シェーファー・ジュニアを紹介させてください。イェール大学を卒業し、このたび東京のナショナル・シティ銀行に勤めることになっています。ハーバートは魅力的な若者で、貴女はきっと好きになると思います。言うまでもなくハーバートも貴女を好きになることでしょう。間違いなく私にとっては、日本とは貴女のことですもの。（中略）私は誰にたいしても貴女のことばかり話してきました。きっと貴女の耳は焼け焦げてしまったのではないかしら？　いつも変わらぬ親愛をこめて。グレース・アレン」[註11]

グレースが東京に赴任する故郷の知り合いの若者を鉞子に紹介した書簡であるが、「私にとっては、日本とは貴女のことです」とまで書いてある。グレースと鉞子の深い親愛の情を感じさせる。このときグレースは六十歳、鉞子は七十七歳、亡くなる一年前のことだった。

青山墓地にともに眠る

戦後、鉞子が特に興味をもっていたのは、歌舞伎だった。

占領軍は、日本の封建的な伝統の象徴だとして、歌舞伎を奨励すべきではないという立場をとっていた。だが、戦後二年ほどして歌舞伎の上演が再開された。鉞子はよく観にいった。ある夜、上演の最中に停電になった。しかし、真っ暗闇のなか、義太夫はそのまま続けられていた。やがて舞台にろうそくが灯されたが、役者たちが暗くなった舞台でもずっと演技を続けていたことがわかった。鉞子はそのときの感動を千代野に語っている。

「私は突然老婆であることを忘れ、昔の雪国の少女にかえったような気持ちになりました。幸四郎の演技は本当に素晴らしいものでした。役者たちは皆、舞台で死んでもいいのだ、といったように演じておりました。舞台は彼らにとって戦場なのです。ですから、その戦場でたとえ死んだとしても、彼らには名誉なことだったでしょう」[註12]

鉞子は、台本をはじめさまざまな歌舞伎関係の資料を集めていて、日本文化の真髄としての歌舞伎について書くつもりだったという。だが、それはかなわなかった。鉞子はこのときすでにガンにおかされていた。

昭和二十五年（一九五〇年）三月、鉞子が亡くなる三ヵ月ほど前、イギリスのハースト&ブラケット社から、『武士の娘』再版の知らせと再版の本二冊が届いた。アメリカに次いでイギリスでも、戦後になって『武士の娘』が再版されたのである。すでに病床にあった鉞子にとって、これほど嬉しいことはなかった。当時の新聞が伝えている。

「日本娘とサクラの花のカバーに包まれた



杉本松雄・鉞子の墓のとなりにフローレンス・ウイルソンは眠る（東京・青山墓地。撮影／金澤智康）。晩年の鉞子

美しいこの本を手にとって、四日同女史（杉本鉞子）は『私の本が再版されて広く世界の若い方に読まれるのはうれしいことです、今の日本の若い方にもゼヒ（原文のママ）読んでいただきたい、世界で最も封建的といわれる日本のサムライの娘の物語にも民主主義の人々の心をうつ何ものかがあるのです』と語っていた」（『朝日新聞』昭和二十五年六月四日付）

昭和二十五年春、鉞子は入院した。すでにガンの末期で手のほどこしようがなかった。このときつきそった看護婦は、「この方はどんなに痛んでも黙って耐えておられました。こんな患者さんは今まで見たことがありません。普通どんなに精神が強くても肉体を支配することはできないものですが、この方は精神と肉体が一体のようでありました」と千代野に語っている。[註13]

鉞子は退院して、清岡の家で病苦と戦っていた。もうだれにも会わなかったが、見舞いに来た甥の稲垣重政にだけは面会した。そのとき鉞子は黒紋付きに着替えて蒲団のうえに座っていたという。[註14]

六月二十日夜、杉本鉞子は静かに息をひきとった。享年七十八であった。

残された鉞子の預金通帳に一万円が記帳されてあった。それは清岡暎一が三年ほど前に

小遣いとして鉞子に贈ったお金だった。鉞子は通帳に記帳したまま、一銭も使っていなかったのである。

葬儀は、青山の聖アンデレ教会でおこなわれた。戦争中、信条をまげることを拒んだために投獄されていたヒデトシ・アイザーク・ノッセ牧師が主宰した。参列者は清岡映一・千代野夫妻、小寺敬一・花野夫妻と長男敬成、それにごく限られた友人たちだけで、鉞子が望んでいたような質素な葬儀であった。

鉞子は青山墓地にある夫杉本松之助（松雄）の墓に葬られた。そのすぐわきにフローレンス・ミルズ・ウイルソンも眠っている。

［註1］　BUT THE SHIPS ARE SAILING—SAILING by CHIYONO SUGIMOTO KIYOOKA, THE HOKUSEIDO PRESS, Dec. 29, 1959（以下引用する場合は「千代野回想記」と表記、筆者訳）による。この回想記は、鉞子の死後、アメリカの鉞子の友人たちからよせられた「戦中戦後の鉞子の暮らしについて知りたい」という強い要望にこたえて書かれた。

［註2］　日本語版『武士の娘』訳者あとがき、長崎書店、昭和十八年

［註3］　日本語版『武士の娘』序（阿部知二）、同右。戦後、阿部知二はその苦心談を語っている（『世界ノンフィクション全集8』あとがき、筑摩書房、昭和三十五年）。

［註4］ Ruth Benedict, The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture, Mariner Books, 1946

［註5］「千代野回想記」

［註6］「千代野回想記」

［註7］ From E.Winspear To C. Morley, 10 September 1947 (Haverford College Library Special Collections)

［註8］ 杉本鉞子からウインスペアーへの手紙、一九四八年七月七日 (Haverford College Library Special Collections)

［註9］ 註8と同じ。

［註10］「千代野回想記」

［註11］ この書簡は鉞子が所持していた『お鏡お祖母さま』の本にはさんであった。鉞子が亡くなったあと、そのまま清岡家の本棚に入っていたと思われる。その本を人づてに筆者が借りて、偶然見つけたものである。

［註12］「千代野回想記」

［註13］「千代野回想記」

［註14］ 鉞子は生涯兄央のことが心配で、その面倒をよくみた甥の重政に特別な心情をよせていた。

終　章　黒船（The Black Ships）

一九五五（昭和三十年）年九月、鉞子が亡くなって五年後のことだが、ミシガン大学の大学院で社会福祉学を学んでいた鉞子の孫にあたる二十四歳の小寺郁子（長女花野の娘）は、夏休み旅行を計画したとき、母からオハイオ州シンシナティに立ち寄るようすすめられた。シンシナティは祖母の鉞子がアメリカへ行って結婚し、二人の娘を産んだ場所である。

仲良しの友人を伴ってシンシナティを訪ねた郁子は、高級住宅地ハイド・パークのローラ・ローウイル夫人の家に泊めてもらい、手厚いもてなしを受けた。家の裏庭にはプールがあって、友人と毎日のようにのんびり泳いで過ごした。連日、祖母鉞子や母花野と親しかった多勢の人たちからお茶や食事に招かれた。皆、六十代から八十代の明るく元気のいい婦人たちだった。彼らは、皆そろって、つつましく教養ある「武士の娘」杉本鉞子とその家族と交流したときのことを懐かしそうに話すのであった。一週間ほどの滞在だったが、郁子は、母花野に宛てた手紙で「まるで女王様のような生活でした」と書き送っている。郁子は、鉞子のアメリカ人との交友の深さにあらためて驚いた。

このときに、グレース・アレンが、郁子の母小寺花野に出した手紙がある。

「水曜日の午後、ローウイル夫人の家で開かれたティー・パーティーで、あなたの魅力あ

るお嬢さんに会えて本当に嬉しかったわ。パーティーには、十人あまりの人たちが集まりました。みんな貴女のご家族を賞賛する友人たちばかりです。あなたの親愛なる母上（鉞子）とそのご家族にお会いできたことは、私の人生をいろどるハイライトのひとつなのです。いつも感謝をこめて、グレース・アレン」（一九五五年九月十六日付）

鉞子がシンシナティではぐくんだアメリカ人との交流の絆は、戦争による四年間の断絶をくぐりぬけて、祖母、母、孫へと三代にわたって生きていたのである。

鉞子は、『武士の娘』の最終章を「黒船」としている。

本が書かれたとき、日本に開国を迫った一八五三年のペリーの黒船来航から七十二年が経っていた。このとき鉞子は、迫り来る日米衝突の予感を記していた。

「赤ら顔の異人さんも、神國日本の人々も、今尚、互いの心を理解しおうてはおりませず、この秘密は今も尚かくされたままになっておりますが、船の往来は今なお絶えることもございません。絶えることもございません」

「この秘密」とは、鉞子がアメリカで暮らして知ることができた「西洋も東洋も人情（こころ）に変わりない」ということである。しかし、西洋でも東洋でも、大方の人たちにそれは理解されていない。本当は秘密でも何でもないのだが、言語の違いや文化の違いとい

う壁にさえぎられて、わかりあえないのである。それ故に「知られざる秘密」のままなのだ。それがわからないためにお互いに疑心暗鬼を生み、誤解を生む。

鉞子は「日本の人情（こころ）」を描いた。そして、図らずも、世界で永続すべき日本人像の原点を描いていた。それは、黒船によって開かれた世界のなかの日本が、世界に向けて発信する日本人像であった。

鉞子は、「黒船以来日本人は商売人（tradesmen）のようなことばかりいうようになった」と嘆く祖母の言葉も引用している。世界に発信するのは、物や金ではない。人なのである。そして人をつくるのは、日本の自然であり環境であり、文化であり歴史である。そこからはぐくまれた知恵であり教育である。鉞子はそれを言いたかったのだ。

鉞子が描いた日本人像の核をなすものを、敢えて一言で「開かれた武士道」「世界に通じる武士道」といえないこともない。ただし、「武士道」という言葉は、誤解を招きやすい。その解釈は、それこそピンからキリまであり、人によって全く異なる。それは「武士道」という言葉を世界にひろめた新渡戸稲造をも苦しめることになった。

新渡戸は、欧米人のキリスト教にあたるような、日本人の道徳の規範はなんなのか、を考え抜いた結果、「武士道」という言葉にたどりついた。「武士道」というものに、日本人

の心にしみついた「道徳的原理の掟（おきて）」が集約されていると考えたのである。それは武士にとどまらず商人や職人や農民のあいだにも受け入れられてきた道徳の規範であった。元はといえば、江戸時代に確立した武家社会にあって、武士の作法や生き方が論じられ定められてきたものだが、「武士道」という言葉の「成文法」があったわけではない。どちらかといえば、親から子へと、躾けや教育を通して伝えられてきたものだった。従って、人によって微妙に違ってくるのであるが、新渡戸がユニークだったのは、「武士道」の考え方を「聖書」や西洋思想、「論語」や東洋思想の原理と比較し、共通点や相違点を検討していることである。そのことによって初めて、「武士道」は、世界に開かれた物の考え方や人の生き方を支える道徳的な規範と理解されるようになった。

だが、「武士道」は、日露戦争のときは、連戦連勝の日本兵の強さやロシア人捕虜への寛大な対応を裏付ける日本人の道徳的規範として理解され賞賛されたのだが、日中戦争や日米戦争のときは、日本軍の侵略や残虐行為を説明する冷酷な日本精神とみなされるようになった。こうなると「武士道」とは、内輪の日本人にしか通用しない言葉になり、世界に発信する道徳的規範ではなくなる。

新渡戸稲造は、「武士道」という言葉が一人歩きをはじめて、都合がいいように解釈さ

れていく世の中の変化に苦悩した。新渡戸はのちに、武士道をつきつめていくと、いろいろの徳目はあるが、その根本は「恥を知る」「廉恥を重んずる」ということではないかと思う、といっている（「内観外望」『新渡戸稲造全集第六巻』教文館、昭和四十四年）。

武士として主君に不忠を働くのは恥だ、親に孝行をせぬのは恥だ、正義に反するのは恥だ、嘘をつくのは恥だ、ひとをだますのは恥だ等々、「武士道」のすべての徳目は、己を顧みて「恥を知る」ことに帰着するというのである。それは人間の品格といっていいかもしれない。世の中には、「武士道」の大切さを語りながら恥を知らぬ人が余りにも多い。新渡戸の指摘は実に的確である。杉本鉞子もこのことをよく理解していた。

鉞子が書いたのは、海外との交流が深まり激変していく明治の時代、長いあいだ日本社会の規範形成の中核にあった武士階級が滅んでいくなかで、家族の絆や人間の絆というものがどう変わっていくのか、変わらないのか、人間として失ってはならないものはなんなのか、という普遍的なテーマであった。権力と富を同時に失った元武士の家に生まれ、成人して日本とアメリカという二つの異質の世界のなかで精一杯生きた一人の女性の目を通して、変貌しつつある身のまわりの生活や人間関係を冷静に見続けているところに、『武士の娘』の魅力がある。だからこそこの本を読んだ人に深い感銘を与えたのだった。

しかし、銭子の願いも虚しく、日本は破局の道へ進んだ。そして今日、再び、日本は新たなる破局の危機に直面している。日本の文化と伝統、そして技術への過信がもたらす自然と環境の破壊という内なる破局である。

銭子の「黒船」の章は、いまだに不変の章であり、未完の章なのである。

あとがき

巻頭にかかげたように、クリストファー・モーレーは、「一冊の本物の本に出会うときは、恋におちるようなものである」という警句を遺(のこ)している。そのモーレーからすすめられて銈子が書いた『武士の娘』は、モーレーにとってまさに「恋におちるような本」の一冊だったのではないだろうか。モーレーは「彼女はこの本のなかで、あらゆる人間生活にまつわる絶妙な複雑さと美しさについて独特な描写をしている。彼女は偉大なる人生の教師なのだ。だからわたしは彼女の影を踏むようなことさえしたくない」とも書いている。モーレーは、「私は『三尺下って師の影を踏まず』という教えを小さいときから申しきかされて育ちました」という銈子の言葉を引用して、彼女への敬愛の念を表現したのであった。

杉本銈子について書くきっかけは五年ほど前、会津藩家老の娘大山（旧姓山川）捨松(すてまつ)の曾孫にあたる久野明子さんのお宅に伺ったときである。そのころ私はフリーのプロデュー

サーとして、海外に出て人生が変わり日本を変えた幕末明治の群像を描くミニシリーズの企画制作にあたっていた。中村正直、大久保利通、新渡戸稲造など二十五人をとりあげたが、そのなかに大山捨松、津田梅子、山田わかの女性三人が入っていた（二〇〇八～〇九年NHK総合テレビ『プロジェクト・ジャパン～世界と出会った日本人～』で放映）。久野さんを訪ねたのは米国留学時代の捨松の写真を借りるためだった。

そのときに久野さんが不満そうに「なぜ女性はたった三人なのか」と言った。人選に苦労していた私は「いろいろ調べたのですが企画にあう女性がいなかったからです」と答えた。すると久野さんは「まだいるはずだ。『武士の娘』を書いた杉本鉞子とか」と言われた。早速私は『武士の娘』を読み、鉞子の経歴を調べてみた。私はそれまでこの本を読んだことがなかったばかりか、鉞子が私の生まれ故郷である長岡の出身であることさえ知らなかったのである。私は恥ずかしいとさえ思った。それから鉞子の取材をはじめた。しかし鉞子について書くには大きな壁があった。

杉本鉞子は、手記や日記のたぐいは全くといっていいほど遺していない。日米にまたがる四回にわたる引っ越し、そして東京の空襲などによって、その大部分は失われたものと思われる。それだけに鉞子の生涯を描くのは至難の業であった。わずかに遺っている手紙

や雑誌に寄稿したエッセー、鉞子の二人の娘や友人たちの回想などを最大限に活用するしかなかった。そして自伝である『武士の娘』が最大の手がかりなのであるが、『武士の娘』は「自伝的小説」ともいわれるようにさまざまな脚色がほどこされている。なぜ彼女がそうしたかについては、私なりの解釈や推理を行った。したがってこの本に書いたことはすべて筆者の責任である。

この本を書くにあたりいろいろの方からご尽力をえた。本書でもふれたように、戊辰戦争百周年（一九六八年）前後から新潟県長岡市では長岡藩や戊辰戦争に関する史料集や研究書が次々に公刊されていた。膨大な書名リストは割愛するが、鉞子の生い立ちや『武士の娘』の時代的な背景については、それらが基本的な参考文献となった。なかでも郷土史研究家内山喜助、高鳥一男、吉沢俊夫、稲川明雄諸先生の御論考から得るものが多かった。また長年杉本鉞子の研究に尽くしてこられた佐々木佳子、石坂節子、青柳保子、長岡市立科学博物館歴史研究室学芸員広井造各氏ほか多くの方々から貴重な資料や文献を見せていただいた。また取材上で助力をおしまなかった樋口栄治氏（N-Brains 代表、前長岡商工会議所専務理事）ご夫妻にもあつくお礼を申し上げたい。

杉本鉞子の取材を始めたときには、鉞子の娘である小寺花野と清岡千代野はすでに故人でそれぞれの夫君も亡くなっていたが、花野の娘（鉞子の孫娘）森野郁子さんは神戸市に健在で貴重な資料を提供していただいた。また花野の長男敬成さんの妻小寺富美子さんからはシンシナティやニューヨーク時代の鉞子の貴重な写真を提供していただいた。鉞子の兄央（平十郎）のお孫さんにあたる牧浦浩子さんと夫君の牧浦昇さん（大阪常磐教会牧師）からは祖父の資料を見せていただき、大叔母にあたる鉞子についての思い出話を伺うことができた。

鉞子が五年間過ごした浅草では、日本基督教団浅草教会の小島仰太（こうた）牧師と「浅草教会の百二十年」の編集・執筆にあたられた浅草生まれの松井信行氏（恵泉女学園中学・高等学校教諭）から、浅草美以美小学校や浅草教会について貴重なお話をお聞きすることができた。その助言で、青山学院資料センターが保存しているメソジスト監督教会日本婦人伝道会の年報その他の関係資料を閲覧させてもらった。その際、事務長の伝農和子氏から懇切丁寧なご協力をいただいた。また筆者になじみの薄かった浅草の裏通りや樋口一葉が浅草に遺した足跡を何度も労をいとわず案内してくれたのは、江戸の文化に詳しい浅草在住の友人国井政信氏である。それは鉞子が五年間過ごした浅草とはどういうところだったのか

を知る貴重な手がかりになった。

杉本鉞子が渡米して住んだオハイオ州シンシナティやニューヨークでは、町の公共図書館や大学図書館に遺されている関係資料が参考になった。青山学院の姉妹校デポー大学のアーカイブス検索では同大学理事の飯久保廣嗣氏のご助力をいただいた。鉞子が二度にわたり通算十二年間を過ごしたシンシナティでは、在米五十年にもなるシンシナティ日本研究センターの田中欣二氏のお世話になった。あらためてお礼申しあげたい。

その半生をほとんど鉞子に捧げたといってもいいフローレンス・ウイルソンは、自分のことを一切記録に残していない。彼女の生まれ故郷さえ不明だったのだが、フローレンスが卒業した「デポー・カレッジ」がニューオールバニーの「デポー女学院」であったことをつきとめ、道が開けた。ニューオールバニーは、十九世紀半ばオハイオ川の蒸気船建造で栄えた町であったが、今はその繁栄の面影はない。フローレンスが鉞子に会ったころにはすでに、町の繁栄を彩ったオペラ・ハウスも色あせていたし、デポー女学院も廃校になっていた。シンシナティからニューオールバニーまでオハイオ川を蒸気船で半日の距離にあったが、フローレンスは鉞子を生まれ故郷へ案内する気にならなかったであろう。

静かな町の公共図書館のアーカイブスで、彼女について記したデポー女学院の記録や当

時の新聞記事などをさがしあててほっとしたあと、人通りのない夜の街中で一軒のレストランを見つけて入った。店の中は打って変わって町の紳士淑女で賑わっていたが、初老の女主人は一人客の私に快く応対してくれた。フランス料理のディナーコースが二十五ドル（当時二千円）だった。アスパラガスのクリームスープにはじまり緑豊かな野菜サラダ、牛肉の赤ワイン煮、デザート、コーヒーと実に美味しかった。女主人はフローレンス・ウイルソンのことは知らなかったが、見知らぬ客人にたいして心温かく礼節そのものだった。心の中で私は「この町にフローレンスありき」の感を強くした次第である。

杉本鉞子について書くことを強くすすめてくれたのは、昭和史に関する数々の労作を書いておられる中田整一氏である。執筆にあたってしばしば貴重な助言をいただいた。

また、講談社の中村勝行氏からは数々の厳しくかつ的確な御指摘をいただいた。紙面をかりて感謝の意を表させていただきたい。

二〇一三年早春、孫娘のすこやかな成長を願いつつ

内田義雄

文庫版あとがき

越後平野を流れる信濃川の土手に「武士の娘」文学碑がたっている。平成八年（一九九六年）三月、当時の駐日アメリカ大使夫人、ジョーン・モンデールさんが長岡を訪れ、杉本鉞子を「日米友好親善の先駆者（パイオニア）」と讃え、文学碑のそばに二本のハナミズキ（ピンクと白）を植樹した。ジョーン・モンデールは陶芸家でもあり、美術振興に情熱を注いだ知性と気品にあふれた女性として知られている。杉本鉞子の業績をよく理解しており、『武士の娘』も読んでいたであろう。それまでも日本に関心をもつ教養あるアメリカ人にとって、『武士の娘』は必読書のひとつといわれてきた。

この八月、私の著書を原案にして企画されたＮＨＫ ＢＳ１スペシャル『戦後七〇年 武士の娘・鉞子とフローレンス～奇跡のベストセラーを生んだ日米の絆～』が放送される。私はこのたびこのテレビ番組の制作を手伝うことができ、幸いであった。

杉本鉞子とフローレンス・ウイルソンのふたりは、一八九八年（明治三十一年）アメリ

カのオハイオ州シンシナティで出会って以来、日本とアメリカの文化の違いや摩擦を見すえながら、人間の心や価値観には大した隔たりはなくむしろ共有できることを知った。その結晶が『武士の娘』（*A Daughter of the Samurai*）の出版であった。

「稲垣家の梅の木」と呼ばれる二本の古木が長岡市の新潟大学教育学部附属幼稚園の前庭にある。何本かの添え木に支えられ、今にも朽ち果てそうな黒い古木である。その由来を調べて書かれた中学生の作文が残っている。

「校門のそばに、何やらいわくありそうな二本の紅梅の古木があります。その梅の木は、毎年春になると、それはもう見事な花を咲かせます。今年の春もまた、その梅の花はまるで当然のように、紅い花と香りを、空いっぱいに誇らしげに広げました」

「二本の梅の木は、昔からの厳しい冬の雪の重



「武士の娘」文学碑を訪れたモンデール駐日大使夫人（大久保きぬよ撮影　一般社団法人「杉本鉞子研究会」所蔵）

みや強い風などによって、幹に痛々しい傷跡や大きな穴を残しています。またこの二本の木のうちの一本の幹が地面にななめにつきささったようになっています」（新潟大学教育学部附属長岡中学校三年金山恭子「校庭の紅梅と『武士の娘』」『第46回全国小・中学校作文コンクール　作文優秀作品集』読売新聞社編、一九九七年）

金山恭子さんは郷土の古老や研究者たちを訪ね歩き、その梅の木は長岡藩家老稲垣平助の屋敷の庭に植えてあったものであることをつきとめる。稲垣平助は『武士の娘』を書いた杉本鉞子の父である。明治三十三年（鉞子がアメリカへ旅立った二年後）、鉞子が生まれた稲垣邸の跡地に新潟県女子師範学校が建てられたが、稲垣家で女中をしていた「お松さん」という老女が自ら志願して学校の用務員になり、この梅の木を守り続けたという。これは昭和四年墓参りのため長岡へ帰省したときに鉞子が語った話として伝えられている。その後も心ある人たちがこの紅梅を残そうと努力し続け、昭和二十年八月一日夜のアメリカ軍による長岡大空襲でも、梅の木は焼かれることなく生き残った。戦後、女子師範学校が新潟大学教育学部となって移転したとき、梅の木も一緒に新しい移転先へ移植され今日にいたっている。

作文のなかで印象深いのは戦前の女子師範学校の卒業生たちの話である。特に私が心打



稲垣家の梅の木、長岡市新潟大学附属幼稚園前庭（筆者撮影）

たれたのは丸山さんという卒業生が語った次の言葉である。

「どのような時代でも、どんなささいな事でもその本当の由来を知っておくことが大切なのですよね。……今、あの木を見ていると、根っこがしっかりしているでしょう。どんな台風がきてもだいじょうぶ。枝葉は生えてきます。根っこがしっかりしていることが何事も大切だという象徴なのですよね」

「稲垣家の梅の木」は、まさに鉞子の不屈の心を支えてきたものだったのである。

拙著の出版以来、多くの方々から数々の批評や感想をいただいた。ほとんどが「武士の娘」杉本鉞子の生き方に共感し賞賛するものであっ

た。紙面をかりて篤くお礼申し上げたい。

拙著は、鉞子が暮らしたシンシナティやニューヨークでも関心をよんだ。ニューヨークでは、百十年前に高峰譲吉らが創設した伝統ある「日本クラブ」（佐藤元広事務局長）で話をする機会をいただいた。日米の出席者の多くは、鉞子がかつてこの日本クラブ婦人部で活躍し、ニューヨークで『武士の娘』を書いて出版したことをあまり知らなかったが、話し終わると一様にたいへん感銘をうけたと感想を語っておられた。

こうして内外で改めて、杉本鉞子『武士の娘』が果たしてきた歴史的意味への認識を高めていただいていることは、筆者にとっては望外の喜びである。

新聞に掲載された書評のなかで、神林恒道さん（大阪大学名誉教授、「にいがた文化の記憶館」館長）からは、過分の評価をいただいた。

「半自伝的小説ともいわれる『武士の娘』は先進国だった欧米の上からの目線「啓蒙」ではなく、異なる文化の相互「理解」のためにかかれたたぐいまれなる著作である。……この評伝は徹底して資料にあたり、鉞子の生き方をその周辺の事情とからめて見事に描き出している」（「新潟日報」、平成二十五年四月二十八日付）

また中島誠之助さん（古美術鑑定家）はこう書いておられる。

「（この本は）戊辰戦争以来の長岡の風土とアメリカの南北戦争から始まるオハイオ州シンシナティの歴史が全編の骨格になっている。……夜具に寝るときは体を「き」の字にして横たえることまで厳しく躾られた武士の娘がアメリカへ渡り、社会の習慣や価値観のちがいという視点で女性の地位を冷静に比較し、少女時代に身に付けた習慣を守りながらアメリカ人の日常を見て日本を考える。戊辰戦争の惨禍を味わった長岡は明治政府の忠君愛国教育により主戦派の河井継之助を有名にしたが、和平派の稲垣平助は知られていない。鉞子は平助の娘なのだ。アメリカで鉞子をわが子の如く慈しんだフローレンス・ウイルソンもまた南部に同情的な町で北部のリンカーンを支持した少数派の父を持つのだ」（「産經新聞」、同年六月二十二日付）

佐藤優さん（作家、元外務省主任分析官）は、戦時中に刊行された日本語版に注目し、こう指摘された。

「鉞子は「武士の娘」として日本の伝統に固執するが、同時にキリスト教徒として普遍的世界観を持つハイブリッドな人間だったのである。『武士の娘』の邦訳は太平洋戦争中の１９４３年に長崎書店から刊行された。……長崎書店は老舗のキリスト教出版社で、社長の長崎次郎は反骨の知識人だ。『武士の娘』には、英文学者で作家の阿部知二が〈過去に

於いて我々がいかに正しかったか、ということを示す大きな歴史的証左である〉という米国を非難する序文を書いている。長崎と阿部は、このような手法で検閲官を欺き、鉞子のリベラルな思想を読者に届けることに成功した。『武士の娘』の刊行は戦時下のキリスト教系知識人による抵抗の証左でもある」（「アエラ」、同年六月十七日号）

私は著書の中で、一九二五年（大正十四年）ニューヨークで出版され賞賛された『武士の娘』が、いかにして書かれたかについて探求している。それは、今回の文庫版のサブタイトルにもその名を掲げたアメリカ婦人フローレンス・ウイルソンの存在である。多くの読者がこの事実に注目したはずである。久保拓也さん（金沢大学准教授）の次の評は正鵠を射たものである。

「鉞子とフローレンスのまさに『運命的』な出会いには特に心を引かれる。真の意味で献身的に鉞子を支え、鉞子の英文を磨き上げ、米国民の心の奥にも届くよう、一層の輝きを与えたのは彼女であった。運命を恨まず、またいたずらにあらがいもせず、受け入れてたくましく生き抜こうとする鉞子に、自らにも共通するひたむきさと強さ、そして優しさを見いだしたのだろう。無私の心と誠実さに貫かれ、いささかも揺れ動くことがなかったフ

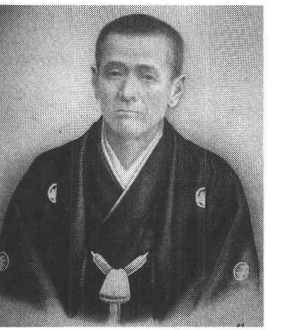
ローレンスの物語は、『触れられなかった』からこそ一層、読むものの興味を誘う」（「沖縄タイムス」、同年五月四日付ほか。共同通信による配信）

鉞子やフローレンスに関する資料は実に少ない。それだけに執筆後も新たな資料に出会うと殊のほか嬉しくなる。

最近、コロンビア大学の機関誌「コロンビア・デーリー・スペクテーター」のファイルに鉞子が担当する「日本の歴史と文化」の講義概要を紹介する記事（一九二三年九月二十六日付）を見つけたときには、「やはり鉞子はここにいたのだ」という実感が改めて湧いてきた。

シンシナティでは、鉞子が親しく交流していた隣人の老将軍と娘ヘレン（『武士の娘』二十「となりびと」）の思い出を、将軍の孫娘にあてて綴った鉞子の手紙を大事に保存している老紳士に出会った。手紙にはヘレンがその後ニューヨークへ移った鉞子を訪ねてきたが、『武士の娘』出版前に亡くなったことが記されていた。鉞子が人生で出会った人たちをずっと気遣っていたことがよくわかるのである。

長岡では家老稲垣平助の腹心で護衛役だった原巳之太（『武士の娘』では「蓑田」の名で



『武士の娘』の爺や（原芳太）の肖像（長岡市原家所蔵、筆者撮影）

登場）の御子孫に会った。巳之太の息子芳太が「爺や」だと鉞子はメモを残しているが、その肖像を描いたといわれる掛け軸が原家に保存されていた。芯の強さを秘めながらいかにも優しそうで温厚な、鉞子が描いている「爺や」の面影そのものだった。

本物の武士は剣を抜かずに勝つというが、鉞子のリベラルで非戦の思想は父平助の周囲にいた武士たちの謙虚な生き様を見て学んだのだと思う。鉞子に半生記を書くことをすすめたクリストファー・モーレーが珠玉の一篇と賞賛した「戸田さん」の話（『武士の娘』四「旧と新」）は、明治になって生きるためにさまざまの仕事に就きながら武士の矜持を失わず、淡々と人生に挑戦する人物を描き、「武士とはこういうものだ」という見本を私たちに教えてくれる。

また、フローレンスが英語教師として雇われたころの長岡中学の同僚で、山本五十六（元連合艦隊司令長官）が「生涯の師」として尊敬した本富安四郎は、幕末長岡藩で稲垣平助率いる「和平派」（恭順派）の重臣の一人だった本富寛之丞（戦いが始まると銃士隊長と

して参戦）の三男である。清貧のなか権力におもねらない反骨の教師として知られている。鉞子は直接接することはなかったとしても、本富父子のことは知っていたであろう。

『武士の娘』で鉞子は「民主主義の精神」（The Spirit of Democracy）や「民主主義的規則」（Democratic Rules）に言及し、武士の教育を受けた日本人にはそれを受け入れる素養が十分あることを熱っぽく語っている。

六歳のとき『四書』（大学、中庸、論語、孟子）を学んだ菩提寺の住職大道長安師について、鉞子は、「このお方は、住職としては忠実であられましたけれど、一方真実のためには、赤貧をも嘲笑をもいとわず、『清契の群』にくみしておられたのだと知りました」（ちくま文庫『武士の娘』六「お正月」六三頁）と書いている。そもそも「清契」という漢字は一般の辞書には載っていないが、諸橋轍次『大漢和辞典』によれば、「清らかなちぎり」「清い交わり」の意味である。大道長安は、キリスト教の教えをもとりこんだ新しい仏教を唱え仏教会から破門されたが、同じ信念を持つ人たちと「清契の群」にくみしたというのである。漢学の素養があった鉞子が大岩美代の翻訳を手伝わなかったら、こんな訳は生まれなかっただろう。興味深いのは、この『清契の群』の英文で、「the Army of the

Few」即ち「少数者の集団」となっている。少数意見や異議を申し立てる人たちの意味である。信念のためには、「異端」「異教」といわれてもかまわない、赤貧も嘲笑もいとわない、信ずる我が道をいくだけである。そういう人たちをさしている。これこそ「民主主義の精神」だと鉞子は書いているのである。

民主主義というと、「なんでも多数決」と思っている人が多いが、多数決の決着というのは、意見をたたかわして、どうでしても決めなければならないときの手続きに過ぎず、実は、そのプロセスが大事なのである。民主主義の本質はなにかといえば、少数意見や異議申し立てを尊重することにある。民主主義の「個人の尊重」とはそういうことなのである。

しかし、戦時中に出版された『武士の娘』日本語版（大岩美代訳）では、敵国アメリカの国是である「デモクラシー」をそのまま訳すわけにゆかなかったので、「古い日本には、厳格のうちにもこうして四海同胞の精神は脈々と流れていたわけでございます」（ちくま文庫『武士の娘』七〇頁）という苦肉の末の訳になった。だが原書を直訳すれば、「かくして古い日本には民主主義の精神が生きていたのです」となる。

鉞子は、大道長安のエピソードのなかで民主主義の本質をさりげなく語り、そうした生

き方をした大道長安師を生涯尊敬していた。杉本鉞子ほど、日米戦争という生涯最大の不幸と犠牲のあと制定された「日本国憲法」を歓迎し、大事に思っていたひとはいなかっただろうと思う。

国際的にも国内的にも方向を失い混迷を深めている今日の日本にとって、『武士の娘』は「日本人とはなにか」を考える大きなヒントを与えてくれると私は信じている。

二〇一五年四月、「稲垣家の梅の木」の満開を讃えて

内田義雄

本書は二〇一三年に小社より刊行された、『鉞子　世界を魅了した「武士の娘」の生涯』を文庫化にあたり、改題したものです。

内田義雄―1939年、新潟県長岡市生まれ。62年、東京大学文学部西洋史学科卒業後、NHK入局。新潟放送局、報道局外信部、サイゴン・ニューヨーク特派員。「ニュースセンター9時」編集責任者、スペシャル番組プロデューサーを歴任。96年退職。
主な著書に「聖地ソロフキの悲劇 ラーゲリの知られざる歴史をたどる」（NHK出版）、「戦争指揮官リンカーン　アメリカ大統領の戦争」（文春新書）などがある。

講談社＋α文庫 武士の娘（ぶし　むすめ）
―日米の架け橋となった鉞子（えつこ）とフローレンス
内田義雄（うちだよしお）
©Yoshio Uchida 2015

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

2015年6月22日第1刷発行

発行者――鈴木 哲
発行所――株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 編集(03)5395-3532
販売(03)5395-4415
業務(03)5395-3615
デザイン――鈴木成一デザイン室
カバー印刷――凸版印刷株式会社
印刷――慶昌堂印刷株式会社
製本――株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取り替えします。
なお、この本の内容についてのお問い合わせは
第一事業局企画部「＋α文庫」あてにお願いいたします。
Printed in Japan ISBN978-4-06-281605-2
定価はカバーに表示してあります。

大空のサムライ上 死闘の果てに悔いなし
坂井三郎
880円 G 11-4
世界的名著、不滅のベストセラーが新たに甦った！ 撃墜王坂井と戦友たちの迫真の記録

大空のサムライ下 還らざる零戦隊
坂井三郎
880円 G 11-5
絶体絶命！ 撃墜王坂井の、決死の生還クライマックス。日本には、こんな強者がいた!!

血と抗争 山口組三代目
溝口敦
880円 G 33-1
日本を震撼させた最大の広域暴力団山口組の実態と三代目田岡一雄の虚実に迫る決定版！

山口組四代目 荒らぶる獅子
溝口敦
920円 G 33-2
襲名からわずか202日で一和会の兇弾に斃れた山口組四代目竹中正久の壮絶な生涯を描く！

武闘派 三代目山口組若頭
溝口敦
880円 G 33-3
「日本一の親分」田岡一雄・山口組組長の「日本一の子分」山本健一の全闘争を描く!!

撃滅 山口組vs一和会
溝口敦
840円 G 33-4
四代目の座をめぐり山口組分裂す。「山一抗争」の経過。日本最大の暴力団を制する者は誰だ!?

ドキュメント 五代目山口組
溝口敦
840円 G 33-5
「山一抗争」の終結、五代目山口組の組長に君臨したのは!? 徹底した取材で描く第五弾!!

武富士 サラ金の帝王
溝口敦
781円 G 33-6
庶民の生き血を啜る消費者金融業のドンたちの素顔とは!? 武富士前会長が本音を語る!!

食肉の帝王 同和と暴力で巨富を摑んだ男
溝口敦
860円 G 33-7
ハンナングループ・浅田満のすべて！ ㊙担当も驚く、日本を闇支配するドンの素顔!!

池田大作「権力者」の構造
溝口敦
838円 G 33-8
創価学会・公明党を支配し、世界制覇をも目論む男の秘められた半生を赤裸々に綴る!!

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります

新版・現代ヤクザのウラ知識	溝口敦	暴力、カネ、女…闇社会を支配するアウトローたちの実像を生々しい迫力で暴き出した！	838円 G 33-10
「ヤクザと抗争現場」溝口敦の極私的取材帳	溝口敦	抗争の最中、最前線で出会った組長たちの素顔とは？ 著者が肌で感じ記した取材記録！	838円 G 33-11
細木数子 魔女の履歴書	溝口敦	妻妾同居の家に生まれ、暴力団人脈をバックに「視聴率の女王」となった女ヤクザの半生！	760円 G 33-12
*昭和梟雄録	溝口敦	横井英樹、岡田茂、若狭得治、池田大作と矢野絢也…昭和の掉尾を飾った悪党たちの真実!!	876円 G 33-13
*四代目山口組 最期の戦い	溝口敦	巨艦・山口組の明日を左右する「最後の極道」竹中組の凄絶な死闘と葛藤を描く迫真ルポ！	930円 G 33-14
*ヤクザ崩壊 侵食される山口組	溝口敦	日本の闇社会を支配してきた六代目山口組の牙城を揺るがす脅威の「半グレ」集団の実像	790円 G 33-15
六代目山口組ドキュメント 2005～2007	溝口敦	暴排条例の包囲網、半グレ集団の脅威のなか、日本最大の暴力団の実像を溝口敦が抉る！	800円 G 33-16
日本人は永遠に中国人を理解できない	孔健	「お人好しの日本人よ――」これぞ、中国人の本音だ！ 誰も語ろうとしなかった驚くべき真実	640円 G 39-1
なぜ中国人は日本人にケンカを売るのか	孔健	非難合戦を繰り返す日本と中国。不毛な争いを止め、真の友人になる日はやってくるのか？	648円 G 39-3
世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち	副島隆彦	誰も書けなかった、日本を牛耳る危険な思想と政策を暴く!! アメリカは日本の敵か味方か	1000円 G 40-1

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります

古代日本列島の謎
関 裕二
日本人はどこから来て、どこへ行こうとしているのか。日本と日本人の起源を探る好著！
781円 G 211-1

「天皇家」誕生の謎
関 裕二
『日本書紀』が抹殺した歴史に光を当て、ヤマト建国と皇室の原点を明らかにする問題作！
720円 G 211-3

「女性天皇」誕生の謎
関 裕二
推古、皇極、持統…時代の節目に登場した女帝の生涯からヤマト建国の謎が明らかになる！
686円 G 211-4

「祟る王家」と聖徳太子の謎
関 裕二
聖徳太子はなぜ恐れられ、神になったのか。隠された「天皇と神道」の関係を明らかにする
686円 G 211-5

伊勢神宮の暗号
関 裕二
「ヤマト建国」の謎を解く鍵は天武天皇と持統天皇にある！ 隠された天孫降臨の真相とは
700円 G 211-6

出雲大社の暗号
関 裕二
大きな神殿を建てなければ、暴れるよ。ヤマト朝廷を苦しめ続けた、祟る出雲神に迫る！
700円 G 211-7

古代史謎めぐりの旅 神話から建国へ
関 裕二
古代への扉が開く！ 出雲の国譲り、邪馬台国、縄文、ヤマト建国のドラマを体験する旅へ
920円 G 211-8

古代史謎めぐりの旅 ヤマトから平安へ
関 裕二
古代を感じる旅はいかが？ ヤマトを感じる奈良、瀬戸内海、伊勢、東国、京都、大阪を楽しむ
920円 G 211-9

東大寺の暗号
関 裕二
「お水取り」とは何なのか？ ヒントを握るといわれる早良親王を、古代案内人・関裕二が語る
750円 G 211-10

「与える」より「引き出す」！ ユダヤ式「天才」教育のレシピ
アンドリュー・J・サター ユキコ・サター
アメリカのユダヤ人生徒は全員がトップクラスか天才肌。そんな子に育てる7つの秘訣
670円 G 212-1

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

＊ルーヴル美術館 女たちの肖像
描かれなかったドラマ
川島ルミ子
ルーヴル美術館に残された美しい女性たちの肖像画。彼女たちの壮絶な人生とは
630円 G 219-3

徳川幕府対御三家・野望と陰謀の三百年
河合 敦
徳川御三家が将軍家の補佐だというのは全くの誤りである。抗争と緊張に興奮の一冊！
667円 G 220-1

自伝大木金太郎 伝説のパッチギ王
大木金太郎 太刀川正樹 訳
'60年代、「頭突き」を武器に、日本中を沸かせたプロレスラー大木金太郎、感動の自伝
848円 G 221-1

マネジメント革命 「燃える集団」をつくる日本式「徳」の経営
天外伺朗
指示・命令をしないビジネス・スタイルが組織を活性化する。元ソニー上席常務の逆転経営学
819円 G 222-1

人材は「不良社員」からさがせ 奇跡を生む「燃える集団」の秘密
天外伺朗
仕事ができる「人材」は「不良社員」に化けている！ 彼らを活かすのが上司の仕事だ
667円 G 222-2

エンデの遺言 根源からお金を問うこと
河邑厚徳＋グループ現代
ベストセラー「モモ」を生んだ作家が問う。「暴走するお金」から自由になる仕組みとは
850円 G 223-1

本がどんどん読める本 記憶が脳に定着する速習法！
園 善博
「読字障害」を克服しながら著者が編み出した、記憶がきっちり脳に定着する読書法
600円 G 224-1

情報への作法
日垣 隆
徹底した現場密着主義が生みだした、永遠に読み継がれるべき25本のルポルタージュ集
952円 G 225-1

ネタになる「統計データ」
松尾貴史
ふだんはあまり気にしないような統計情報。松尾貴史が、縦横無尽に統計データを「怪析」
571円 G 226-1

原子力神話からの解放 日本を滅ぼす九つの呪縛
高木仁三郎
原子力という「パンドラの箱」を開けた人類に明日は来るのか。人類が選ぶべき道とは？
762円 G 227-1

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります

大きな成功をつくる超具体的「88」の習慣
小宮一慶
将来の大きな目標達成のために、今日からできる目標設定の方法と、簡単な日常習慣を紹介
562円 G 228-1

「仁義なき戦い」悪の金言
平成仁義なき戦い研究所 編
名作『仁義なき戦い』五部作から、無秩序の中を生き抜く「悪」の知恵を学ぶ！
724円 G 229-1

エネルギー危機からの脱出
世界と日本の絶対支配者ルシフェリアン
枝廣淳子
目指せ「幸せ最大、エネルギー最小社会」。データと成功事例に探る「未来ある日本」の姿
714円 G 230-1

「3年で辞めさせない！」採用
管理職になる人が知っておくべきこと
ベンジャミン・フルフォード
著者初めての文庫化。ユダヤでもフリーメーソンでもない闇の勢力…次の狙いは日本だ！
695円 G 232-1

IDEA HACKS！
今日スグ役立つ仕事のコツと習慣
樋口弘和
膨大な費用損失を生む「離職率が入社3年で3割」の若者たちを、戦力化するノウハウ
600円 G 233-1

TIME HACKS！
劇的に生産性を上げる「時間管理」のコツと習慣
内海正人
伸びる組織は、部下に仕事を任せる。人事コンサルタントがすすめる、褒野からの成長戦略
638円 G 234-1

STUDY HACKS！
楽しみながら成果が上がるスキルアップのコツと習慣
原尻淳一
小山龍介
次々アイデアを創造する人の知的生産力を高める89のハッキング・ツールとテクニック！
733円 G 0-1

整理HACKS！
1分でスッキリする整理のコツと習慣
小山龍介
同じ努力で3倍の効果が出る！ 創造的な時間を生み出すライフハッカーの秘密の方法!!
733円 G 0-2

小山龍介
無理なく、ラクに続けられる。楽しみながら勉強を成果につなげるライフハックの極意！
733円 G 0-3

小山龍介
何も考えずに、サクサク放り込むだけ。データから情報、備品、人間関係まで片付く技術
733円 G 0-4

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります

読書HACKS！
知的アウトプットにつなげる超インプット術
原尻淳一
苦手な本もサクサク読める、人生が変わる！知的生産力をアップさせる究極の読書の技法
740円 G 0-5

＊図解 人気外食店の利益の出し方
ビジネスリサーチ・ジャパン
マック、スタバ……儲かっている会社の人件費、原価、利益。就職対策・企業研究に必読！
648円 G 235-1

＊図解 早わかり業界地図2014
ビジネスリサーチ・ジャパン
あらゆる業界の動向や現状が一目でわかる！250社の最新情報をどの本より早くお届け！
657円 G 235-2

すごい会社のすごい考え方
夏川賀央
グーグルの奔放、IKEAの厳格……選りすぐった8社から学ぶ逆境に強くなる術！
619円 G 236-1

60000人が就職できた「習慣」
自分の花を咲かせる64カ条
細井智彦
受講者10万人。最強のエージェントが好不況に関係ない「自走型」人間になる方法を伝授
743円 G 237-1

早稲田ラグビー 黄金時代
2001-2009 主将列伝
林 健太郎
清宮・中竹両監督の栄光の時代を、歴代キャプテンの目線から解き明かす。蘇る伝説!!
838円 G 238-1

できる人はなぜ「情報」を捨てるのか
奥野宣之
50万部大ヒット『情報は1冊のノートにまとめなさい』シリーズの著者が説く取捨選択の極意！
686円 G 240-1

憂鬱でなければ、仕事じゃない
見城 徹
藤田 晋
日本中の働く人必読！「憂鬱」を「希望」に変える福音の書
648円 G 241-1

絶望しきって死ぬために、今を熱狂して生きろ
見城 徹
藤田 晋
熱狂だけが成功を生む！二人のカリスマの生き方そのものが投影された珠玉の言葉
648円 G 241-2

ディズニーランドが日本に来た！
「エンタメ」の夜明け
馬場康夫
ディズニーランドを日本に呼ぶ「陰の立て役者」となった男たちの痛快ストーリー
695円 G 242-1

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります

箱根駅伝 勝利の方程式 7人の監督が語るドラマの裏側
生島 淳
勝敗を決めるのは監督次第。選手の育て方、10人を選ぶ方法、作戦の立て方とは？
700円 G 243-1

箱根駅伝 勝利の名言 監督と選手34人、50の言葉
生島 淳
テレビの裏側にある走りを通しての人生。「箱根だけはごまかしが利かない」大八木監督（駒大）
720円 G 243-2

うまくいく人はいつも交渉上手
齋藤孝
ビジネスでも日常生活でも役立つ！ 相手も自分も満足する結果が得られる一流の「交渉術」
690円 G 244-1

ビジネスマナーの「なんで？」がわかる本 新社会人の常識 50問50答
山田千穂子
挨拶の仕方、言葉遣い、名刺交換、電話応対、上司との接し方など、マナーの疑問にズバリ回答！
580円 G 245-1

「結果を出す人」のほめ方の極意
谷口祥子
部下が伸びる、上司に信頼される、取引先に気に入られる！ 成功の秘訣はほめ方にあり！
670円 G 246-1

伝説の外資トップが教えるコミュニケーションの教科書
新 将命
根回し、会議、人脈作り、交渉など、あらゆる局面で役立つ話し方、聴き方の極意！
700円 G 248-1

口べた・あがり症のダメ営業が全国トップセールスマンになれた「話し方」
菊原智明
できる人、好かれる人の話し方を徹底研究し、そこから導き出した66のルールを伝授！
700円 G 249-1

小惑星探査機 はやぶさの大冒険
山根一眞
日本人の技術力と努力がもたらした奇跡。「はやぶさ」の宇宙の旅を描いたベストセラー
920円 G 250-1

「売れない時代」に売りまくる！ 超実践的「戦略思考」
筏井哲治
PDCAはもう古い！ どんな仕事でも、どんな職場でも、本当に使える、論理的思考術
700円 G 251-1

〝お金〟から見る現代アート
小山登美夫
「なぜこの絵がこんなに高額なの？」一流ギャラリストが語る、現代アートとお金の関係
720円 G 252-1

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります

9784062816052

ISBN978-4-06-281605-2

C0195 ¥840E (0)

講談社　定価：本体840円（税別）

1920195008409

武士の娘

内田義雄

■ ■

本書の主人公・杉本鉞子は、戊辰戦争で河井継之助と藩政をめぐり対立した長岡藩筆頭家老の娘。明治維新後、東京で教育を受け、結婚のため海を渡ったが、夫との早すぎる死別を体験する。しかし、鉞子はたよるべき人のいないアメリカで二人の娘をかかえて生きてゆくことを決意する。彼女のよき理解者、フローレンス・ウイルソンの協力を得て、1925年（大正14年）、無名の日本人女性が英語で書き下ろした自伝的小説『武士の娘』がアメリカで刊行され、その年のベストセラーとなった。ところが、『武士の娘』は戦前に日本語訳がでたあとでも母国ではごく一部の人たちにしか知られてこなかった。あの司馬遼太郎でさえその存在を知らず、〈杉本鉞子さんの自伝の見事さにおどろかされた。（中略）ひさしぶりにいい小説を読んだあとの文学的感動を覚えた〉と賛辞を送ったのは、アメリカで出版されてから42年後のことであった。杉本鉞子の数奇な生涯を描くノンフィクション。